仙台市文化財調査報告書第180集

仙台市宮城地区大倉
遺跡範囲確認調査報告書

――大原・下倉地区土地改良総合整備事業関連遺跡調査――

1994年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第180集

仙台市宮城地区大倉
遺跡範囲確認調査報告書

――大原・下倉地区土地改良総合整備事業関連遺跡調査――

１９９４年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市内には、現在700ヵ所余りの遺跡が登録されていますが、そのうち宮城地域内には約150ヵ所の遺跡が所在しております。しかし、今回調査を行ないました大倉地区を含む西部地区ではこれまで発掘調査例がなく、地区内の原始・古代の様子はあまり知られていませんでした。

しかし、近年、市道拡幅工事や今回の土地改良事業の実施等に伴う調査が実施され、少しづつではありますが地区の歴史が説き明かされてきております。

とくに、1991年に行なわれた熊ケ根地区の野川遺跡の調査では、約１万年前の縄文人が遺した石器の貯蔵跡が、県内で初めて発見されるという大きな成果がありました。今回の調査におきましても、遺跡範囲確認調査ということではありますが、中世の館跡や縄文時代の遺跡の性格が明らかになりました。

先人たちの遺した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、現代を生きる私たちの大きな責務であると考えます。文化財保護につきましては、地域の皆様の深いご理解とご協力が必要であり、これからの街づくりのなかでどのように開発との調和を図っていくべきか、皆さんとともに考えていきたいと思います。

最後になりましたが、今回の調査で多くのご協力をいただきました地元の皆様に、心より御礼申し上げる次第であります。

1994年３月

仙台市教育委員会
教育長　**東海林　恒　英**

例　　言

1．本書は、仙台市青葉区大倉地区での土地改良総合整備事業の実施に伴う、遺跡範囲確認調査の報告書である。

2．報告書作製にあたっての遺物整理・編集・執筆は工藤信一郎が担当したが、陶・磁器の産地同定・年代観については文化財課佐藤洋による。

3．本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の１：25,000「仙台市西北部」の一部を使用している。

4．本書中で使用した航空写真は、建設省国土地理院（1956年米軍撮影）のものを使用している。

5．本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

6．実測図中の水糸高は標高で統一してある。

7．実測図中の方位は磁北で統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

8．本書中で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＫ：土坑　　ＳＤ：堀・溝・溝状遺構　　Ｐ：ピット　　ＳＬ：土塁

ＳＸ：その他の遺構

9．本調査における出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

10．調査にあたって、下記の機関・方々よりご協力いただいた。（敬称略、順不同）

下倉土地改良事業共同施工委員会・宮城県土地改良事業団体連合会・社団法人宮城県農業公社

萱場　久・関　　昭・平　常雄

調　査　要　項

［一次調査］

1．対象遺跡　大原館跡・下大倉館跡・萱場遺跡

2．遺跡の所在地　仙台市青葉区大倉字下倉・大原地内

3．調査主体　仙台市教育委員会

4．調査担当　仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

5．担当職員　主事　齋野　裕彦　　教諭　高倉　祐一

6．調査期間　1989年5月8日～6月28日（実働33日）

7．調査面積　調査対象面積　250,000㎡

発掘調査面積　約1,000㎡

8．調査参加者　早坂　正　結城　順子　高橋美津子　結城ひろみ

結城みのる　小松けさい　結城むら子　結城　泰子

早坂かつ子　大貫　裕子　平　たみよ　結城　きよ

片桐さとの　結城さい子　片桐　しめ　結城つよせ

安達　すげ　大宮みつえ　大山のり子　米倉　節子

菅井　民子

［二次調査］

1．対象遺跡　大原新田遺跡・大貫遺跡・東沢目遺跡

2．遺跡の所在地　仙台市青葉区大倉字大原地内

3．調査主体　仙台市教育委員会

4．調査担当　仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

5．担当職員　主事　工藤信一郎　　教諭　稲葉　俊一

6．調査期間　1991年4月17日～5月22日（実働21日）

7．調査面積　調査対象面積　100,000㎡

発掘調査面積　約800㎡

8．調査参加者　小松けさい　高橋美津子　平　たみよ　片桐さとの

石垣けさえ　早坂かつ子　永島みよこ　大滝　昇

若生　洋子　高橋　弘子　村本　茂子　佐藤　悦子

［整理作業参加者］

浅若　広子　岩城いく子　菊地よしえ　関谷　礼子

森谷　愛子　島本　香織

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．関係遺跡の位置と環境……1
　1．関係遺跡の位置……1
　2．周辺の歴史的環境……2
Ⅲ．調査の経過と方法……7
Ⅳ．第 一 次 調 査（平成元年度－大原・下倉地区）……7
　1．調査の方法と経過……7
　2．大原地区の調査（No.1～No.9トレンチ・大原館跡）……7
　　(1)　調査区基本層序……10
　　(2)　発見された遺構……10
　　①　溝状遺構（No.1トレンチ）……10
　　(3)　大原館跡の調査（No.4トレンチ）……11
　　［館跡の形態］……11
　　［土　　塁］……11
　　［堀　　跡］……12
　　［平　　場］……12
　　［大原館跡に関する文献資料］……12
　　(4)　発見された遺物……17
　　①　土　　器……17
　　②　石　　器……20
　3．下倉地区の調査（No.10～No.15トレンチ・下大倉館跡）……24
　　(1)　調査区基本層序……24
　　(2)　発見された遺構……26
　　①　水 田 跡（No.13トレンチ）……26
　　②　溝状遺構（No.11トレンチ）……26
　　(3)　下大倉館跡の調査（No.10．No.11．No.15トレンチ）……27
　　［館跡の形態］……27
　　［土　　塁］……28
　　［堀　　跡］……28
　　［下大倉館跡に関する文献資料］……31

(4) 発見された遺物……36
① 土　　器……36
② 石　　器……37
V．第 二 次 調 査（平成三年度－大原地区）……38
1．調査の方法と経過……38
2．調査区基本層序……38
3．発見された遺構と遺物……41
(1) 発見された遺構……42
① 遺物包含層（№16トレンチ）……42
② 土　　坑（№24トレンチ）……42
(2) 発見された遺物……42
① 土　　器……42
② 石　　器……50
VI．ま　と　め……51

挿図・表　目　次

第１図　関係遺跡と周辺の遺跡 ……3
第２図　大倉地区土地改良総合整備事業
年次施工計画図 ……5・6
第３図　大原地区遺跡範囲確認調査
トレンチ配置図 ……8
第４図　基本層序・各調査トレンチ
土層柱状模式図 ……9
第５図　ＳＤ01平面図・断面図(№１トレンチ) …10
第６図　大原館跡現況平面図・
試掘トレンチ位置図 ……13
第７図　大原館跡土塁・堀跡平面図 ……14
第８図　大原館跡土塁・堀跡
(№４トレンチ) ……15・16
第９図　大原館跡周辺現況平面図 ……18
第10図　大原館跡関係地籍図
(明治19年-1886-頃作成) ……19
第11図　出土遺物・土器(1) ……21
第12図　出土遺物・土器(2) ……22
第13図　出土遺物・石器 ……23
第14図　調査トレンチ土層柱状模式図 ……24
第15図　下倉地区遺跡範囲確認調査
トレンチ配置図 ……25
第16図　№13トレンチ平面図及び
南壁セクション図 ……26
第17図　№11トレンチ平面図及び
溝状遺構セクション図 ……27
第18図　下大倉館跡堀跡(ＳＤ01)・
溝跡(ＳＤ02)平面図及び
セクション図(№10トレンチ) ……28
第19図　下大倉館跡現況平面図・
調査トレンチ位置図 ……29
第20図　下大倉館跡土塁・堀跡平面図 ……30
第21図　下大倉館跡周辺現況平面図 ……32
第22図　下大倉館跡関係地籍図
(明治19年-1886-頃作成) ……33
第23図　出土遺物　土師質土器・陶磁器 ……36
第24図　出土遺物　石器 ……37
第25図　大原地区遺跡範囲確認調査
トレンチ配置図 ……39
第26図　各調査トレンチ土層柱状模式図 ……40

第27図　№24トレンチ平面図及び
北壁セクション図 ……42
第28図　出土遺物・土器(1) ……43
第29図　出土遺物・土器(2) ……44
第30図　出土遺物・土器(3) ……45
第31図　出土遺物・土器(4) ……46
第32図　出土遺物・土器(5) ……47
第33図　出土遺物・土器(6) ……48
第34図　出土遺物・石器(1) ……49
第35図　出土遺物・石器(2) ……50
表１　遺跡範囲確認調査成果一覧(大原地区) …… 7
表２　出土石器観察表(第13図) ……20
表３　遺跡範囲確認調査成果一覧(下倉地区) ……24
表４　遺跡範囲確認調査成果一覧
(大原地区・２次調査) ……38
表５　各調査トレンチ土層注記表(第26図) ……41

写真図版　目　次

写真１　大原地区航空写真(1956年撮影) ……54
写真２　下倉地区航空写真(1956年撮影) ……55
写真３　№１トレンチＳＤ01完掘状況
写真４　№１トレンチＳＤ01セクション
写真５　大原館跡遠景(南西側熊ケ根から) ……56
写真６　大原館跡　№４トレンチ(北側から)
写真７　大原館跡　土塁ＳＬ01・堀ＳＤ01
写真８　大原館跡　堀ＳＤ01セクション ……57
写真９　下倉地区(１次調査)№10トレンチ・溝跡
写真10　下倉地区(１次調査)№11トレンチ・溝跡
写真11　下大倉館跡　遠景(北側から) ……58
写真12　下大倉館跡(№15トレンチ)堀跡検出状況
写真13　下大倉館跡(№10トレンチ)堀跡
写真14　下大倉館跡現地説明会 ……59
写真15　大原地区(２次調査)№５トレンチ
写真16　大原地区(２次調査)№９トレンチ
写真17　大原地区(２次調査)№22トレンチ
溝状遺構検出状況 ……60
写真18　大原地区(２次調査)№22トレンチ
溝状遺構半切状況
写真19　大原地区(２次調査)№16トレンチ
遺物包含層完掘後
写真20　大原地区(２次調査)№16トレンチ
西壁セクション ……61
写真21　大原地区(２次調査)№15トレンチ
(東側から)
写真22　大原地区(２次調査)№24トレンチ
(西側から)
写真23　大原地区(２次調査)№24トレンチ・
土坑 ……62
写真24　大原地区(１次調査)出土土器(第11図)
写真25　大原地区(１次調査)
出土土器(第12図１～９) ……63
写真26　大原地区(１次調査)
出土土器(第12図10～20)
写真27　下倉地区(１次調査)
出土遺物(第23図１～８) ……64
写真28　大原地区(２次調査)出土土器(第28図)
写真29　大原地区(２次調査)
出土土器(第29図１～６) ……65
写真30　大原地区(２次調査)
出土土器(第29図７～14)
写真31　大原地区(２次調査)
出土土器(第30図１～16) ……66
写真32　大原地区(２次調査)
出土土器(第30図17～20)
写真33　大原地区(２次調査)
出土土器(第31図) ……67
写真34　大原地区(２次調査)出土土器(第32図)
写真35　大原地区(２次調査)出土土器(第33図) …68
写真36　１次調査出土石器(第13図・第24図１) …69
写真37　１次調査出土石器(第24図２～４)
２次調査出土石器(第34図・第35図) ……70

Ⅰ．調査に至る経過

青葉区大倉地区は仙台市西北部に位置し、市内を東流する広瀬川の支流大倉川につくられた大倉ダムの下流域に位置する。標高は約180m～230m程となっている。

地区内の耕地は未整備のため機械の効率が悪く、農業の多様化、高度化に対応できない状況であった。そこで、土地利用効率を高め、都市近郊農業確立のため、仙台市青葉区宮城総合支所経済課により土地改良総合整備事業が計画され、下倉土地改良事業共同施工委員会の設立準備が進められていた。整備事業計画は平成元年度からの５年計画で、約60㌶を対象とするものであった。そこで、仙台市教育委員会では関係機関との協議を行ない、大倉地区土地改良総合整備事業に係る６遺跡について、遺跡詳細分布調査を仙台市の自主事業として実施することとした。

当該地域ではこれまで発掘調査例が無く、これまでの表面採集調査だけでは遺跡の性格および範囲は必ずしも明確ではなかった。そこで事業を実施するにあたって、遺跡保存のための協議資料を得ることを目的に、遺跡の範囲、遺構の分布、遺跡の性格等を調査した。

調査は、用排水路及び工法上切り土施工となる部分を中心として行ない、遺構の確認された地点については協議のうえ、整備事業の実施に際して地下遺構を傷つけることのないよう工法の変更及び設計の変更を行なっている。

調査は、整備事業の施工年次計画にあわせて、下倉地区と大原地区の２地区について、第一次調査を平成元年度、第二次調査を平成三年度と二か年にわたって実施することとした（第２図）。

Ⅱ．関係遺跡の位置と環境

１．関係遺跡の位置

遺跡の所在する下倉・大原地区は、仙台市の西北部の南奥羽山系の中に位置している。市内中心部からは国道48号線を山形方向に約18km、国道から分岐する市道熊ケ根定義線の東側沿線に位置している。ＪＲ仙山線熊ケ根駅からはおよそ北東約４kmの地点である。

事業計画地域内には、周知の遺跡として７遺跡が登録されていた。大倉川西岸の河岸段丘上にある下倉地区には、下大倉館跡が所在し、大倉川と青下川に挟まれた河岸段丘上にある大原地区には、東沢目遺跡・大貫遺跡・大原遺跡・大原新田遺跡・萱場遺跡・大原館跡が所在している。

宮城地域の地形を概観すると、西側には南奥羽山系の山並みが連なり、ここから派生する国見・七北田丘陵と蕃山・青葉山丘陵によって北と南を挟まれ、この間を開折して広瀬川が東流

している。広瀬川は、作並付近で新川川と合流し、青下川と大倉川が合流する熊ケ根付近では比高差50mにおよぶ深い峡谷を形成しながら蛇行している。愛子地区に入ると数段の河岸段丘を形成し、所謂愛子盆地を形成している。

遺跡は広瀬川の支流である大倉川につくられた大倉ダムの下流域の河岸段丘上に位置している。標高は、下倉地区では約222m～233m、大原地区では約175m～213mとなっている。

2．周辺の歴史的環境

大倉地区を含む広瀬川上流の河岸段丘上や丘陵上には、縄文時代を中心として多くの遺跡が分布している(第１図)。しかしこれまで発掘調査例が無く、出土遺物はいずれも表面採集によるもので、詳しい内容は不明である。

縄文時代の遺跡としては、大原地区西側を流れる青下川の対岸に野川遺跡がある。1991年に市道拡幅工事に伴う緊急調査が実施され、後期前半の遺物包含層の下層から、草創期のいわゆる「キャシュ（埋蔵物)」あるいは「デポ（一括埋納)」と呼ばれる、石器の一括貯蔵の痕跡を示す土坑２基が宮城県内で初めて検出されている。(注1)

弥生時代の遺跡は今のところ確認されていないが、古代の遺跡としては、檀ノ原Ｂ遺跡・町Ａ遺跡などがある。

中世の遺跡としては、大原館跡の西側広瀬川対岸に熊ケ根城跡があり、土塁や平場、堀跡などが遺っている。熊ケ根城跡は「仙台領古城書上」や「安永風土記」に、城跡の規模と共に国分氏家臣六丁目氏の居館であったことなどが記載されている。(注2)

城跡西側に隣接する興禅寺は、「安永風土記」に六丁目氏によって開基されたとあり、その墓所である五輪塔があると記されている。(注3)現在興禅寺にはこの五輪塔はみられないが、国分盛重とその次男の名の刻まれた墓石が開山碑とともに覆堂のなかにある。

藩政時代のいわゆる国分荘32ケ村のうち、宮城地域には作並村・熊ケ根村・大倉村・芋沢村・上愛子村・下愛子村・郷六村の７ケ村が含まれている。地域内の館跡の分布についてみると、各村ごとの街道沿いに位置しているものが多く、その多くは段丘上の平地に在りながら段丘崖を巧みに防御施設に利用し、平地側に土塁と堀を巡らせる構成となっている。伊達政宗による仙台開府以前の宮城地域は、国分氏の支配下にあったと考えられており、地域内に残る館跡についてもそのほとんどは国分氏に関係するものと考えられる。国分氏配下の家臣として国分氏系図に名のあるもののうち当地域に関係すると思われるのは、郷六氏（郷六村）・萱場氏（下愛子村）・小林氏（芋沢村）がある。また、「仙台領古城書上」や「安永風土記書出」の記述から、当地域に関係する国分氏の家臣としては、前者の他に大原館跡の館主とされる作並氏・下大倉館跡の館主とされる大倉氏のほか馬場氏・六丁目氏があり、館跡として古城書上では、郷六城・葛岡城・熊ケ根城など８カ城、風土記書出では若干の入れ替えなどがあって11カ城が記載され

No.	遺跡名	立地	種別	時代	備考	No.	遺跡名	立地	種別	時代	備考
1	**下大倉館跡**	**段丘**	**城館**	**中世、近世**		13	町C遺跡	段丘	包含地	縄文	
2	**東沢目遺跡**	**段丘**	**包含地**	**縄文**		14	檀ノ原C遺跡	段丘	包含地	縄文、古代	
3	大貫遺跡	段丘	包含地	縄文		15	町A遺跡	段丘	包含地	古代	
4	**大原遺跡**	**段丘**	**包含地**	**縄文**		16	町B遺跡	段丘	包含地	縄文、古代	
5	**大原新田遺跡**	**段丘**	**包含地**	**縄文**		17	野川遺跡	段丘	包含地	縄文(草・中・後)	草創期の石器一括埋納跡2基
6	**萱場遺跡**	**段丘**	**包含地**	**縄文**		18	熊ケ根城跡	段丘	城館	中世	
7	**大原館跡**	**段丘**	**城館**	**中世、近世**		19	興禅寺五輪塔	段丘	墓碑	中世	
8	大手門A遺跡	段丘	包含地	縄文(前)		20	折葉遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	
9	大手門B遺跡	段丘	包含地	縄文(中)		21	道半南遺跡	段丘	包含地	縄文、古代	
10	大手門C遺跡	段丘	包含地	縄文		22	白沢遺跡	段丘	包含地	古代	
11	檀ノ原A遺跡	段丘	包含地	縄文、古代		23	上清水遺跡	段丘	包含地	縄文(中)	
12	檀ノ原B遺跡	段丘	包含地	古代		24	田尻遺跡	段丘	包含地	縄文(中～晩)	

第1図　関係遺跡と周辺の遺跡

ている。(注4)

近世にはいると先の国分氏配下の諸氏のうち、大倉・萱場・郷六（のちの森田氏）の各氏は新たに伊達家に仕えて知行を与えられている。(注5)

仙台開府当初、仙台から最上領内に通じる道は「西道」とよばれ、関山越・二口越・笹谷越の三本の街道があった。関山越の街道についての初見は、正保二・三年（1644・45）作製の「奥州仙台城下絵図」において「愛子道最上街道」としてである。仙台藩では関山に坂下境目御番所、そして最初の宿場となる作並に作並宿御番所をおいて物資の移出入を取り締まっている。熊ケ根もまた街道沿いの宿のひとつであり、熊ケ根の字名のひとつとなっている「関」の由来について安永風土記－熊ケ根村書上「和光院寺跡」のなかで「往古ここに関所があり、その関所が廃止されたのちに和光院が開山され、関の地名もこれによる。」とある。

下大倉館の館主である大倉氏の一族が熊ケ根村に移り、関氏と称するようになるのは、この地名によるものである。

また、民俗芸能として下倉地区に「下倉の田植踊り」（昭和46年宮城県無形文化財指定）が伝えられている。その踊りの由来について、「安永年間に大倉民部という武将が大倉字宮前にある下倉神社を再建したさいに、武運と天下泰平並びにこの地の五穀豊穣を祈念するものとしてはじめられたもの」と伝えられている。先の大倉氏との関係は定かではないが、一族のものとして考えれば当地における大倉氏との関係を示すものといえる。

注1）約1万年前よりも古いとする年代観での草創期である。

注2）延宝年間（1673～1681）にだされた「仙台領古城書上」には、「平山　熊ケ根城　東西　三十間　南北五十間　城主　六丁目某」とある。また、安永三年（1774）にだされた「安永風土記－熊ケ根村書上」には、「たではら　古館　竪壱丁　横四十間　右ハ往古国分様家臣六丁目氏之御方御居館之由申伝候右年　相知不申候当時御百姓地ニ　成居申候事」とある。

注3）「一　開山之事　当寺ハ国分家盛重御家臣拾弐騎之内六丁目氏開基之由ニ御座候　右年号相知不申候……」「一　古墓所之事　一　五輪塔　弐ツ　国分家御家臣六丁目氏之墓所ニ御座候事」とある。

注4）「仙台領古城書上」のうち宮城地域分としては、郷六城（郷六村）・葛岡城（郷六村）・馬場城（芋沢村）・江六城（芋沢村）・こてん城（上愛子村）・おかな館城（大倉村）・三方川古城（大倉村）・熊ケ根城（熊ケ根村）の8カ城がある。

「安永風土記書出」のうち宮城地域分としては、古館（熊ケ根村）・御殿館（上愛子村）・御西館（下愛子村）・南館（下愛子村）・郷六館（芋沢村）・馬場館（芋沢村）・本郷館（芋沢村）・下大倉館（大倉村）・大原館（大倉村）・郷六館（郷六村）・葛岡城（郷六村）の11カ城がある。この他にこれらの文献に記載はないものの、作並村の平賀館・「芋沢七館」とよばれる芋沢村の原館や荒神館などを加えれば18カ城となり、まさに一村一城といえる多さである。

注5）伊達家世臣家譜巻十一森田、巻十二萱場、巻十五関による。

第２図　大倉地区土地改良総合整備事業年次施工計画図

Ⅲ．調査の経過と方法

調査区は、施工計画のうち用排水路および切り土施工が予定されている部分を中心として、任意にトレンチを設定している。また、基本的に検出された遺構の掘り下げは行なわず、トレンチの拡張等も行なっていない。各トレンチの基準杭は確認調査後に基準点測量を行い、平面直角座標系Ｘに乗せている。

第一次調査（平成元年度）は、事業予定区域の大原地区南端および下倉地区の約25㌶を対象として行なっている。調査トレンチは、大原地区で９本、下倉地区で６本設定し、重機によって表土部分を除去したのち、まず大原地区から調査に入ることとし、人力により遺構確認作業を進めた。なお、６月24日に下大倉館跡と大原館跡の調査成果を中心とする現地説明会を開催している。

第二次調査（平成三年度）は、大原地区東部の約10㌶を対象として行ない、合計24本の調査トレンチを設定している。重機によって表土部分を除去したのち、人力により遺構確認作業を進めたが、ほとんどは開田による影響が大きく遺構などは確認することができなかった。

Ⅳ．第一次調査（平成元年度－大原・下倉地区）

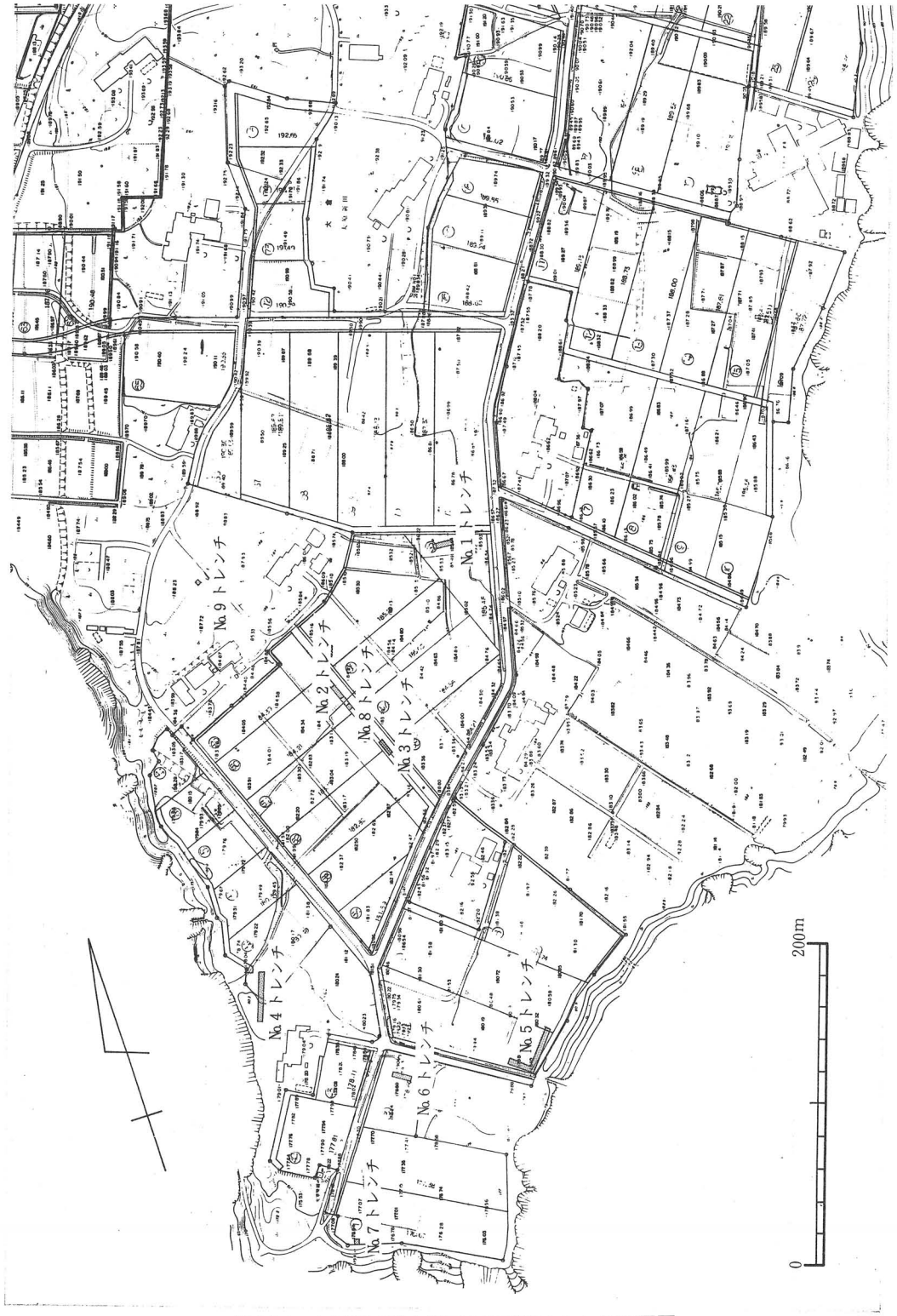
１．調査の方法と経過

整備事業計画の施工に合わせて、元年度は大原地区南端部と下倉地区に所在する３遺跡を対象として調査を実施した。両地区ともに中世の館跡の一部が施工区域に含まれることから、調査トレンチは館跡の範囲及び性格を探ることを目的に、土塁部分及び館跡の周辺に任意にトレンチを設定した。調査は幅３ｍのトレンチを基本としている。そのほか用排水路、切り土施工部分を中心に、大原地区で№１～№９の９本のトレンチ、下倉地区で№10～№15の６本のトレンチを設定し調査に入った。

その結果、大原館跡については現在北側に土塁と堀跡が残っているが、本来この土塁は三重に築かれており、その間に二重の堀が東西方向に平行に走っていることが確認された。また真ん中の土塁を断ち割ったところ、この土塁は版築されていることが確認された。

トレンチ	調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物
№１トレンチ	30	溝跡１条	出土遺物なし
№２トレンチ	30	遺構なし	出土遺物なし
№３トレンチ	30	遺構なし	出土遺物なし
№４トレンチ	96	土塁・堀跡（大原館跡）	弥生土器（土塁版築から出土）
№５トレンチ	125	遺構なし	縄文土器（中期）
№６トレンチ	40	遺構なし	出土遺物なし
№７トレンチ	9	遺構なし	出土遺物なし
№８トレンチ	9	遺構なし	出土遺物なし
№９トレンチ	30	遺構なし	出土遺物なし

表１　遺跡範囲確認調査成果一覧（大原地区）



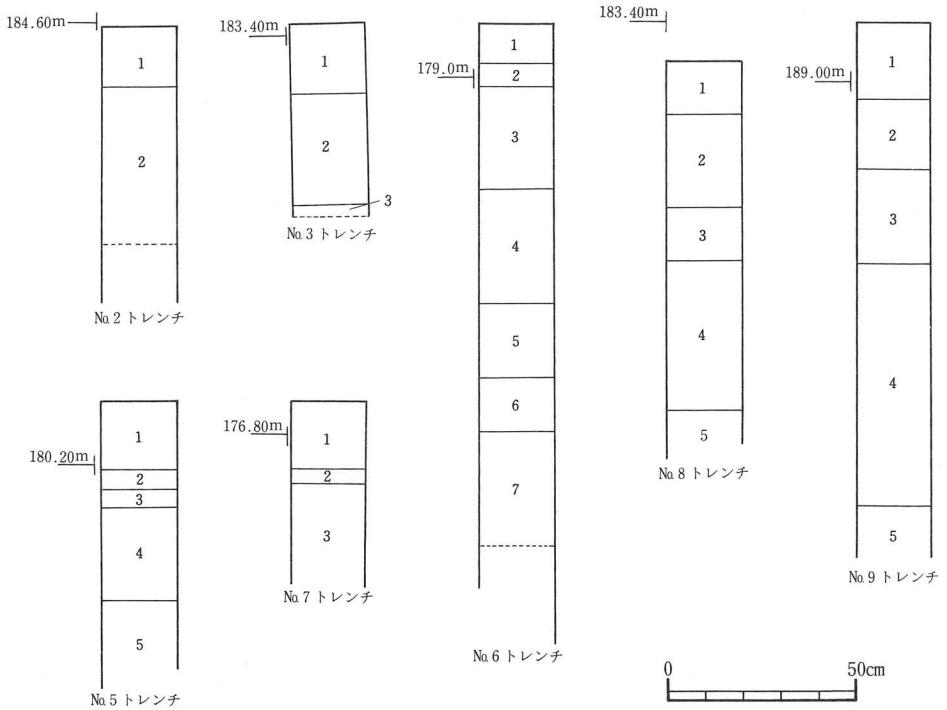
第３図　大原地区遺跡範囲確認調査トレンチ配置図

下大倉館跡については現在北側から西側にかけて鈎型に土塁が残っているが、この土塁と平行して幅約８ｍ、深さ約２ｍの堀が東西に走り、この堀も土塁同様に南に曲がることが確認された。

２．大原地区の調査（No.１～No.９トレンチ・大原館跡）

大原地区では、施工区域に含まれる大原館跡及び隣接する萱場遺跡を対象として調査を実施した（第３図）。

このうち大原館跡については、現存する土塁・堀跡に直交するようにトレンチを設定し（No.４トレンチ）、館跡内部と考えられる部分にNo.６・No.７トレンチを設定した。その他の部分につい



トレンチ名	層序	土色	土質	層厚	備考
第２トレンチ	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	16cm	礫・砂を多く含む
	2		砂礫層		盛土整地層
第３トレンチ	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	18cm	下部に酸化鉄の集積層
	2	10YR1/1.7 黒色	シルト	24cm	
	3	10YR6/5 黄褐色	砂		砂礫層
第５トレンチ	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	20cm	現水田耕作土
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	5cm	酸化鉄集積層・炭を含む
	3	10YR4/5 にぶい黄褐色	粘土質シルト	5cm	炭を多量に含む
	4	10YR3/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	25cm	炭を多量に含む
	5	10YR6/6 明黄褐色	シルト質粘土		
第６トレンチ	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	10cm	現畑耕作土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	5cm	下半部に酸化鉄の集積
	3		シルト	25cm	旧盛土
	4		粘土	20cm	旧盛土
	5	7.5Y3/1 黒褐色	シルト質粘土	20cm	５・６層ともに植物遺体を多く含む
	6	2.5Y2/1 黒色	シルト質粘土	15cm	
	7	2.5GY6/1オリーブ灰色	粘土質シルト 砂礫層		段丘礫層か

トレンチ名	層序	土色	土質	層厚	備考
第７トレンチ	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	18cm	現水田耕作土
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	4cm	
	3	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト		砂粒をわずかに含む
第８トレンチ	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	14cm	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	24cm	
	3	10YR6/5 黄褐色	粘土質シルト	13cm	
	4	10YR6/4 褐色	粘土質シルト	32cm	
	5		礫層		
第９トレンチ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	15cm	現畑耕作土
	2	10YR3/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	12cm	
	3	10YR6/5 黄褐色	粘土質シルト	25cm	
	4	10YR6/6 明黄褐色	砂	64cm	
	5				

第４図　基本層序・各調査トレンチ柱状模式図

ては、用排水路を中心としてNo.1～No.5トレンチを設定し、隣接する萱場遺跡についてはNo.9トレンチを設定した。

各調査トレンチにおける調査成果については、表1に掲げている。

(1) 調査区基本層序

調査区が広範囲にわたるため層序、色調に違いが認められるが、現耕作土下に、大別して3～4枚の層を確認した（第4図）。

Ⅰ層：現水田・畑耕作土層。水田耕作土層の下層に酸化鉄集積層が認められるものが多い。

Ⅱ層：黒褐色系。層厚5～50cm。　Ⅲ層：黒色系。層厚5～30cm。

Ⅳ層：黒褐色系。層厚40～80cm。　Ⅴ層：地山又は礫層面。

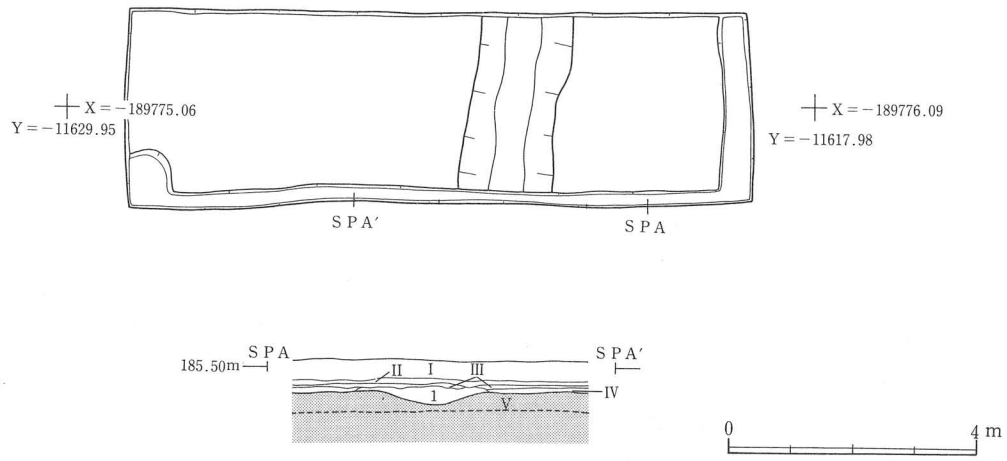
No.2トレンチでは、1層下は盛土整地層。No.6トレンチにおいても、1層下は盛土整地層があり、その下層は植物遺体を含む土層で、昔はこの一帯に沼があったという古老の話を裏付けるものと考えられた。

(2) 発見された遺構

大原館跡に関係する遺構が発見されたNo.4トレンチ以外には、No.1トレンチで溝跡1条が発見されたのみであった。

① 溝状遺構　ＳＤ01（No.1トレンチ）

No.1トレンチ4層上面で検出された。上端幅150cm、下端幅50cm、深さ10cmを計る。南北方向



層序	土　色	土　質	層　厚	備　考	層序	土　色	土　質	層　厚	備　考
Ⅰ	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	28～30cm	現耕作土	Ⅳ	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	5～8cm	
Ⅱ	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	5～8cm	酸化鉄を含む。	Ⅴ	2.5Y2/1 黒　色	シルト質粘土		水田土壌の可能性もある。
Ⅲ	10YR2/1 黒　色	粘土質シルト	4cm		埋1	7.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト		ＳＤ01堆積土

第5図　ＳＤ01平面図・セクション図（No.1トレンチ）

に走る溝で、断面形はゆるやかな船底形をしている。

埋土は、7.5ＹＲ3/2黒褐色粘土質シルトの単層で、砂をおおく含み底面近くには小礫もみられる（第５図）。河川跡の可能性がある。

(3) 大原館跡の調査（№４トレンチ）

大原館跡と伝えられている地点は、大原地区南端に張り出した河岸段丘突端部で、南側と東西は段丘崖となっている。館跡の下は広瀬川とその支流である大倉川・青下川との合流点となっている。現状はほとんどが水田となっており、館跡内にある平常雄氏宅の北側に土塁・堀跡の一部が残っている（第６図）。

地元の古老によれば、大原館跡は本来三重の土塁と二重の堀がめぐっていたが、戦後すぐに開田事業が行なわれ、外側の土塁と堀はその時に消滅し現在の形になったという。

大原館跡は、大倉に向かう定義道の旧道沿いに位置している。作並を経て山形に向かう関山街道は、上愛子白沢から下り道となり野川橋を通って広瀬川をわたり、野川坂を上って熊ケ根宿に入る。大倉への旧道はこの野川橋で北へわかれ広瀬川北岸の崖を上っていくが、上りきったところがちょうど大原館跡の西側となっている（写真１）。

なお、館跡のうち平氏宅を含む土塁の南側部分については、整備事業の除外地として現状保存されているが、今回調査を行った北側については盛土保存となっている。

［館跡の形態］

大原館跡と考えられる範囲は、東西約170ｍ、南北約130ｍの範囲で、南側に狭まった台形状を呈している。東側で大倉川、西側で青下川、南側で広瀬川に面し、それぞれ比高差約50ｍ程の段丘崖となっている。館跡内の標高は約177～179ｍで、南に向かって傾斜する平坦面である。３本の河川の合流点を俯瞰できる地点であり、「仙台領古城書上」にみられる「三方川　古城」の記載をうかがわせる地形である。

現在確認できる遺構としては、平氏宅の北側に東西方向に走る土塁と堀跡、西側に平場がある。開田により平氏宅周辺以外の遺構については明確ではない（第６図）。

［土　塁］

現存する土塁（ＳＬ１）は平氏宅の入口から、宅地の北縁に沿って西へ約80ｍ程延びており、調査は３×32ｍのトレンチを土塁に直交するように設定している。この結果、現在の土塁の外側に２本の土塁を検出した（第７・８図）。

土塁１（ＳＬ１）　基底部幅6.4ｍ、高さ2.4ｍ、土塁上場と北側の堀跡（ＳＤ１）底面との比高は3.2ｍである。土塁上場は館跡の内部であるが南側ではなだらかとなり、平場との比高は1.5ｍ程になる。

土塁２（ＳＬ２）　上面が削平されているが、基底部幅8.7ｍ、高さ1.4ｍ、土塁上場と北側の

堀跡（ＳＤ２）底面との比高は1.8mである。土塁西端部が北側に曲がり、広瀬川から上ってきた旧道に対している。断ち割りをなったところ、基本層Ⅵ層の上に５枚の版築が確認された。

土塁３（ＳＬ３）　ほとんど削平されており、わずかに南側の基底部の一部を検出したのみで、規模などは不明である。

［堀　跡］

土塁の間を平行して走る堀跡２条を検出した（第７・８図）。

堀跡１（ＳＤ１）　土塁ＳＬ１とＳＬ２の間にあり、断面形はゆるやかなＵ字形を呈し、上幅2.4m、下幅1.0m、土塁基底部からの深さは0.8mである。

埋土は６層に細別することができた。出土遺物としては縄文土器があるが、堀が機能していた時期に該当すると考えられる遺物は出土していない。

堀跡２（ＳＤ２）　土塁ＳＬ２の北側にあり、断面形は舟底形を呈し、上幅2.2m、土塁基底部からの深さは0.4mである。

埋土は７層に細別することができた。

［平　場］

平氏宅の西側にみられる平坦部で、北側は土塁ＳＬ１によって区画されている。現状は東西20m×南北15m程度の広さで、平場と土塁との比高は1.5mである。西側は段丘崖に望んでいるが、南東側は比高差30～60cm程度で平氏宅の宅地となっている（第７図）。

［大原館跡に関する文献資料］

大原館跡に関する記録としては、安永三年（1774）に編纂された「安永風土記－大倉村書上」やそのおよそ百年前に書かれた「仙台領古城書上」等がある。

「一　大原館　竪七拾間　横六拾五間　右ハ天正之初ヨリ国分御家臣作並宮内様御居館之由申伝候事」（安永風土記－大倉村書上）

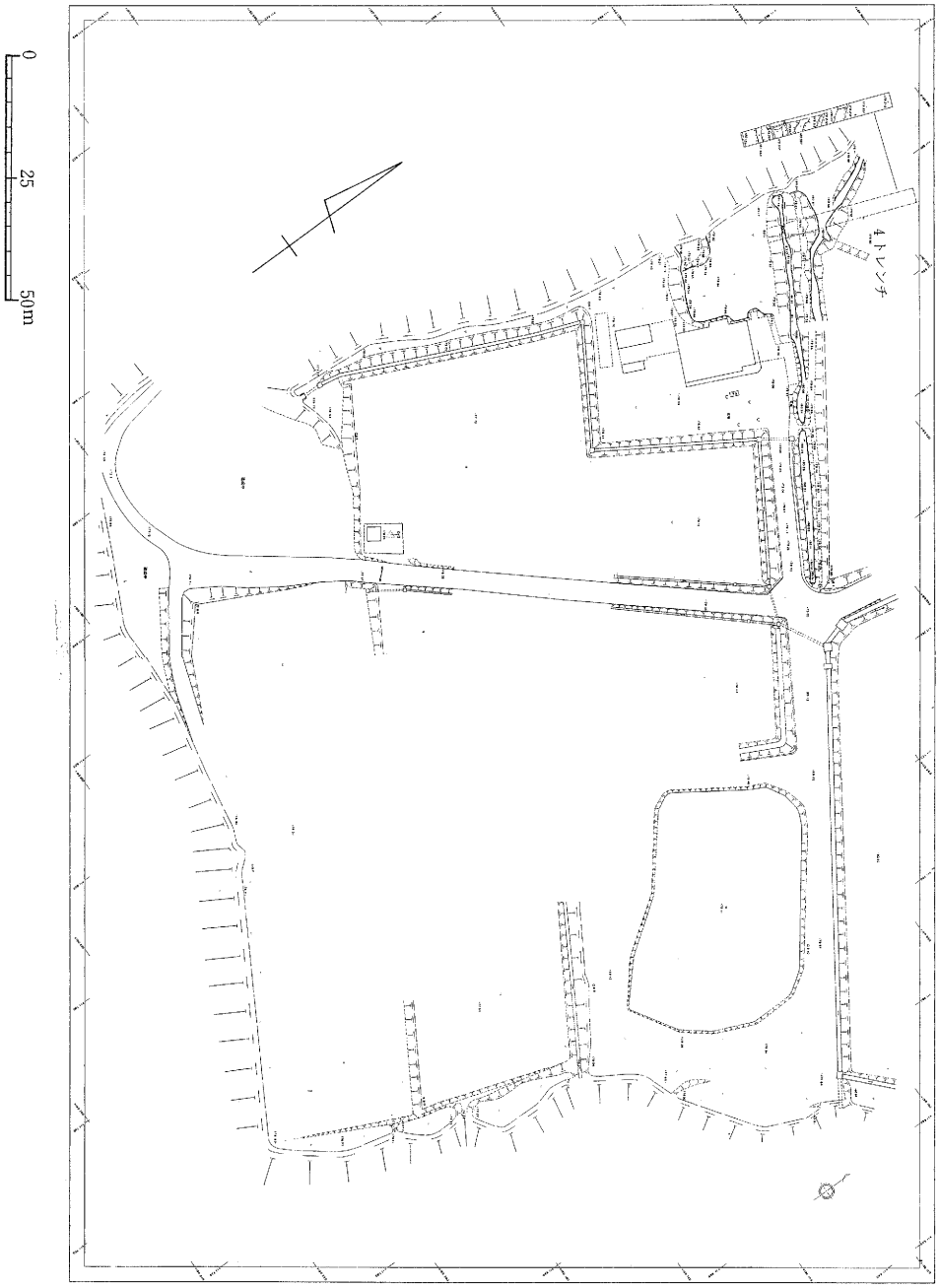
「三方川　古城　東西五十一間　南北四十四間　野武士楯籠」（仙台領古城書上）

それぞれ館跡の規模について、「風土記書上」では竪七拾間（126m）・横六拾五間（117m）、「古城書上」では東西五十一間（92m）・南北四十四間（79m）と記載しているが遺構などについてはふれていない。

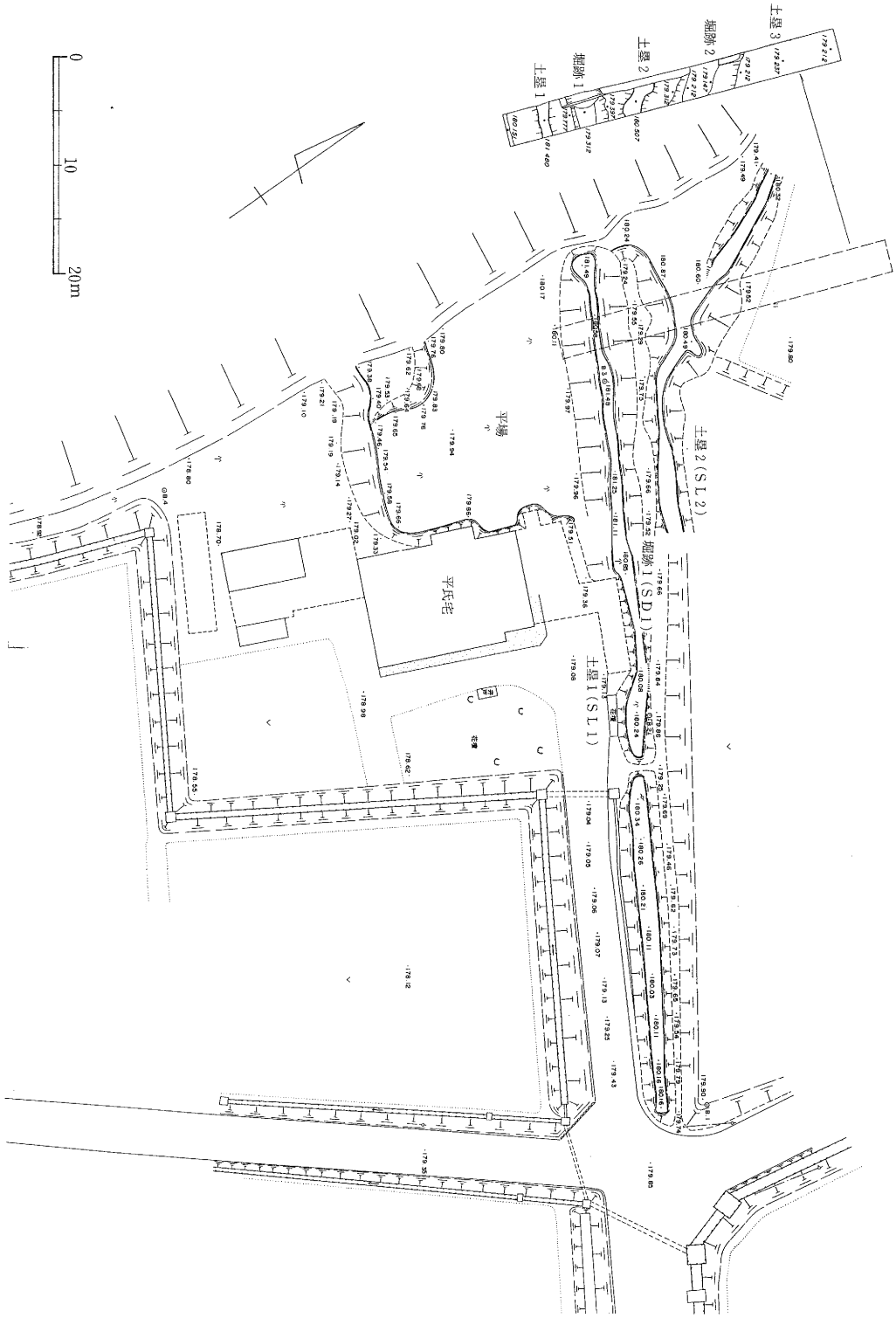
館主について、「古城書上」では「野武士がたてこもったところ」としているのに対し、「風土記書上」では天正年間（1573～1591）の初め頃には国分氏家臣の作並宮内の居館であったとしているが、その作並氏については資料もなく詳細は不明である。

地籍図からみた館跡について

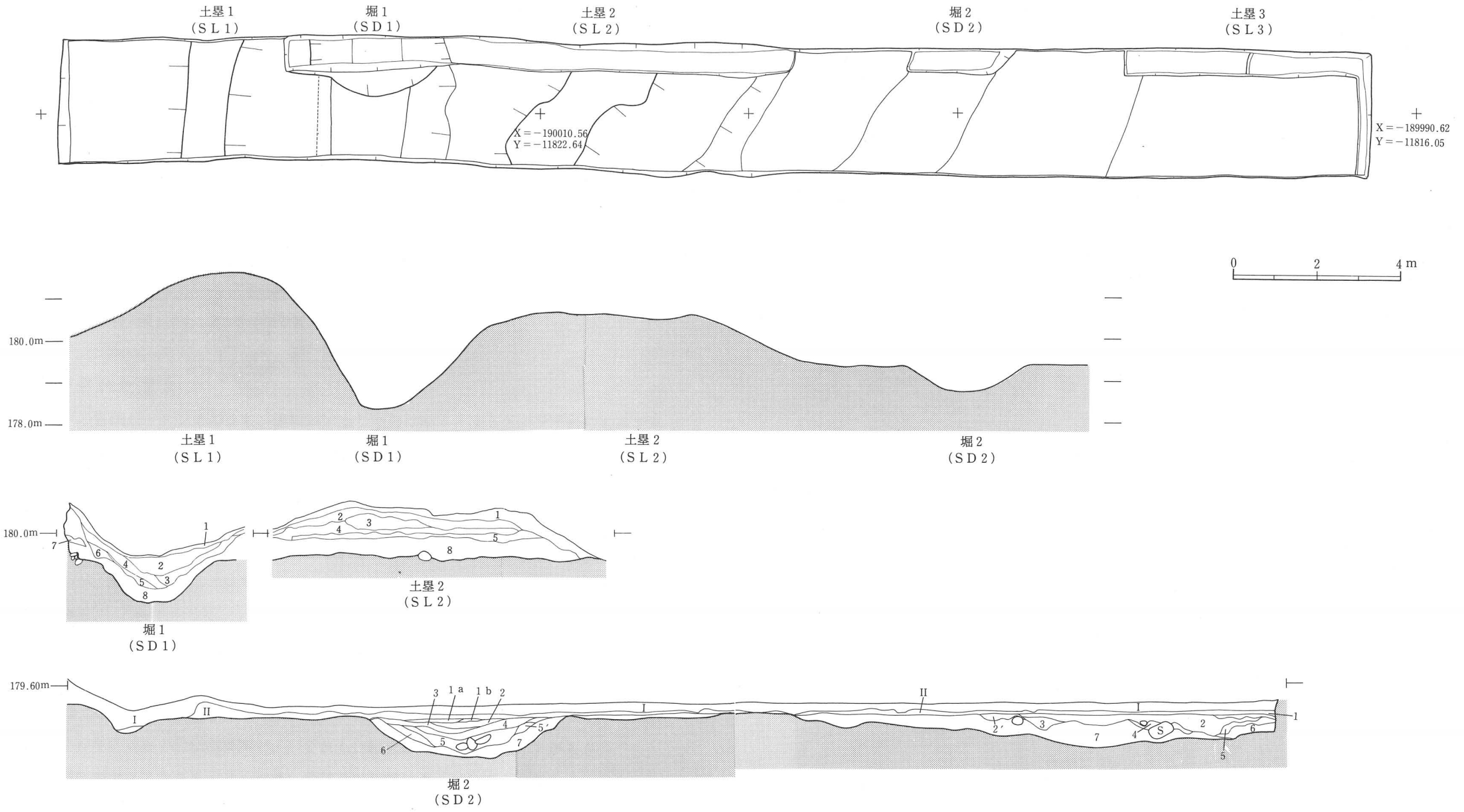
現況はほとんどが水田で、開田によって原形は失われている。現況図からも平氏宅の周囲に遺構の一部がみられるだけで、館跡の範囲を反映するような地割は認められない（第９図）。



第６図　大原館跡現況平面図・試堀トレンチ位置図



第7図　大原館跡土塁・堀跡平面図



第4トレンチ西壁セクション図土層注記表

遺構名	層序	土色	土質	層厚	備考
基本層	I	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	II	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		10YR7/8黄橙色の砂岩ブロックを層状に含む。
堀1 (SD1)	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		現表土
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト		円礫を含む。
	3	10YR4/4 褐色	シルト		
	4	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	5	10YR4/6 褐色	シルト		
	6	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	7	10YR5/4 黄褐色	シルト		
	8	10YR2/3 黒褐色	シルト		円礫を多く含む。

遺構名	層序	土色	土質	層厚	備考
土塁2(SL2)	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		版築
	2	10YR4/4 オリーブ褐色	シルト		
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂礫		
	4	10YR2/1 黒色	シルト		
	5	10YR4/4 褐色	シルト		
		基本層II層は、昭和40年頃に水田の下に入れられた土。			

遺構名	層序	土色	土質	層厚	備考
堀2 (SD2)	1a	10YR3/3 暗褐色	シルト		酸化鉄を少量含む。
	1b	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト		10YR2/1黒をブロック状に含む。
	3	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘質シルト		10YR3/4暗褐をブロック状に含む。
	4	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘質シルト		酸化鉄を含む。
	5	10YR4/4 褐色	シルト		酸化鉄を少量含む。
	5′	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	6	10YR3/4 暗褐色	シルト		砂・円礫を含む。
	7	10YR3/2 黒褐色	シルト		

遺構名	層序	土色	土質	層厚	備考
北端部	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	2	10YR4/4 褐色 10YR2/2 黒褐色	シルト		10YR3/3暗褐も混じるブロック層
	2′	10YR4/6 褐色	シルト		
	3	10YR5/6 黄褐色	シルト		
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト		10YR2/2黒褐色をブロック状に含む。
	5	10YR3/4 暗褐色	シルト		
	6	10YR2/2 黒褐色	シルト		
	7	10YR3/4 暗褐色	シルト		円礫を多く含む。

第8図　大原館跡土塁・堀跡（No.4トレンチ）

現在大原館跡は、大倉字野川の区域を中心として字大原新田にまたがっているが、明治19年（1886）頃に作成されたとされる地籍図からは、野川橋からわかれた旧道はみられるものの館跡の範囲を看取できるような区割などはみられなかった（第10図）。

「安永風土記－大倉村書上」は「代数有之御百姓」のなかで三人の名をあげている。その一人、「大原屋敷　甚四郎」の先祖鈴木九左衛門について、かつては国分氏家臣であったが天正年間の国分氏滅亡後に盛重の妻やその子供とともにこの地に住みついたと記載されている。(注1) 当地における館跡の多くには、こうした国分盛重に関する逸話が伝えられており、この風土記の記述もそのひとつといえる。

注1.「右九左衛門国分能登守様盛重御家臣ニ御座候処、国分家天正年中御没落以後御御台様御幼君様方御供仕、当村大原と申所ニ罷在候申伝候事」

(4) 発見された遺物

大原地区の各調査トレンチのうち、遺物が出土したのは№4・№5トレンチからのみであった。出土した遺物としては縄文土器・弥生土器・石器・石製品がある。

このうち縄文土器は両トレンチから出土しているが、弥生土器については№4トレンチから出土したのみであった。

一次・二次調査をとおして、出土した土器は大部分が小破片で全体の器形・文様がわかるものは少ないが、整理にあたっては次の3類に区分したのち、さらにそれぞれの文様の特徴から細分している。

区分の可能なもの…A類　地文のみのもの…B類　摩滅などにより文様が不明なもの…C類

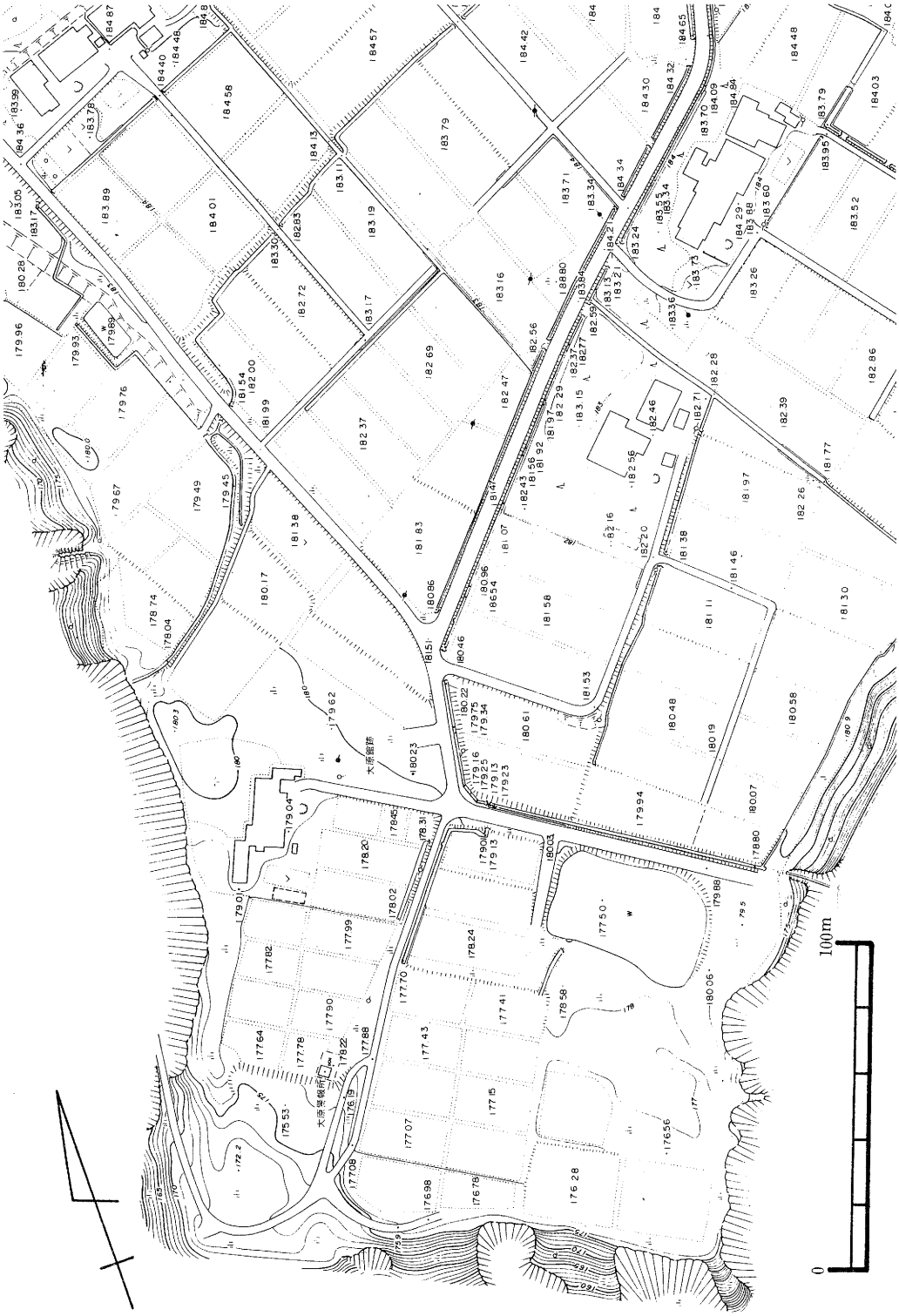
A類についてはさらに、口縁部資料をa類・体部～底部資料をb類としている。

① 土　器（第11図・第12図）

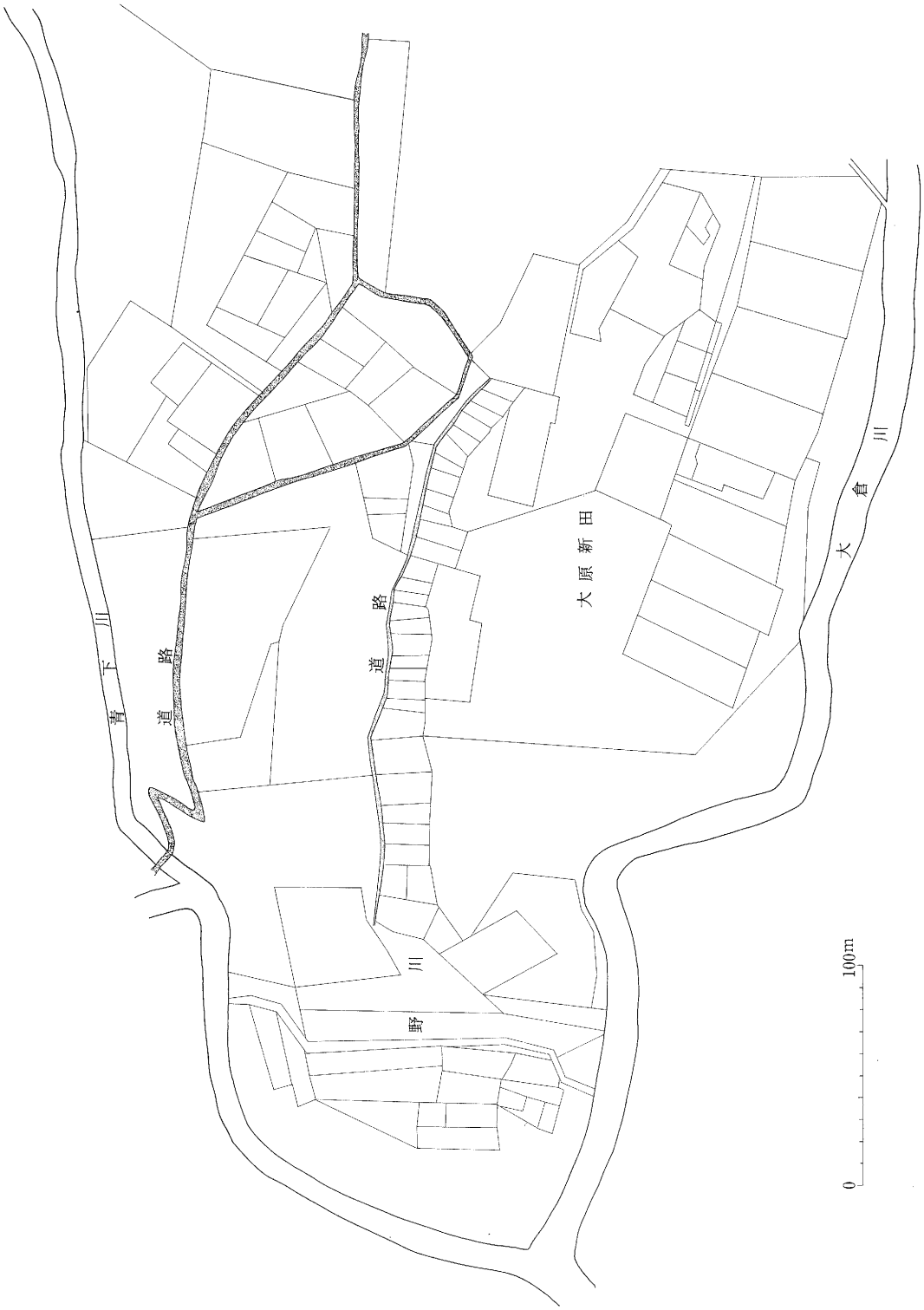
第11図1～8は深鉢の口縁部資料で、いずれも口縁部が外傾ぎみに立ち上がるものである。文様は口縁部が無文となる4・6を除き、沈線及び隆線によって施文されている。このうち3には、口縁直下に隆沈線による渦巻文が施文されている。5・7は沈線によって、8は稜線をもった隆線によって「∩」状文もしくは楕円区画文が施されるものと思われる。区画内には縄文が充填されている。

第11図9～19、第12図1～16はいずれも深鉢の体部資料である。第11図9～16・18・19、第12図1～9は、いずれも沈線によって「∩」状文もしくは楕円区画文が施され、区画内には縄文が充填されるものである。第11図17は、隆線文とそれに沿って施された沈線文によって渦巻き状に施文されている。

第12図17～20は弥生土器と考えられる一群で、このうち18・19には細沈線による帯縄文と縄



第９図　大原館跡周辺現況平面図



第10図　大原館跡関係地籍図（明治19年(1886)頃作成）

文の充塡された山形文が施されている。18には、疑似縄文が施されている。20は鉢の底部で、平行沈線によって地文をもつ底部と区画されている。

今回の調査で出土した縄文土器の年代については、いずれも沈線または隆沈線による「∩」状文もしくは楕円区画文が施され、区画内には縄文が充塡されていることから、大木8b～9式の範疇で捉えることができる。また弥生土器については、中期舛形囲式に比定されるものと思われる。

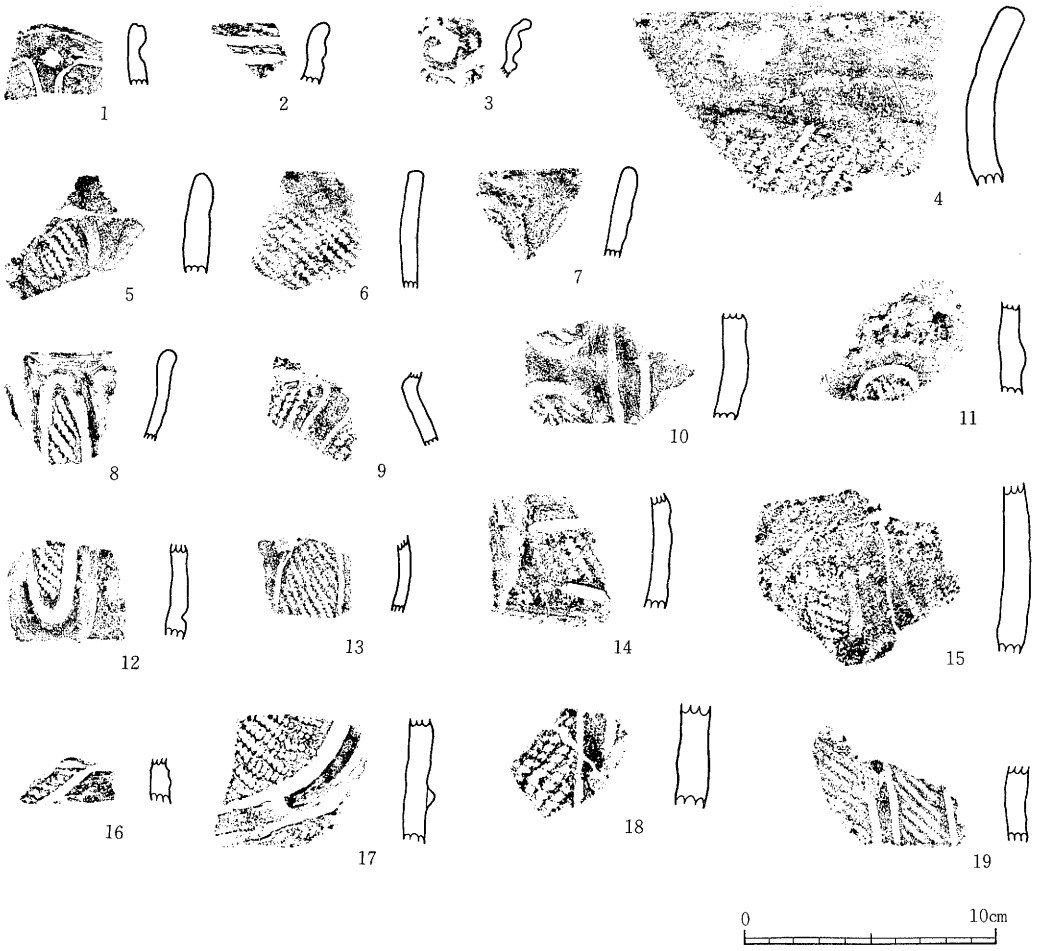
② 石　器（第13図）

石鏃2点、尖頭器1点、不定形石器2点、石製品1点が出土している。

1・2は石鏃で、いずれも尖部を欠いている。1は凹基で、直線的な側縁をもち表裏全面に二次加工が施されている。2はドリルの基部の可能性もあるが、丸凸基で、ゆるく張り出した曲線的な側縁をもち表裏全面に二次加工が施されている。3はやや厚手の尖頭器で、ゆるく張り出した曲線的な側縁をもち基部付近でさらに内湾しており、茎部を作り出しているかのようである。4・5は不定形石器で、側縁に二次加工を施して刃部を作り出している。5は一部に自然面を残しているが、右側縁の片面に細かな二次加工を施して刃部を作り出している。6は厚さ5cm程の板状の石製品で、両面ともに平坦な作業面をもち若干の磨面を観察することができる。

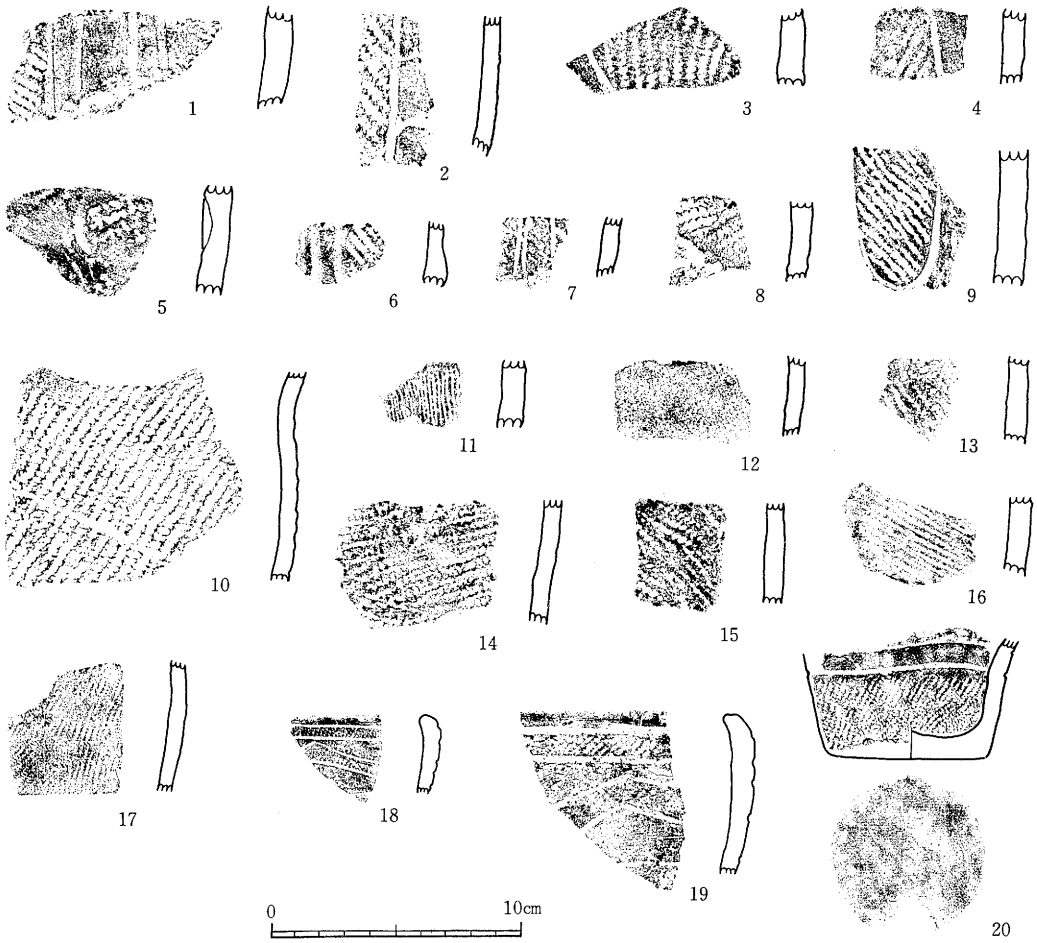
表2　出土石器観察表（第13図）

番号	地区	層位	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	備考	写真図版番号
1	5トレンチ	4層	石鏃	13	15	3	0.6	頁岩		写真36
2	5トレンチ	3層	石鏃	21	13	6	2.6	頁岩	ドリル？	写真36
3	大原館跡	表採	尖頭器	40	20	11	8.3			写真36
4	5トレンチ		不定形石器	21	22	5	3.2	頁岩		写真36
5	4トレンチ		不定形石器	80	47	12	36.3	頁岩		写真36
6	5トレンチ		板状石製品	241	154	50	2,930			写真36



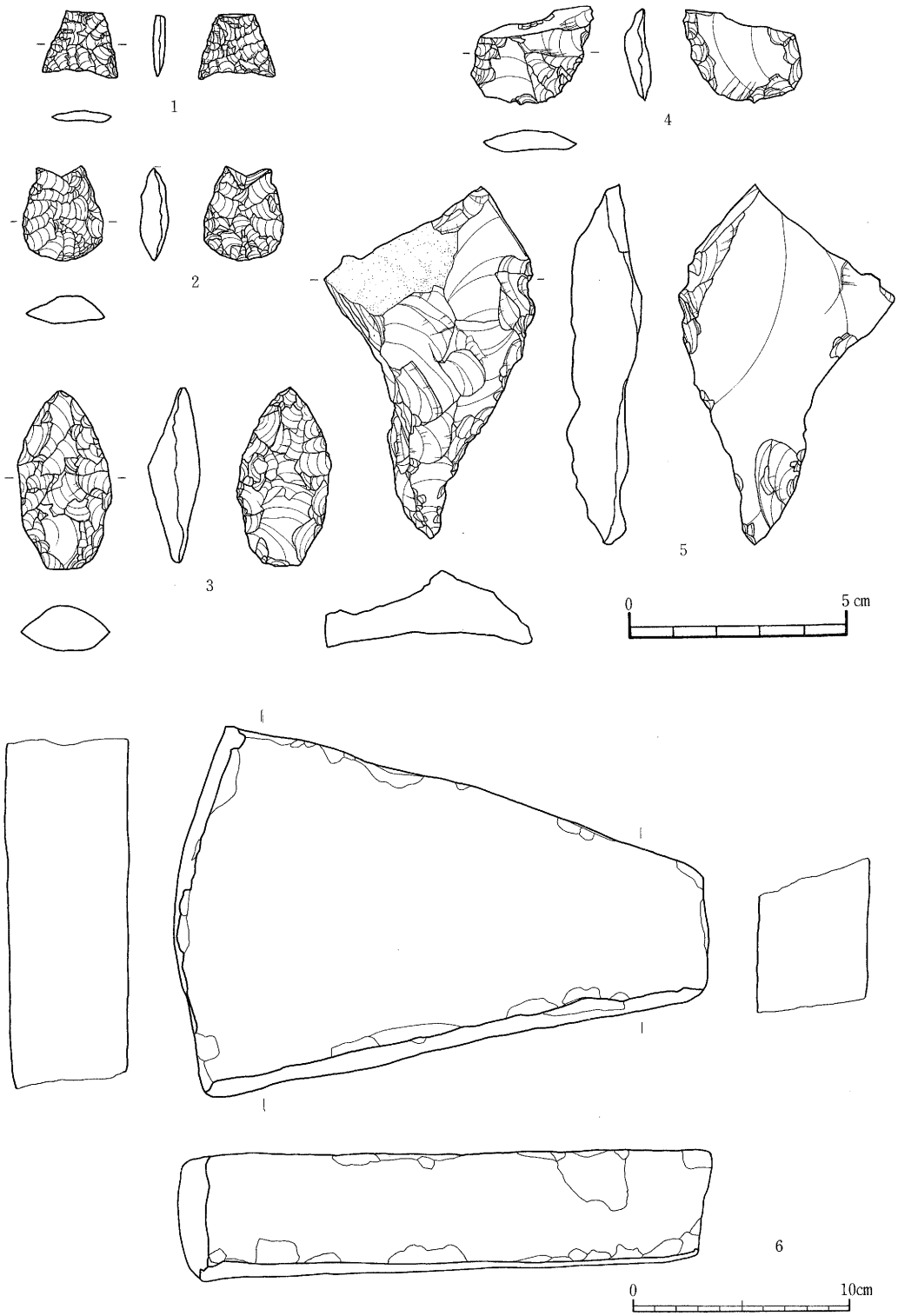
番号	地　区	層　位	部　位	分　類	文　様　・　特　徴	備　　考	写真図版番号
1	5トレンチ	3　層	口縁部	A－3a類	区画沈線、刺突・口唇部に沈線		24－1
2	4トレンチ		口縁部	A－3a類	平行沈線		24－2
3	5トレンチ	3　層	口縁部	A－3a類	渦巻隆沈線文		24－3
4	5トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	口縁部無文・RL縄文		24－4
5	5トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	区画沈線・LR縄文		24－5
6	5トレンチ	表　採	口縁部	A－5a類	口縁部無文・LR縄文		24－6
7	5トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	区画沈線		24－7
8	5トレンチ	3　層	口縁部	A－3a類	隆（稜）線区画・RL縄文		24－8
9	5トレンチ	3層上	頸　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文		24－9
10	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画		24－10
11	5トレンチ	3層上	頸　部	A－4b類	隆線・区画沈線		24－11
12	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	隆（稜）線区画・LR縄文		24－12
13	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		24－13
14	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		24－14
15	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		24－15
16	4トレンチ		体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		24－16
17	5トレンチ	1　層	体　部	A－3b類	沈線区画・RL縄文		24－17
18	大原館跡	表　採	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		24－18
19	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		24－19

第11図　出土遺物・土器 (1)



番号	地　区	層　位	部　位	分　類	文　様　・　特　徴	備　　考	写真図版番号
1	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文		25－1
2	5トレンチ	2　層	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		25－2
3	5トレンチ	4　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文		25－3
4	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		25－4
5	5トレンチ	4　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文	裏面剝落	25－5
6	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		25－6
7	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線		25－7
8	5トレンチ		体　部	A－4b類	LR縄文		25－8
9	5トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	「U」状沈線区画・LR縄文		25－9
10	5トレンチ	4　層	体　部	B類	RL縄文		25－10
11	4トレンチ	SD2埋土上	体　部	B類	撚り糸文・R		25－11
12	4トレンチ		体　部	B類	ミガキ		25－12
13	4トレンチ		体　部	B類	LR縄文		25－13
14	4トレンチ		体　部	B類	LRL縄文		25－14
15	5トレンチ	4　層	体　部	B類	LR縄文		25－15
16	4トレンチ		体　部	B類	LR縄文		25－16
17	4トレンチ		体　部	B－6類	LR縄文	表面カーボン付着	25－17
18	4トレンチ		口縁部	A－6a類	帯縄文・山形文・疑縄文（植物茎回転文）		25－18
19	4トレンチ		口縁部	A－6a類	帯縄文・山形文・LR縄文	内外面カーボン付着	25－19
20	4トレンチ		底　部	A－6a類	平行沈線間磨消縄文・LR縄文		25－20

第12図　出土遺物・土器(2)



第13図　出土遺物・石器

3．下倉地区の調査（№10～№15・下大倉館跡）

下倉地区では、施工区域に一部がかかっている下大倉館跡を中心として調査を実施した。

このうち下大倉館跡では、現存している土塁の外側に近接して調査区（№10・№15トレンチ）を設定した。その他の調査区については用排水路を中心として№11～№14トレンチを設定した（第15図）。各調査トレンチにおける調査成果については表３に掲げている。

表３　遺跡範囲確認調査成果一覧（下倉地区）

トレンチ	調査面積（㎡）	検　出　遺　構	出　土　遺　物
№10トレンチ	130	堀跡・竪穴状遺構・溝跡（下大倉館跡）	縄文土器（早期）・石器
№11トレンチ	90	溝跡	縄文土器・石器
№12トレンチ	40	遺構なし	遺物なし
№13トレンチ	50	水田跡（近世及びそれ以降）	平安時代・中世陶器・土師質土器
№14トレンチ	30	遺構なし	遺物なし
№15トレンチ	180	堀跡（下大倉館跡）	中世・近世の陶・磁器、土師器

(1)　調査区基本層序

調査区が広範囲にわたるため層序・色調に違いが認められるが、現耕作土層下において３～４枚の層を確認した（第14図）。

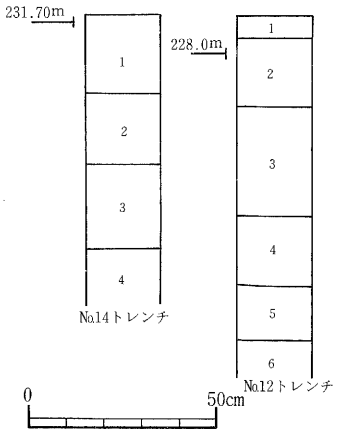
Ⅰ層：現水田耕作土層

Ⅱ層：黒褐色系。層厚　15～20cm

Ⅲ層：暗褐色系。層厚　15～20cm。

Ⅳ層：地山又は礫層面

また№13トレンチにおいて、水田土壌とおもわれる層が確認されているが、他のトレンチでは同様の層を検出することはできなかった。№15トレンチについては、現水田耕作土下－20～30cmで堀のプランが検出されているが、確認のみで遺構の掘り込みを行っていないため土層図は作成しなかった。



第14図　土層注記表

トレンチ名	層序	土　色	土　質	層厚	備　考
12トレンチ	1	10YR6/1 灰　色	シルト質粘土	6cm	現耕作土
	2	10YR2/3 黒　褐　色	シルト質粘土	17cm	
	3	10YR3/3 暗　褐　色	粘土質シルト	28cm	
	4	10YR3/2 黒　褐　色	粘土質シルト	16cm	
	5	7.5Y3/2 黒　褐　色	粘土質シルト	15cm	砂粒を含む
	6	10YR3/4 暗　褐　色	粘土質シルト		砂粒を多く含む
14トレンチ	1	10GY6/1 緑　灰　色	シルト質粘土	21cm	現耕作土・下部に酸化鉄集積層
	2	10YR3/2 黒　褐　色	粘土質シルト	17cm	小礫を多量に含む
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	24cm	
	4		砂　礫　層		盛土の可能性あり

第14図　調査トレンチ土層柱状模式図

第15図　下倉地区遺跡範囲確認調査トレンチ配置図

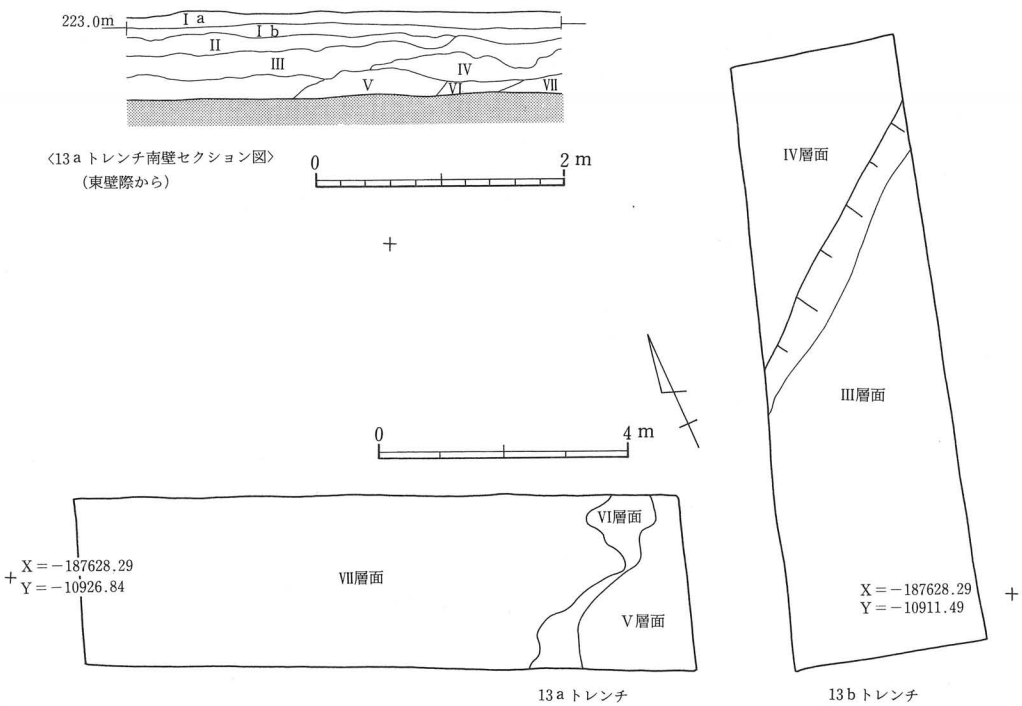
(2) 発見された遺構

① 水田跡（No.13トレンチ）

現在の水田耕作土下に検出されたIII・IV層について水田土壌の可能性がある。III層の下層部には凹凸がみられ、IV層上面で検出された段差はIII層を水田土壌とする水田の疑似畦畔と考えられる。またIV層についても下面に凹凸がみられることから水田土壌の可能性がある（第16図）。

② 溝状遺構（No.11トレンチ）

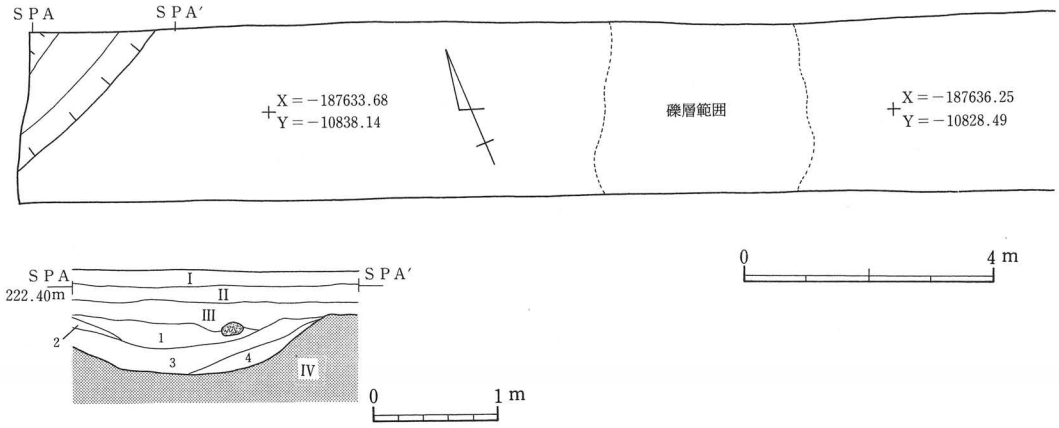
No.11トレンチ北西コーナー部で、東西方向に走る溝状遺構の一部を検出している。北壁側の立ち上がりがトレンチ外となるため規模などは不明であるが、上端幅150cm以上、下端幅70cm、深さ50cmで断面形は舟底形を呈するものと思われる。埋土は4層に分けられる（第17図）。



第16図　土層注記表

	層序	土　色	土　質	層厚	備　考		層序	土　色	土　質	層厚	備　考
基本層	Ⅰa	5Y5/1　灰　色	粘土質シルト	8～12cm	現耕作土	基本層	Ⅳ	10YR2/2 黒 褐 色	シルト質粘土		下面に凹凸・水田土壌の可能性
	Ⅰb	10GY4/1 暗緑灰色	シルト質粘土	5～10cm	上部に酸化鉄の集積		Ⅴ	10YR4/1 褐 灰 色	粘　土		
	Ⅱ	10YR5/1 褐 灰 色	シルト質粘土	6～12cm			Ⅵ	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト質粘土		
	Ⅲ	10YR4/1 褐 灰 色	シルト質粘土	15～20cm	水田土壌の可能性		Ⅶ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト		礫を多量に含む

第16図　No. 13トレンチ平面図及び南壁セクション図



第17図　土層注記表

	層序	土　色	土　質	層厚	備　考		層序	土　色	土　質	層厚	備　考
基本層	I	5Y5/1　灰　色	シルト質粘土	10～15cm	現耕作土	SD1	1	7.5YR4/1褐　灰　色	粘　土		礫を含む
	II	10Y4/1　灰　色	粘　土	8～15cm	上部に酸化鉄		2	10YR4/1 褐　灰　色	シルト質粘土		砂粒を含む
	III	2.5Y4/1　黄　灰　色	シルト質粘土	12～20cm	マンガン斑多く含む		3	5Y3/1 オリーブ黒色	粘　土		樹木片を含む
	IV	10YR3/4 暗　褐　色	シルト質粘土		砂粒を含む		4	10YR2/3 黒　褐　色	シルト質粘土		砂粒を含む

第17図　No. 11トレンチ平面図及び溝状遺構セクション図

(3)　下大倉館跡の調査（No.10・No.11・No.15トレンチ）

下大倉館跡は、大倉川西岸の河岸段丘上に位置している。東・南側は段丘崖となって大倉川に望んでいる。北・西側の一部に鈎型の土塁が残っている。現在館跡の周囲は水田となっており、館跡内は畑・水田として利用されている（第21図）。

地元の古老によれば、昭和初期までは館跡の内側にも土塁が残っていたが、畑を開墾する際に整地したため失われてしまったという。

かっては芋沢村から定義への旧道が下大倉館跡の西側を通っており、館跡西方の市道沿いに道標の石碑が残っている。この旧道については安永風土記にも記載がある。(注1)

なお、館跡について土塁の内側は整備事業の除外地ということで現状保存され、外側については盛土保存されている。

注1）「安永風土記－大倉村書上」

「館下大橋　長三拾弐間　幅壱間　国分芋沢村青木通郷六村荒巻村八幡町通御城下江之通路」

［館跡の形態］

下大倉館跡と考えられる範囲は、東西約100m、南北約130mの範囲で、長方形を呈している。東側と南側で大倉川に面し、西側には大倉川からの沢が入りこんでいる。大倉川とは比高差約50m以上の段丘崖となっている。館跡内の標高は約223mで、南に向かってわずかに傾斜しているがほぼ平坦面である。

現在確認できる遺構としては、館跡の北縁に沿って鉤型に走る土塁のみである（第18図）。

［土　塁］（第20図）

土塁１（ＳＬ１）

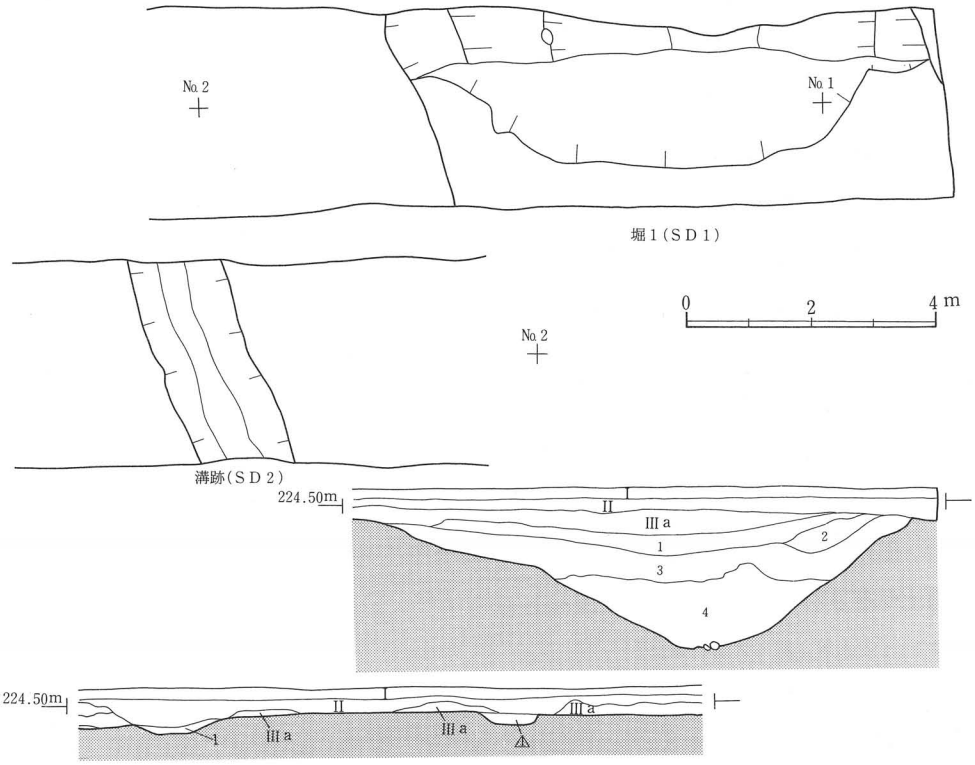
現状のまま測量調査のみを行なっている。土塁の全長は約50m程あり、基底部幅４～10m、高さ１～2.3m、土塁上面とNo.10トレンチで検出された堀跡の底面との比高は4.0m以上となる。

［堀　跡］（第18・19図）

掘跡１（ＳＤ１）

No.10・No.15トレンチで土塁と平行して走る堀跡を検出した。このうちNo.15トレンチでは、遺構プランの検出のみで堀込みは行なっていない。

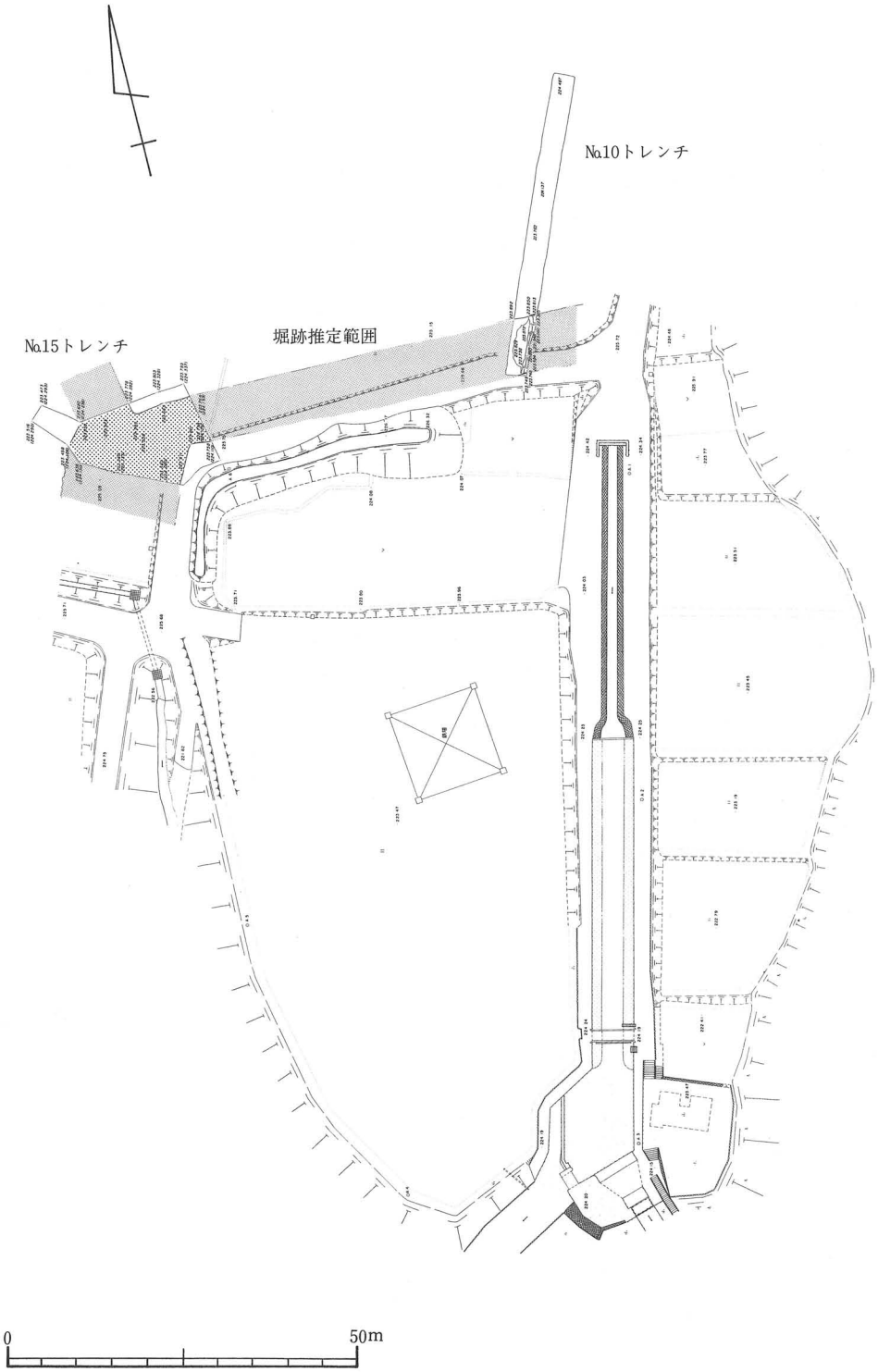
No.10トレンチで検出された堀跡は、上端幅約8.0m、下端幅約1.5m、確認面からの深さ2.0mである。断面形はＶ字形を呈している。段丘礫層を堀込んで作られている。埋土は４層に分けられ、底面には堀壁面から崩落した大量の礫が入っている。埋土中から遺物の出土はなかった。



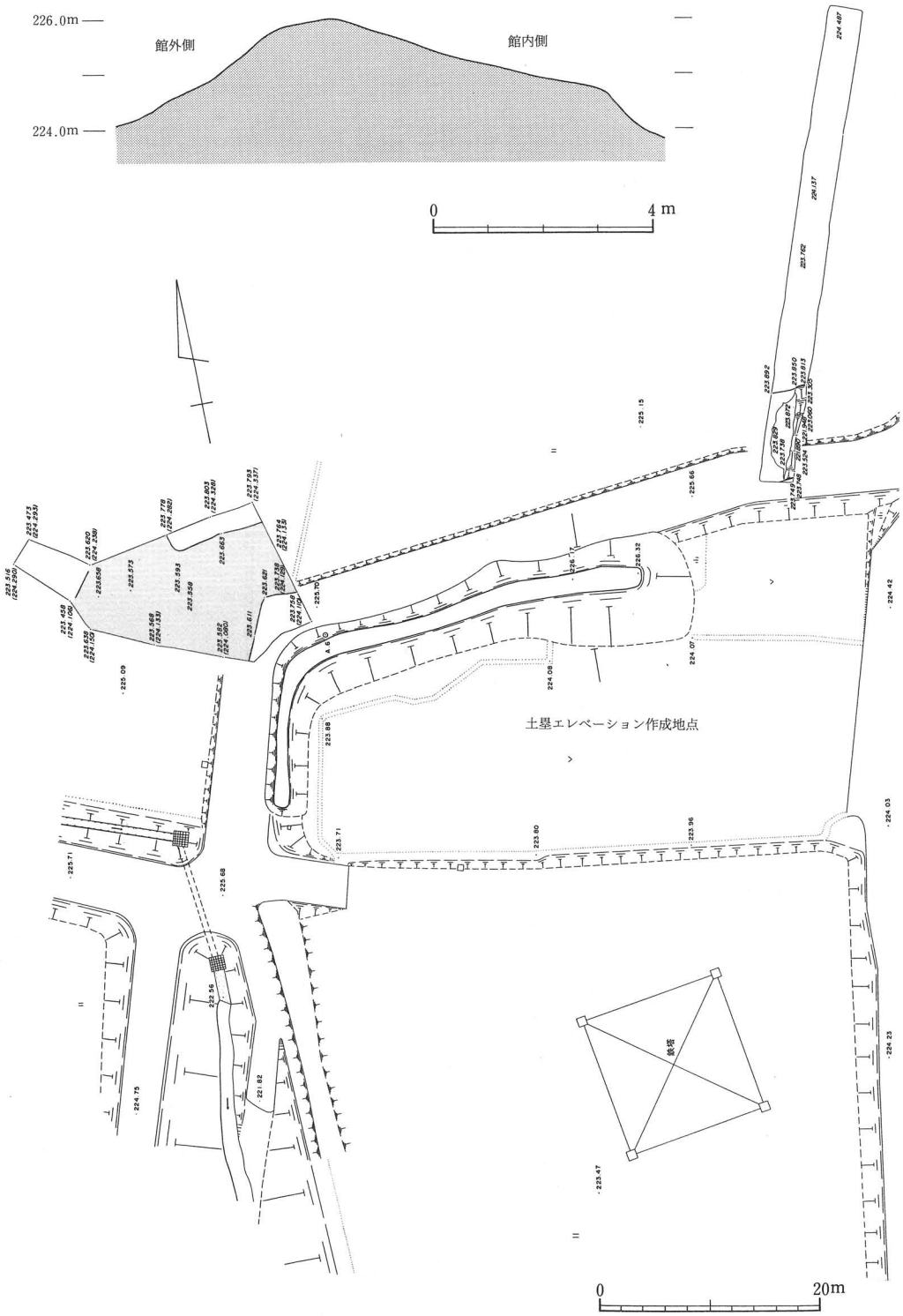
第18図　土層注記表

遺構名	層序	土　色	土　質	層厚	備　考	遺構名	層序	土　色	土　質	層厚	備　考
基本層	I	10YR4/1 灰　色	シルト		現水田耕作土下部に酸化鉄集積層	ＳＤ１	1	10YR2/2 黒　褐　色	シルト		礫を少量含む
	II	10YR3/3 暗　褐　色	シルト				2	10YR2/3 黒　褐　色	シルト		5～30cm大の礫を多く含む
	IIIa	10YR3/2 黒　褐　色	シルト				3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト		小礫を少量含む
	IIIb	10YR2/1 黒　色	シルト				4	10YR3/3 暗　褐　色	シルト		10～40cm大の礫を多く含む
ＳＤ２	1	10YR3/3 暗　褐　色	シルト		下部に黄褐色土をブロック状に含む。		⚠	10YR3/2 黒　褐　色	シルト		黄褐色土ブロックを多量に含む

第18図　下大倉館跡堀跡（ＳＤ１）・溝跡（ＳＤ２）平面図及びセクション図（No.10トレンチ）



第19図　下大倉館跡現況平面図・試掘トレンチ位置図



第20図　下大倉館跡土塁・堀跡平面図

［下大倉館跡に関する文献資料］

下大倉館跡に関する記録としては、「安永風土記－大倉村書上」や「仙台領古城書上」等がある。

「一　下大倉館　竪五拾間　横四拾五間　右ハ永禄之頃より国分御家臣藏人様御居館之由申伝候事」（安永風土記－大倉村書上）

「おかな館城　東西四十五間　南北四十二間　野武士楯籠」　（仙台領古城書上）

それぞれ館跡の規模について、「風土記書上」では竪五拾間（90m）・横四拾五間（81m）、「古城書上」では東西四十五間（81m）・南北四十二間（76m）と記載しているが、遺構などについてはふれていない。

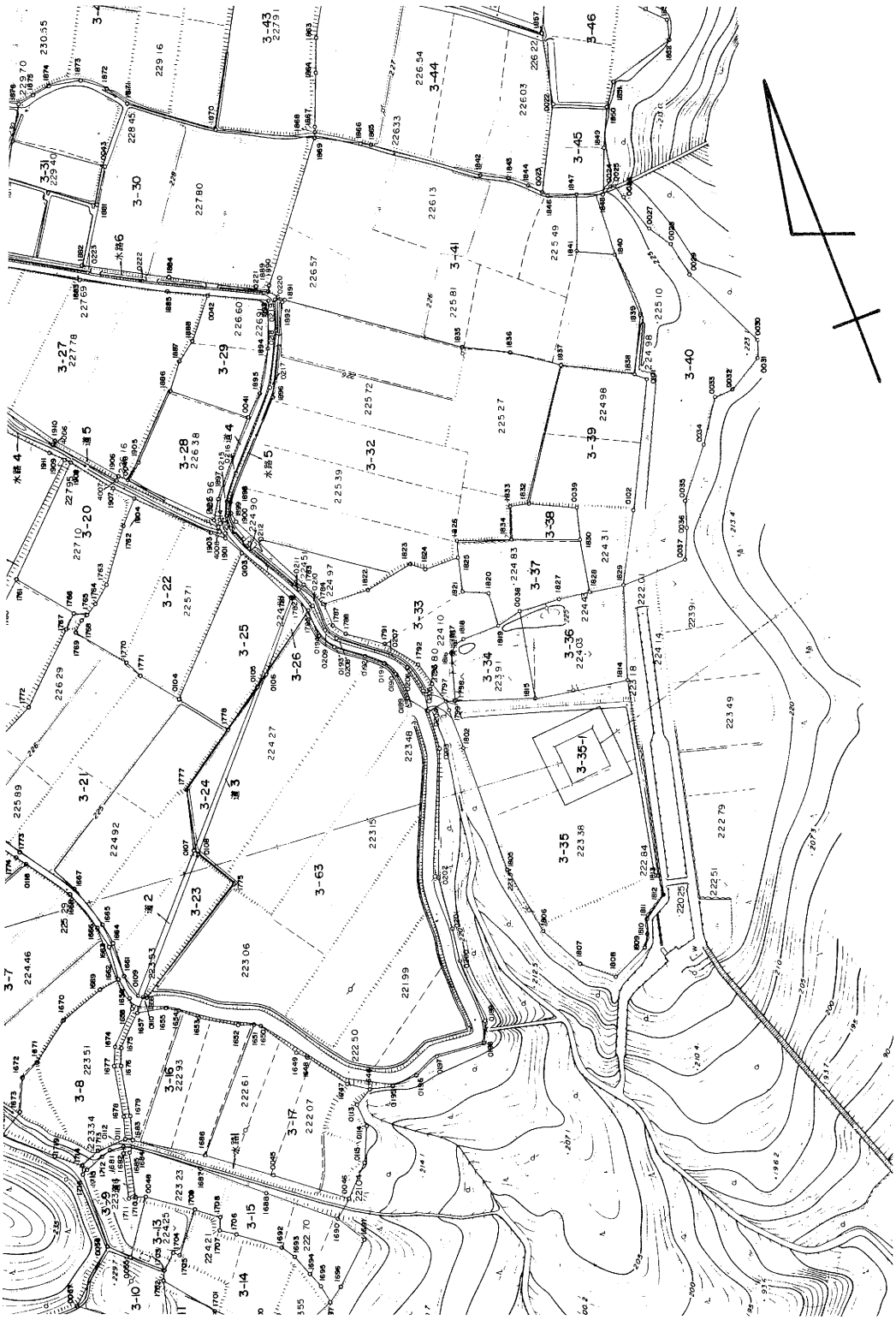
館主については、「古城書上」では大原館跡と同様に、野武士のたてこもったところとしているが、「風土記書上」では永禄年間（1558～1569）の頃には国分氏家臣の藏人の居館であったとしている。ここに書かれた藏人とは次に述べる大倉藏人のことと思われる。

「関家（大倉家）」について

「伊達家世臣家譜」によれば、関家は初め大倉氏と称し国分家に仕えていたという。その大倉備中には三子があり、長男の大倉藏人が家をついだが子供がなかったのであらためて三男を跡継ぎとし、藏人重忠を名乗らせている。そして、天正六年（1578）十一月伊達家に帰属した際に、改めて大倉に五十石の知行を与えられている。しかし、蔵人重忠は天正十九年（1591）の葛西・大崎の乱に際して佐沼城の戦いで亡くなり大倉家は絶えることとなった。このとき、初代藏人の弟左馬助は父とともに熊ケ根村関に住み「関氏」と称し、その子半内は伊達家から百三石を与えられていた。しかし、半内はのちに知行を没収されるがその死後許されて、半内の子源之丞は寛永二十一年（1644）二代藩主忠宗のとき、新たに大倉村に六十四石を与えられている。この時に至って関氏は大倉村に屋敷を定めたものと思われる。

次の重次の代に、磐井郡流郷西永井村に五十七石を与えられ、大倉村で開発した新田十二石を合わせて百三十三石となっている。その後親戚に十石を分与し、重次の子重成のとき、弟義明に二十石を分地して関家の知行高は百三石となった。「世臣家譜」の記事は、重成以後三代のちの定次をもっておわっている。

世臣家譜とは別に、明治に入り関庸孝氏が編集した「関氏家譜書」によれば、藏人重忠は国分家から八十貫を与えられていたが、その後伊達家に仕え天正十六年（1588）大倉に五貫文の土地と熊ケ根に町屋敷四軒を与えられた。また、熊ケ根村に移って関氏を称していた半内は、伊達家より十八貫文を与えられていたが、その後改易にあい元和七年（1621）に没した。半内の子源之丞は寛永二十一年二代藩主忠宗のとき、六貫四百二文を与えられ大倉に移っている。これより前に大倉切払屋敷にいる半内の妻に対して、「先年さぬまにて討死仕候大倉藏人居屋敷、



第21図　下大倉館跡周辺現況平面図（S＝1/2000）

第22図　下大倉館跡関係地籍図（明治19年(1886)年頃作成）

せき半内家後ニ下置候者也」という政宗の御墨印が、元和七年十月にだされている。このことから源之丞が熊ケ根村から移住した屋敷とは下大倉館跡ではなく、この切払の元大倉藏人居屋敷であったと思われる。

世臣家譜と関氏家譜書では細かな点で年号のずれなどがみられるものの、関氏が大倉家に代わって大倉村に居住するようになった経緯についてはほぼ同様の内容をもっている。

またこれとは別に、「安永風土記」では「代数有之御百姓」として、「下大倉屋敷　仲兵衛」との記載がみられ、その先祖は結城備前で元祖は大倉藏人であるとしている。

関氏家譜書によれば大倉家は、三浦氏、菅沢氏、本多氏の各氏を従えて大倉に家中集落を作っていたものと思われる。大倉藏人重忠は佐沼出陣の際これらの三氏ともに参陣し、家中ともに亡くなっている。家中のうち、菅沢家からはのちに結城家が名を改めて分家しており、これが安永風土記にみられる「下大倉屋敷　仲兵衛」の先祖と考えられる。

大倉に移ってからの関家は、その知行地を家中のものに耕作させているが、その後も三浦・菅沢の両家は代々関家の出納事務にあたっていることを示す資料が残されている。風土記書上では結城家の仲兵衛の先祖は大倉藏人であるとしているが、「伊達家世臣家譜」などから考えれば、大倉家ののち関家がその跡を継いで大倉村に入り伊達家に仕えていることは明らかであり、家中のひとつであった結城家もまたこの段階で帰農して大倉の地に定着したものと思われる。結城家は風土記書上に記載されているように、代々伊達家の御竹薮守をつとめ、大倉村の肝入なども務めている。

近世に入ってから、この下大倉館跡がどのように利用されたのかは明らかではないが、大倉家が絶えたのちに、熊ケ根村に居住していた関氏が新たに大倉に知行を与えられ移るのは約50年のちのことであり、一時的に居住地として利用されていたとしても、風土記書上の書かれた江戸時代中期には耕作地となっていたと考えられる。

「古人仲兵衛書出　　宮城郡大倉村下大倉屋敷御百姓　古人仲兵衛」

下大倉居　　一、大倉蔵人

元祖大倉蔵人下大倉居

但正宗公様御代大崎合戦之砌、御供之上佐沼ニ而打死ニ被成置候由、先代段々申伝置候儀承居申候事

二代　　備前

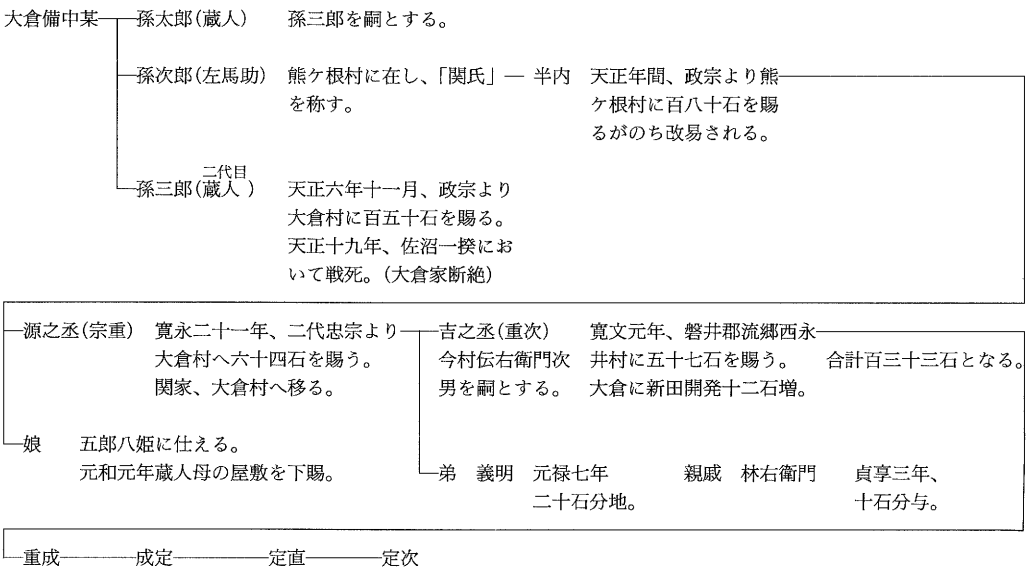
但大倉蔵人末流ニ御座候処、右蔵人落館後百姓ニ相立備前事次郎エ門ト名改仕、大倉村肝入相勤、元和年中御竿答仕代々下大倉屋敷ニ住居、大倉蔵人落館後備前代迄之年号月日ハ相知不申候得共、元祖ハ右之通代々引続申候、依之古館壱ヵ所在之、尤右蔵人武具之類壱品在之代々相譲今以所持罷在候、勿

論右蔵人氏神小倉明神壱社相立五月節句祭札ニ仕来り、於神前的討規式地主方ニ而代々引続今以往古之通ニ御座候事

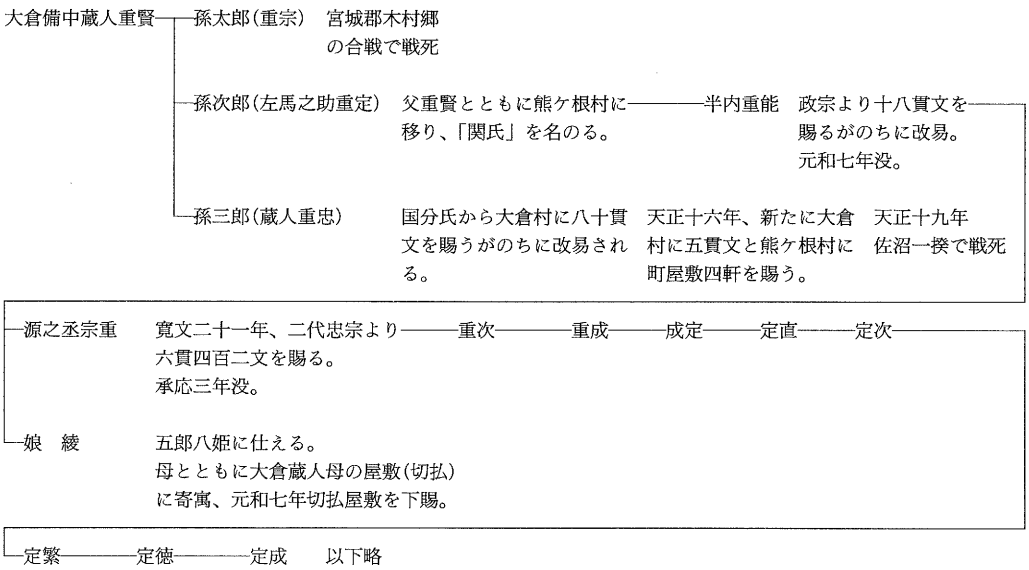
三代　　対馬

－前略－　元文弐年三月ノ急火ニ付居宅家財諸帳目録不残焼失仕候故、年号月日ハ相知不申候、対馬代慶長元年□安永三今年迄年数百八拾年、代々引続下大倉屋敷ニ住居之御百姓大倉蔵人末流ニ而、－後略－

関　氏　系　譜（伊達家世臣家譜巻十五）



関　氏　系　譜（関氏家譜書）



地籍図から見た館跡について

現況は水田や畑であり、東側には用水堀が流れているなど原形は失われている。現況図からも館跡の区割を反映するような地割は認められない（第21図）。

明治19年（1886）頃に作製された地籍図からも館跡の範囲などを看取することはできなかったが、字古館、字空堀、字館下、字塚田、字窪田、字片下り、字下倉道合などの字名がみられる。このうち字古館の範囲が文字どうり館跡の中心であったと思われ、その北側に字空堀、そして東側で芋沢村からの旧道が大倉川を渡りのぼりはじめる部分が字館下の区域となっている。また、南側から入りこむ沢の西側は字塚田、字窪田となっている。

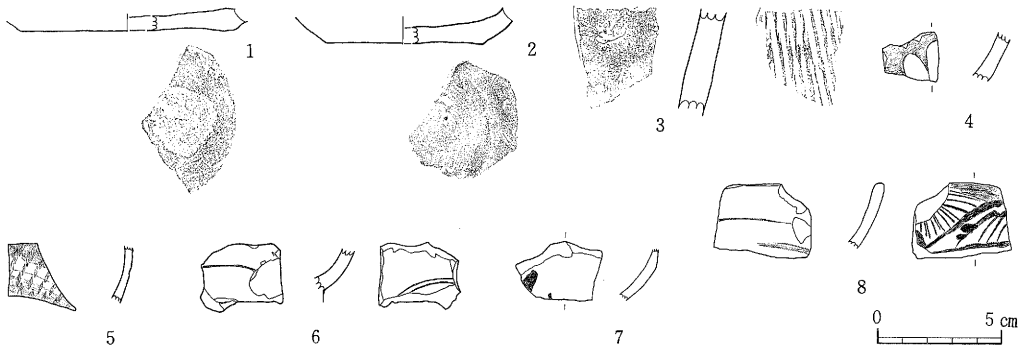
字下倉道合は、前述の下大倉館の西側を通る芋沢村からの旧道と、熊ケ根から大原館を通ってくる旧道が一緒になる地点である。（第22図）。

(4) 発見された遺物

下倉地区の各調査トレンチのうち、№12・№14トレンチ以外から遺物が出土している。出土した遺物としては縄文土器・土師器・土師質土器・陶磁器・石器・石製品がある。

① 土　器（第23図）

1・2は土師質土器の底部で、このうち1の底部にはススが付着しており灯明皿として利用されていたと思われる。3～8は下大倉館跡の土塁に近接した№10・№15トレンチから出土した陶磁器類である。



番号	地　区	層位	種　別	器　種	部　位	産　地	時　期	特　　徴	写真図版番号
1	13トレンチ		土師質土器	皿	底　部			灯明皿、スス付着	写真27
2	13トレンチ		土師質土器	皿	底　部			胎土緻密	写真27
3	10トレンチ		陶磁器	摺り鉢	体　部	堤	19C	鉄釉	写真27
4	10トレンチ		陶磁器	皿	体　部	肥　前	江　戸	花紋？	写真27
5	10トレンチ		陶磁器	行　平	体　部	相　馬	19C後半	(外)飛びかんな（内)灰釉	写真27
6	15トレンチ		陶磁器	碗	体部下半	肥　前	江　戸	染付	写真27
7	15トレンチ		陶磁器	皿	体部下半	瀬戸美濃？	18C	鉄釉	写真27
8	10トレンチ		陶磁器	皿	口縁部	肥前？	18C以降	染付・口さび有	写真27

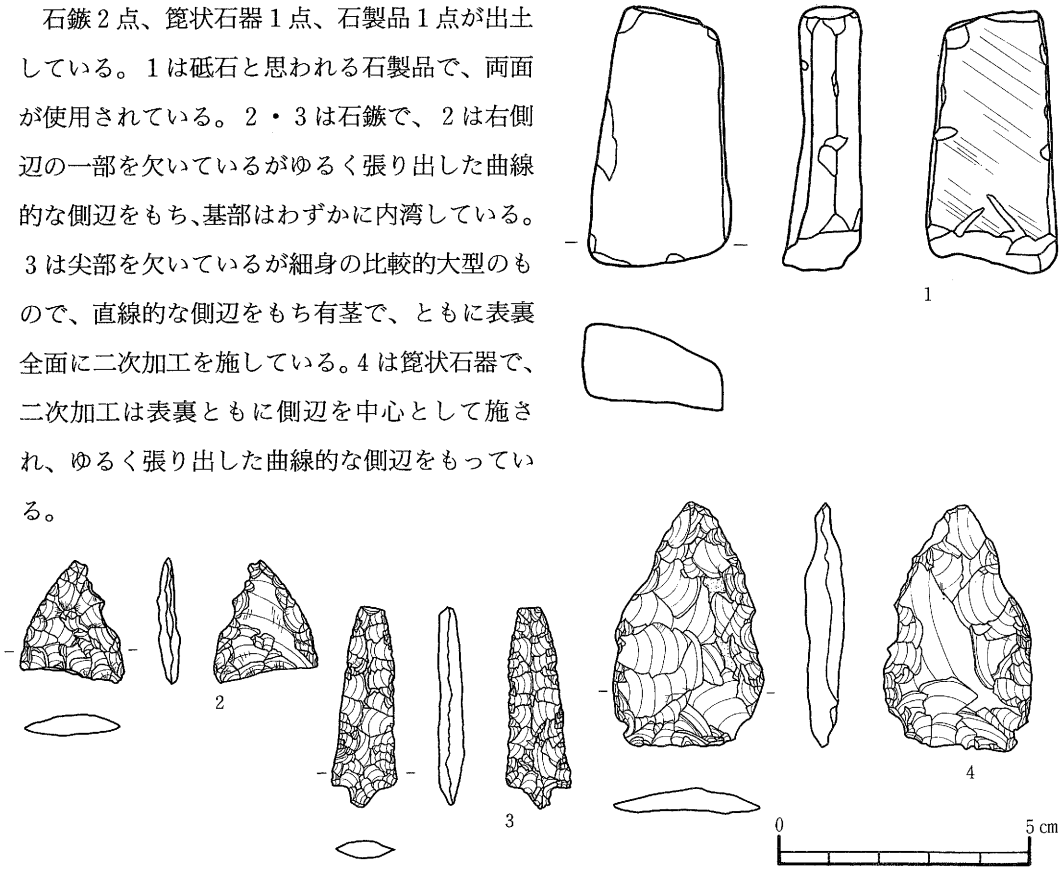
第23図　出土遺物・土師質土器陶磁器

3は堤産の摺り鉢の体部で、鉄釉が施されている。4は肥前産の皿の体部で、花紋が描かれているようである。5は相馬産の小型行平鍋の体部で、外面には飛びかんなが刻まれ内面には灰釉が施されている。6は肥前産の染付碗の体部下半で、高台部分がわずかに残っている。7は瀬戸美農産とおもわれる皿の体部で、鉄釉が施されている。8は肥前産とおもわれる染付皿の口縁部で、口さびが施されている。

出土した陶磁器類はいずれも小片であるが、年代的には18～19世紀代のものであり、下大倉館跡が機能していたと考えられる年代とはかなり離れたものである。また土師質土器についても、その年代を中世まで遡らせることができるかどうかはわからないが、出土した灯明皿については館内で使われていた可能性も考えられる。

②石　器（第24図）

石鏃2点、篦状石器1点、石製品1点が出土している。1は砥石と思われる石製品で、両面が使用されている。2・3は石鏃で、2は右側辺の一部を欠いているがゆるく張り出した曲線的な側辺をもち、基部はわずかに内湾している。3は尖部を欠いているが細身の比較的大型のもので、直線的な側辺をもち有茎で、ともに表裏全面に二次加工を施している。4は篦状石器で、二次加工は表裏ともに側辺を中心として施され、ゆるく張り出した曲線的な側辺をもっている。



番号	地　区	層位	器　種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量(g)	石　材	備　考	写真図版番号
1	10トレンチ		砥石？	52	29	15	27.9		両面に使用痕	写真36
2	13トレンチ		石　鏃	22	18	7	1.6	黒曜石		写真37
3	15トレンチ		石　鏃	39	12	4	2.2	頁　岩		写真37
4	15トレンチ		篦状石器	52	29	15	27.9	頁　岩		写真37

第24図　出土遺物・石器

V　第二次調査（平成三年度－大原地区）

1．調査の方法と経過

三年度は整備事業計画の施工に合わせて、大原地区北半部に所在する大原新田遺跡・大貫遺跡・東沢目遺跡の３遺跡を対象として調査を実施した。調査トレンチは幅３ｍを基本とし、周知の遺跡については、遺跡範囲及び性格を探ることを目的に任意にトレンチを設定した。そのほかの地点については用排水路、切り土施工部分を中心に、№１～№24トレンチまでの24本のトレンチを設定し調査に入った（第25図）。

その結果、周知の３遺跡以外に新たに確認された遺跡はなく、遺構・遺物の検出された調査地点については、協議のうえ地下遺構を破壊することのないよう設計変更を行っている。

また、元年度に調査を実施した下大倉館跡・大原館跡について、委託測量調査を実施し、遺構平面図を作成している。

各調査トレンチにおける調査成果については表４にかかげている。

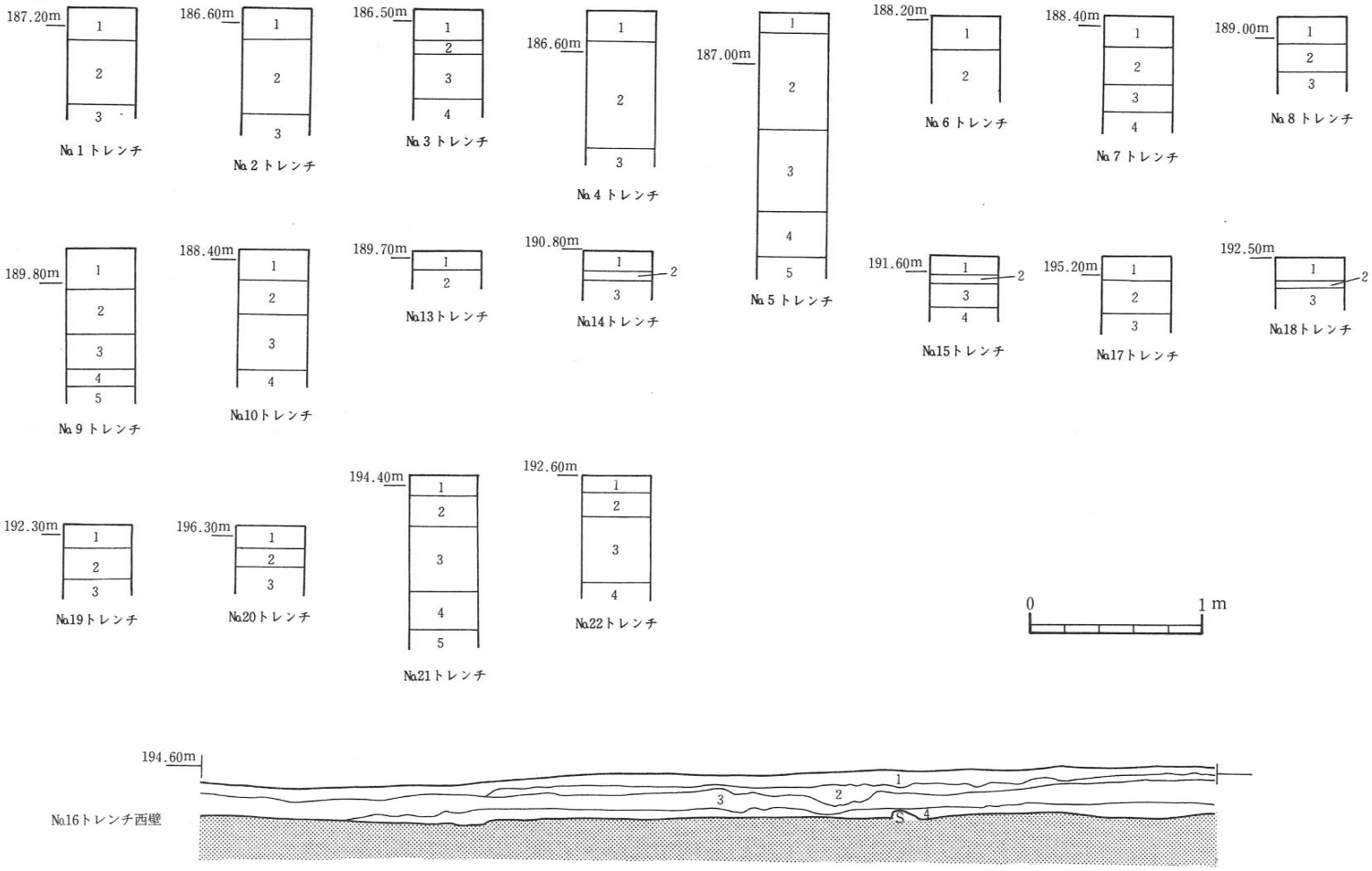
2．調査区基本層序

今回の調査対象地点は開田による影響が大きく、とくに道路東側の一段低位となる水田部分は開田によって地形が改変されており、わずかに道路沿いとその東側の部分に旧地形が認められる程度であった。そのため、各トレンチごとに層序が異なっている状況であった(第26図)。

表４　遺跡範囲確認調査成果一覧（大原地区・２次調査）

トレンチ№	(m)　調査面積（m²）		検出遺構	出土遺物
№１トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№２トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№３トレンチ	３×９	27	遺構なし	縄文土器
№４トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№５トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№６トレンチ	３×12	36	遺構なし	縄文土器
№７トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№８トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№９トレンチ	３×９	27	ピット群（近世以降）	出土遺物なし
№10トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№11トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№12トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№13トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№14トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№15トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№16トレンチ	３×９	27	遺物包含層	縄文土器（中期）
№17トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№18トレンチ	３×12	36	遺構なし	出土遺物なし
№19トレンチ	３×９	27	遺構なし	出土遺物なし
№20トレンチ	３×６	18	遺構なし	出土遺物なし
№21トレンチ	３×12	36	遺構なし	縄文土器・土師器
№22トレンチ	３×15	45	遺構なし	縄文土器
№23トレンチ	３×６	18	遺構なし	出土遺物なし
№24トレンチ	３×６	18	土坑1基	縄文土器

第25図　大原地区遺跡範囲確認調査トレンチ配置図



第26図　各調査トレンチ柱状模式図

表5　各調査トレンチ柱状模式図土層注記表（第26図）

トレンチ名	層序	土色	土質	層厚	備考
No.1トレンチ	1	現水田耕作土		18～20cm	下層に酸化鉄集積層
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	30～35cm	3層土が混る、整地層
	3	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.2トレンチ	1	現水田耕作土		18～20cm	下層に酸化鉄集積層
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	37～42cm	10YR5/6が混る、整地層
	3	礫層面			
No.3トレンチ	1	現水田耕作土		15～18cm	
	2	10YR6/6 明黄褐色	シルト	10～15cm	10YR3/1が混る、整地層
	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	20～25cm	10YR5/6が混る、整地層
	4	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.4トレンチ	1	現水田耕作土		15～20cm	下層に酸化鉄集積層
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	60～65cm	10YR5/6が混る、整地層
	3	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.5トレンチ	1	現水田耕作土		10～15cm	下層に酸化鉄集積層
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	50～55cm	
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	40～45cm	
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	20～25cm	
	5	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.6トレンチ	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	15～20cm	礫混り層
	2	10YR5/6 黄褐色	礫層		
No.7トレンチ	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	15～20cm	
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	20～25cm	10YR5/6が混る、整地層
	3	10YR5/6 黄褐色	シルト	15～20cm	礫混り、整地層
	4	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.8トレンチ	1	現水田耕作土		10～15cm	下層に酸化鉄集積層
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	15～20cm	10YR5/6が混る、整地層
	3	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.9トレンチ	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	20～25cm	現畑耕作土
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	25～30cm	
	3	10YR2/1 黒色	シルト	18～20cm	10YR5/4が若干混る
	4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	8～10cm	10YR2/1が若干混る
	5	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山
No.10トレンチ	1	現水田耕作土		15～20cm	
	2	10YR5/6と10YR3/1 ブロック層	シルト	15～20cm	
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	25～32cm	マンガン斑・酸化鉄粒子混
	4	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山・礫混り

トレンチ名	層序	土色	土質	層厚	備考
No.13トレンチ	1	現水田耕作土		10～12cm	
	2	礫層面			
No.14トレンチ	1	現水田耕作土		10～15cm	
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	5～8cm	10YR5/6が混じる
	3	10YR5/6 黄褐色			地山・礫混じり
No.15トレンチ	1	現耕作土層		10cm	
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	4～6cm	
	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	10～15cm	礫混じり、10YR5/6が混じる
	4	礫層面			
No.16トレンチ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10～15cm	
	2	10YR5/4・10YR3/2 ブロック層	シルト	8～10cm	
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	15～20cm	遺物包含層
	4	10YR4/4 褐色	シルト	8～10cm	10YR2/2が若干混る
	5	礫層面			
No.17トレンチ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10～15cm	
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	18～20cm	礫混り
	3	礫層面			
No.18トレンチ	1	現耕作土		10～15cm	
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	5cm	礫混り
	3	10YR5/6 黄褐色			地山・礫混り
No.19トレンチ	1	現耕作土		10～15cm	
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	15～20cm	
	3	10YR5/6 黄褐色			地山
No.20トレンチ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10～15cm	
	2	10YR5/6 黄褐色		10～12cm	
	3	礫層面			
No.21トレンチ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	12～15cm	
	2	10YR2/2・10YR4/3 ブロック層	シルト	15～20cm	
	3	10YR2/1 黒色	シルト	35～40cm	10YR4/3が混る、礫混り
	4	10YR3/1・10YR5/3 ブロック層	シルト	20～25cm	
	5	礫層面			
No.22トレンチ	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	10cm	耕作土
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	15～18cm	
	3	10YR2/1 黒色		35～40cm	
	4	礫層面			

No.1～No.8・No.10トレンチでは、現水田耕作土の下層に開田作業の際に撹乱された土壌が50～80cm程度あり、その下は礫層となっている。

No.9・No.11・No.12トレンチでは、50～100cm程の黒褐色シルト層（客土層）があり、その下の地山面が遺構確認面となっている。No.13～No.15・No.17～No.19トレンチでは、現水田耕作土の下層が礫層面となっている。

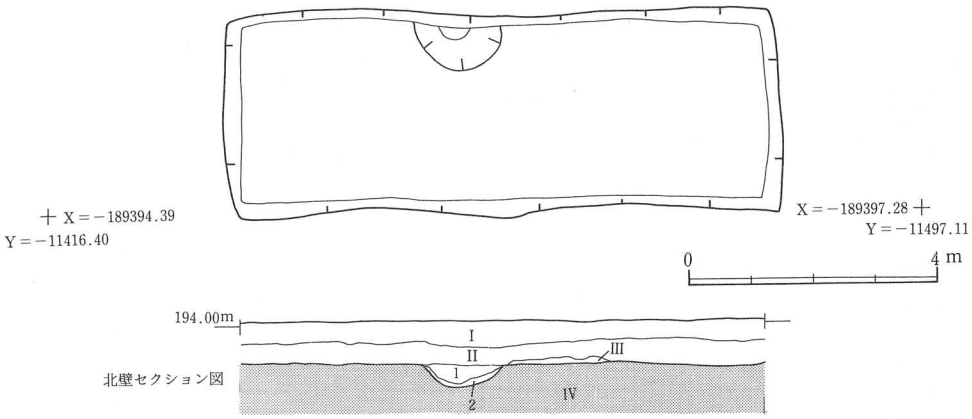
No.16トレンチでは、畑耕作土の下層に遺物包含層が検出されている。

No.22～No.24トレンチでは、50～100cm程の黒褐色シルト層（客土層）があり、その下の地山面が遺構確認面となっている。

3．発見された遺構と遺物

調査の結果、大貫遺跡の地点では、No.16トレンチにおいて縄文時代中期後葉を中心とする遺物包含層が検出されたほか、No.24トレンチでは土坑1基が検出された。遺物としてはNo.21・No.22・No.24トレンチで縄文土器が出土している。

大原新田遺跡の地点では、トレンチからの遺物出土はなかったが、縄文土器・土師器が表採されたほか、No.9トレンチで近世以降のものと思われるピット群が検出されている。



第27図　土層注記表

	層序	土　色	土　質	層厚	備　考
基本層	I	10YR3/2 黒褐色	シルト	30～40cm	若干小礫混り
	II	10YR3/1 黒褐色	シルト	28～35cm	
	III	10YR4/4 褐　色	シルト	10cm	
	IV	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト		地山・礫混り

	層序	土　色	土　質	層厚	備　考
土坑埋土	1	10YR2/2 黒褐色	シルト		10YR3/4が混る
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト		10YR4/4が混る

第27図　No. 24トレンチ平面図及び北壁セクション図

(1)　発見された遺構

①　遺物包含層（No.16トレンチ－第26図）

調査対象区北東側のNo.16トレンチで遺物包含層が検出された。包含層は層厚15～20cm程度であり、トレンチ南側で倒木痕の影響を受けていた。出土した遺物は土器片がほとんどで、縄文時代中期後葉のものを主体としている。

②　土　坑（No.24トレンチ－第27図）

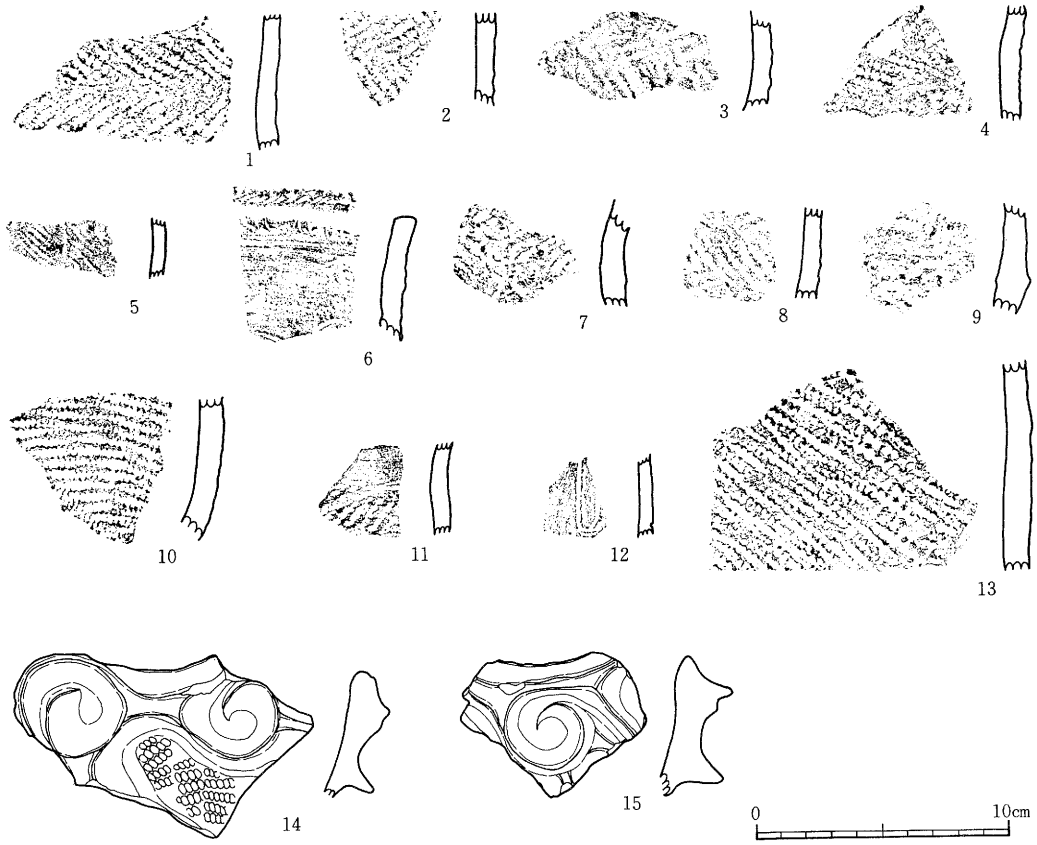
No.24トレンチの北壁にかかって土坑の一部を検出した。北半部が調査区外となっているが、長軸約150cmのほぼ円形を呈すると思われる。深さは約30cmで、底面はほぼ平坦である。埋土中から遺物は出土しなかったが、No.24トレンチからは羽状縄文系の土器が出土しており、この土坑の時期についても同時期のものと考えられる。

(2)　発見された遺物

①　土　器

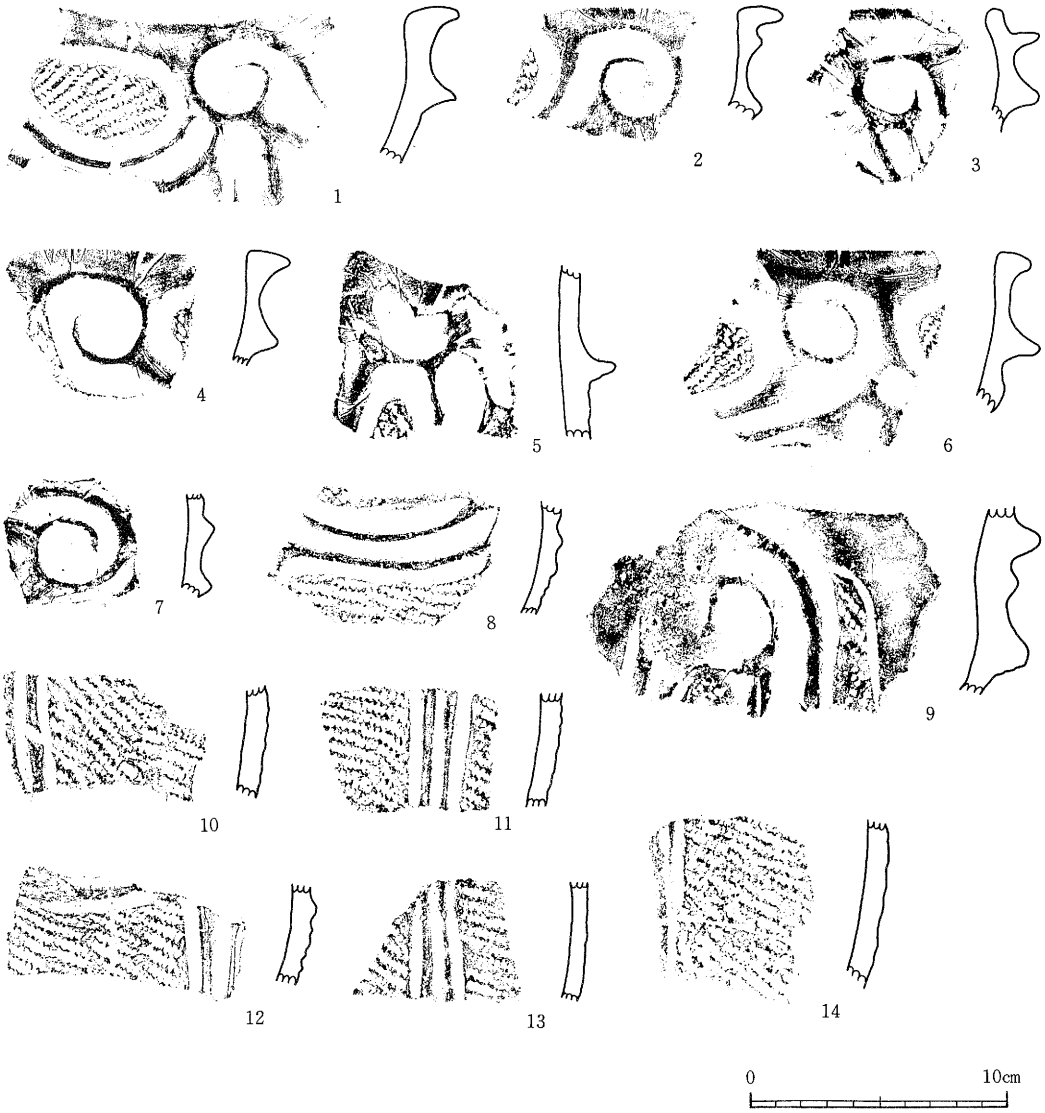
第28図１～４・７・８は、結束のない羽状縄文が施文されている土器群である。11は深鉢の頸部で、口縁部が無文となり斜縄文が施されている。６は、口唇部及びその側面に細い刻み目が入れられその下に撚糸の押圧による文様が施されている。12は、細い沈線によって「U」状文が施されている。

第28図14･15、第29図１～４・６、第30図５・６は口縁部資料で、胴上部でくびれ口縁部が内湾すると思われる土器群である。いずれも渦巻隆線文や隆沈線による横位楕円区画文によって構



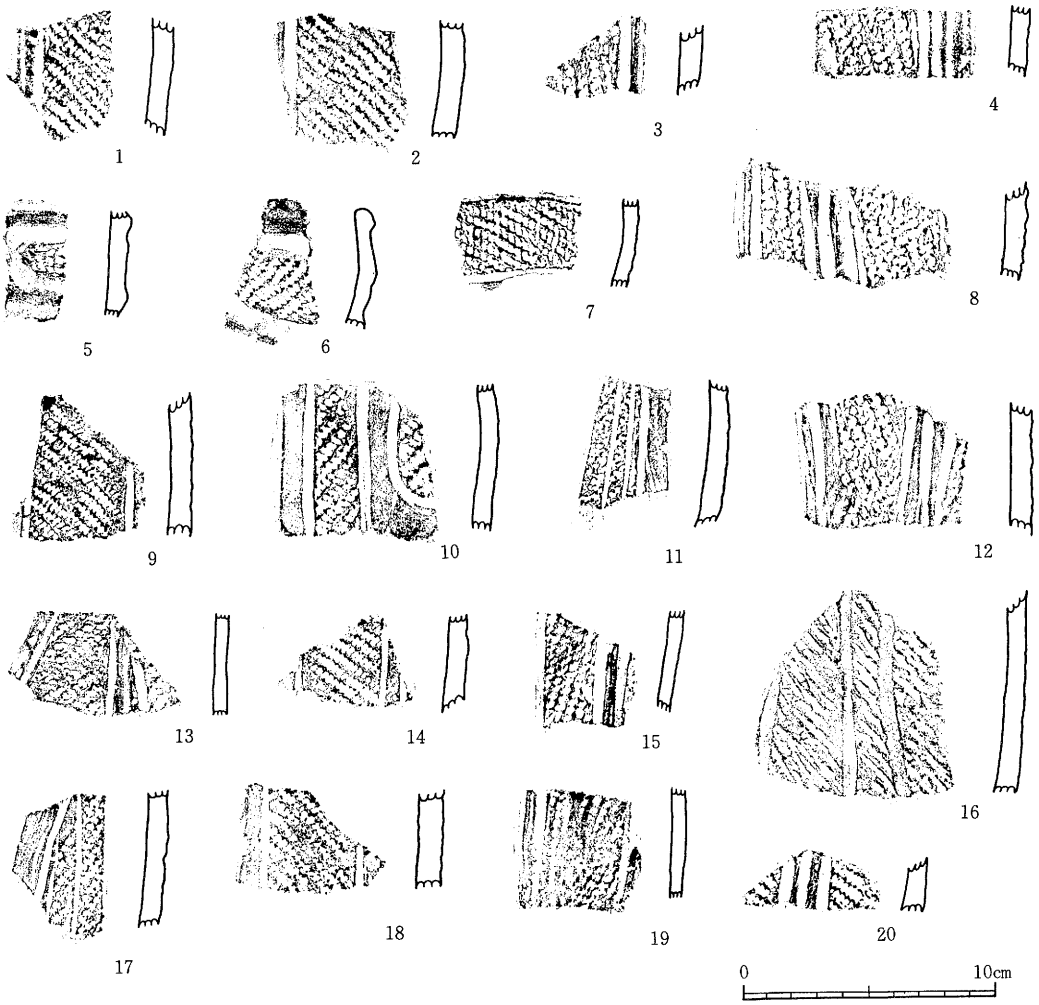
番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様　・　特　徴	備　考	写真図版番号
1	24トレンチ	表　土	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による結束のない羽状縄文		28－1
2	23トレンチ	2　層	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による結束のない羽状縄文	№4・7・8と同一個体	28－2
3	23トレンチ	2　層	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による結束のない羽状縄文		28－3
4	23トレンチ	2　層	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による結束のない羽状縄文	№2・7・8と同一個体	28－4
5	23トレンチ	2　層	体　部	A－1類	RL縄文		28－5
6	23トレンチ	2　層	口縁部	A－1類	口唇部に刻目・撚糸圧痕	繊維混入	28－6
7	23トレンチ	2　層	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による羽状縄文（菱形文）	№2・4・8と同一個体	28－7
8	23トレンチ	2　層	体　部	A－1a類	RL・LR縄文による結束のない羽状縄文	№2・4・7と同一個体	28－8
9	23トレンチ	2　層	体　部	A－2b類	隆線上に瓜形の刻み目が入る	一部表面剝落	28－9
10	21トレンチ	2　層	体　部	B－類	LR縄文		28－10
11	21トレンチ	2　層	頸　部	A－5a類	口縁部無文・RL縄文		28－11
12	21トレンチ	表　採	体　部	A－2b類	巾せまい「U」字状の区画沈線		28－12
13	21トレンチ	表　土	体　部	B－類	LR縄文		28－13
14	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	渦巻隆線文、楕円隆線文RL縄文充塡		28－14
15	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	渦巻隆線文		28－15

第28図　出土遺物・土器(1)



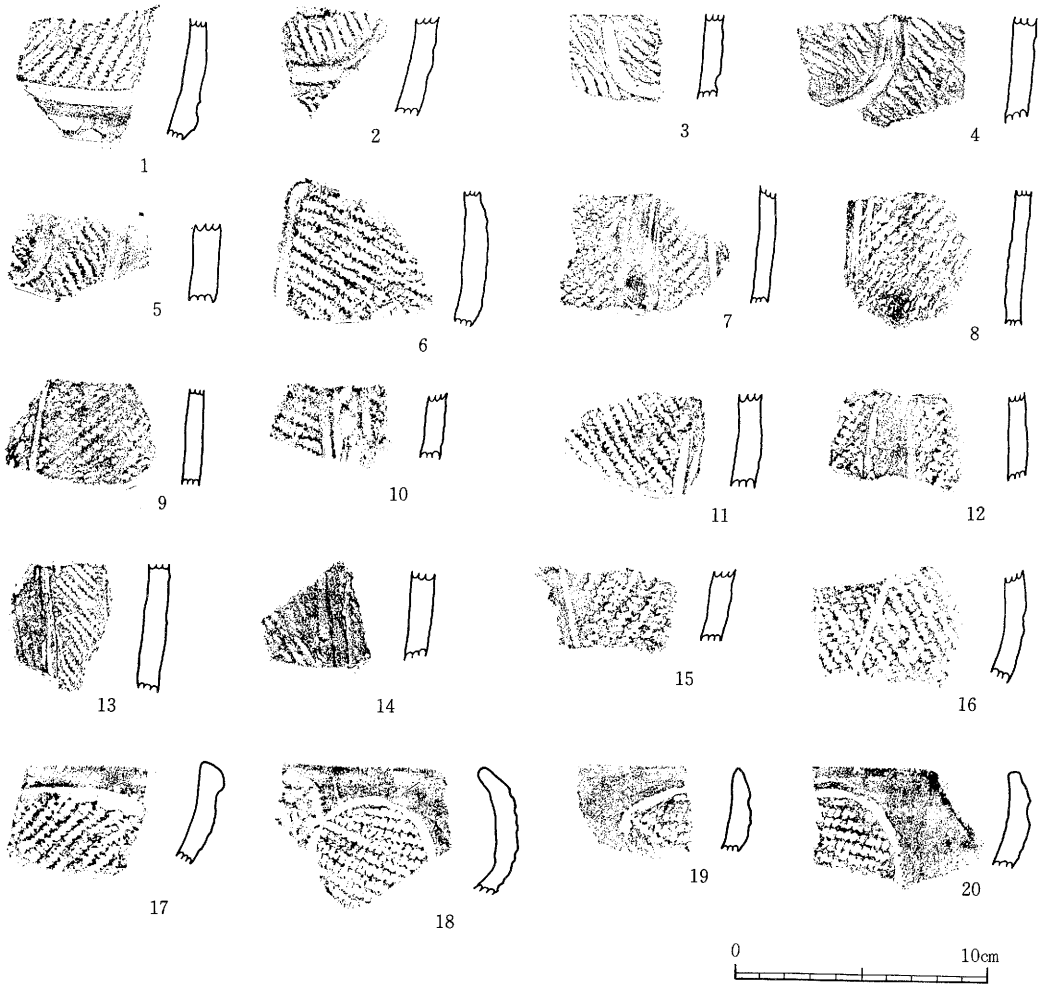
番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様・特　徴	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	3層下	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線・楕円区画文・LR縄文	ミガキ　No.6と同一個体	29－1
2	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線・楕円区画文	ミガキ	29－2
3	16トレンチ	表　土	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線文	ミガキ	29－3
4	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線文	ミガキ	29－4
5	16トレンチ	表　土	体　部	A－4b類	渦巻隆（稜）沈線文	No.9と同一個体	29－5
6	16トレンチ	3層下	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線・楕円区画文・LR縄文	ミガキ　No.1と同一個体	29－6
7	16トレンチ	2　層	口縁部	A－4a類	渦巻隆（稜）沈線文	ミガキ	30－7
8	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	渦巻隆（稜）沈線・楕円区画文・LR縄文		30－8
9	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	渦巻隆沈線文・区画沈線・RL縄文	No.5と同一個体	30－9
10	16トレンチ	表　土	体　部	A－3類	隆沈線区画・RL縄文		30－10
11	16トレンチ	3層下	体　部	A－3類	隆沈線区画・LR縄文		30－11
12	16トレンチ	3層下	体　部	A－3類	隆沈線区画・RL縄文		30－12
13	16トレンチ	3　層	体　部	A－3類	隆沈線区画・RL縄文		30－13
14	16トレンチ	3　層	体　部	A－3類	隆沈線区画・RL縄文		30－14

第29図　出土遺物・土器(2)



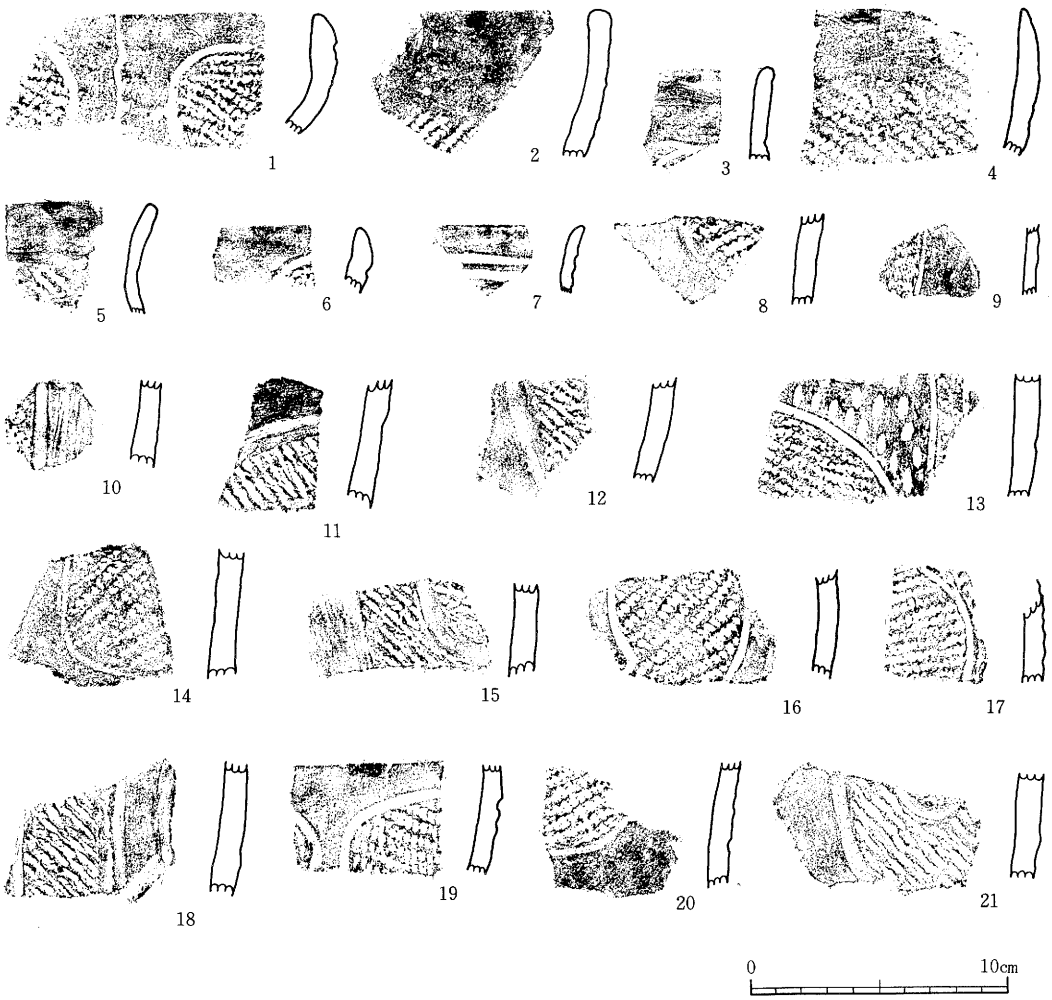
番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様　・　特　徴	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	3層下	体　部	A－3類	隆沈線区画・LR縄文		31－1
2	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	隆沈線区画・RL縄文		31－2
3	16トレンチ	3層下	体　部	A－3b類	沈線区画（沈線間隆（稜）線化）		31－3
4	16トレンチ	3　層	体　部	A－3b類	隆沈線区画・LR縄文		31－4
5	16トレンチ	3層下	口縁部	A－4a類	隆沈線・楕円区画文		31－5
6	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	隆沈線楕円区画文・LR縄文		31－6
7	16トレンチ	2　層	体　部	A－4b類	RLR縄文		31－7
8	16トレンチ	3層下	体　部	A－3b類	（隆）沈線区画・RLR縄文		31－8
9	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	沈線区画・LR縄文		31－9
10	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RL縄文		31－10
11	16トレンチ	2　層	体　部	A－4b類	沈線区画		31－11
12	16トレンチ	3層下	体　部	A－3b類	隆沈線区画・RLR縄文		31－12
13	16トレンチ	3層下	体　部	A－3b類	隆沈線区画・RL縄文	表面カーボン付着	31－13
14	16トレンチ	表　土	体　部	A－4b類	沈線区画・LR縄文		31－14
15	16トレンチ	3層下	体　部	A－3b類	隆沈線区画・RLR縄文		31－15
16	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	沈線区画・無節L		31－16
17	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・RLR縄文		32－17
18	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	沈線区画・LR縄文		32－18
19	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	沈線区画・RLR縄文		32－19
20	16トレンチ	3層下	体　部	A－3類	隆沈線区画・RL縄文		32－20

第30図　出土遺物・土器(3)



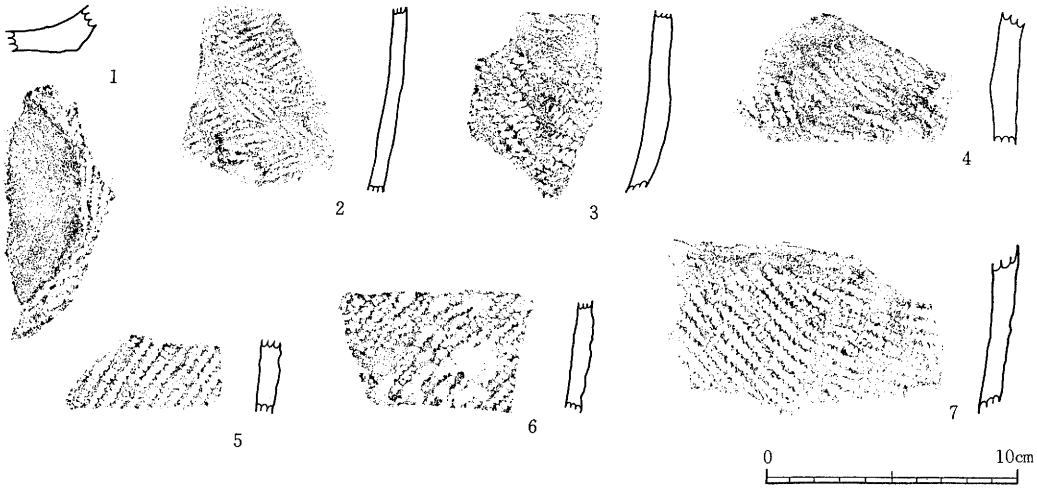
番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様・特　徴	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	区画沈隆線・RL縄文		33－1
2	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		33－2
3	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・無節L		33－3
4	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	区画沈線・無節L		33－4
5	16トレンチ	2　層	体　部	A－5b類	区画沈線・LR縄文		33－5
6	16トレンチ	2　層	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		33－6
7	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文		33－7
8	16トレンチ	2　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RLR縄文		33－8
9	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文・刺突文		33－9
10	16トレンチ	3　層	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文・沈線間に刺突文		33－10
11	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	区画沈線・LR縄文		33－11
12	16トレンチ	3層下	体　部	A－5b類	区画沈線・RLR縄文		33－12
13	16トレンチ	表　土	体　部	A－4b類	区画沈線・RL縄文		33－13
14	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	区画沈線・無節L		33－14
15	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	区画沈線・RLR縄文		33－15
16	16トレンチ	3層下	体　部	A－4b類	LR縄文・沈線文		33－16
17	16トレンチ	3　層	口縁部	A－4a類	隆沈線楕円区画文		33－17
18	16トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	区画沈線・LRL縄文		33－18
19	16トレンチ	3層下	口縁部	A－5a類	区画沈線・LR縄文		33－19
20	16トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	区画沈線・LR縄文		33－20

第31図　出土遺物・土器(4)



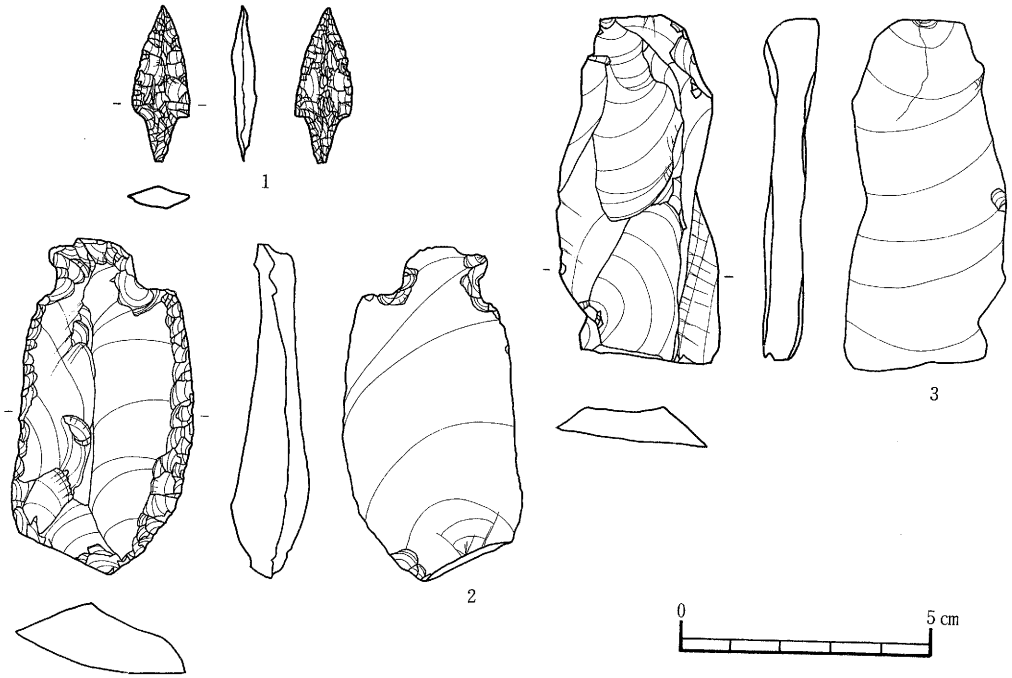
番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様　・　特　徴	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	3層下	口縁部	A－5a類	区画沈線・LR縄文		34－1
2	16トレンチ	2　層	口縁部	A－5a類	口縁部無文・RL縄文		34－2
3	16トレンチ	表　土	口縁部	A－5a類	口縁部無文・区画沈線		35－3
4	16トレンチ	3層下	口縁部	A－5a類	口縁部無文・LR縄文		35－4
5	16トレンチ	表　土	口縁部	A－5a類	口縁部無文・LR縄文	ミガキ	35－5
6	16トレンチ	3　層	口縁部	A－5a類	区画沈線・LR縄文		35－6
7	16トレンチ	3層下	口縁部	A－6a類	平行沈線		35－7
8	16トレンチ	3層下	体　部	A－5b類	区画沈線・RL縄文		35－8
9	16トレンチ	表　土	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－9
10	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線		35－10
11	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－11
12	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－12
13	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・刺突文・LR縄文		35－13
14	16トレンチ	3層下	体　部	A－5b類	区画沈線・RL縄文		35－14
15	16トレンチ	2　層	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－15
16	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・RL縄文		35－16
17	16トレンチ	3層下	体　部	A－5b類	区画沈線・LR縄文		35－17
18	16トレンチ	3層下	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－18
19	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・RL縄文		35－19
20	16トレンチ	3　層	体　部	A－5b類	区画沈線・RLR縄文		35－20
21	16トレンチ	表　土	体　部	A－5b類	区画沈線・無節L		35－21

第32図　出土遺物・土器 (5)



番号	地　区	層位	部位	分　類	文　様・特　徴	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	表　土	底　部	B 類	LR縄文		35－1
2	16トレンチ	2層下	体　部	B 類	RL縄文		35－2
3	16トレンチ	2層下	体　部	B 類	LR縄文		35－3
4	16トレンチ	2　層	体　部	B 類	RL縄文		35－4
5	16トレンチ	2層下	体　部	B 類	RL縄文		35－5
6	16トレンチ	2　層	体　部	B 類	RL縄文		35－6
7	16トレンチ	2層下	体　部	B 類	RL縄文		35－7

第33図　出土遺物・土器 (6)



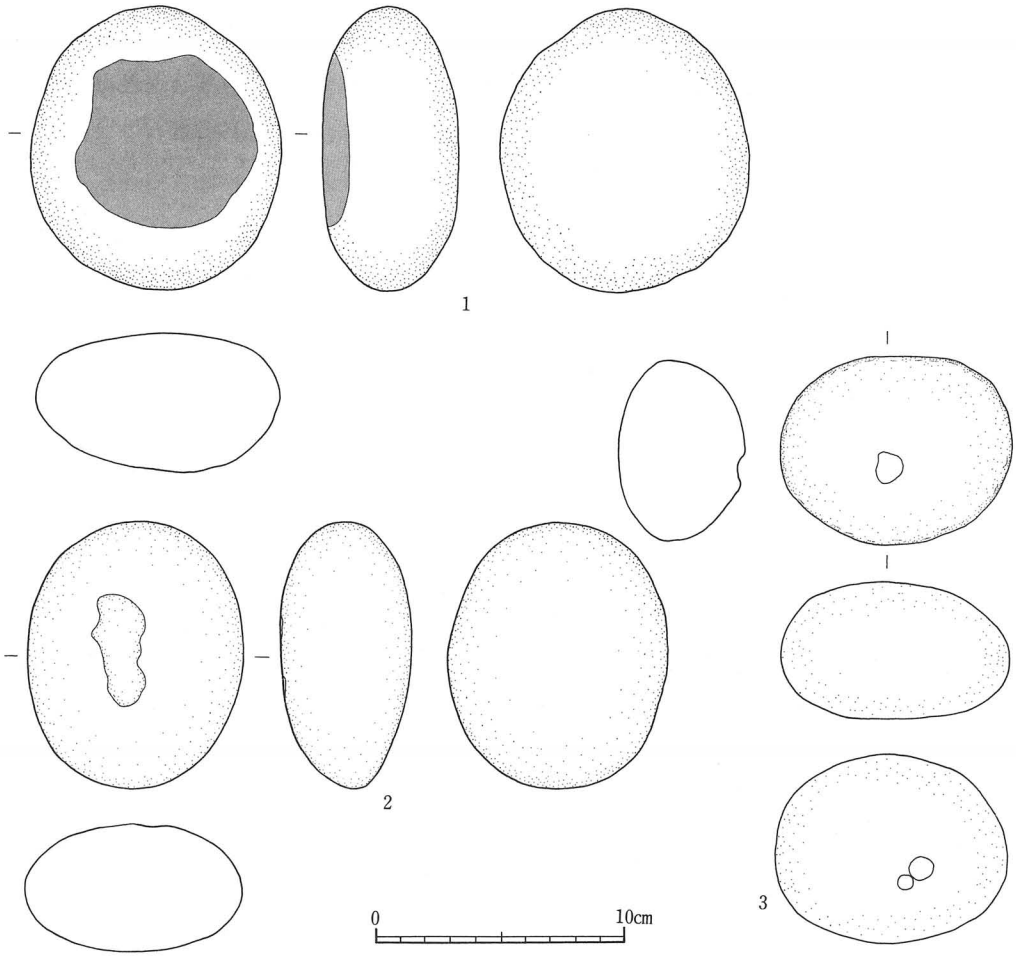
番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考	写真図版番号
1	16トレンチ	2　層	石　鏃	31	11	5	1.1	頁　岩		写真37
2	16トレンチ	2層下	石　匙	65	39	11	28.2	頁　岩		写真37
3	16トレンチ	2　層	剝　片	67	30	10	20.2	頁　岩		写真37

第34図　出土遺物・石器 (1)

成される口縁部文様帯を有している。横位楕円区画文内には縄文が充塡されている。第29図５・７～９は体部資料で、同様に渦巻隆線文や隆沈線による楕円区画文になるものと思われる。

第29図10～14、第30図１～４・８・12・13・20は、隆沈線によって文様が施される土器群である。断片的なため全体の文様構成は明らかではないが、２本隆線３本沈線の構成によって文様が施文されている。

第30図９～19、第31図１～16、第32図13は、沈線によって文様が施された土器群の体部資料である。いずれも沈線にって「∩」状文もしくは楕円文が施され、区画内には縄文が充塡されるものである。なかには、第31図９、第32図13のように刺突が充塡されるものもある。



番号	地　区	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	使　用　痕	写真図版番号
1	16トレンチ	2　層	す　り　石	112	98	52	860		磨→片面	写真37
2	16トレンチ	2層下	凹　　石	107	87	52	560		凹→片面	写真37
3	16トレンチ	2　層	凹　　石	92	75	53	480		凹→片面	写真37

第35図　出土遺物・石器(2)

第31図17～20、第32図１～７は、口縁部資料で、胴上部でくびれ口縁部が内湾すると思われる土器群である。いずれも沈線によって「∩」状文もしくは楕円文が施され、区画内には縄文が充塡されている。第32図８～12・14～21も、同様に沈線によって「∩」状文もしくは楕円文が施され区画内には縄文が充塡され、区画外は幅の広い磨消縄文となっている。

第33図１～７は、いずれも地文のみの土器群である。１が底部資料である以外はいずれも体部の破片資料であるが、地文にはRL・LR縄文がある。

今回の調査で出土した縄文土器の年代について、Ａ－１類としたものは、羽状縄文を特徴としており、大木１～２式に比定される土器群である。またＡ－３類としたものは、隆沈線による渦巻文と楕円区画文による口縁文様帯と、体部には２本隆線３本沈線の構成によって文様が施文されるものを特徴としており、大木８ｂ式に比定される土器群である。№16トレンチの遺物包含層から出土した土器のうち、Ａ－４類としたものは大木９式の古い段階、Ａ－５類としたものは大木９式の新しい段階の土器群にそれぞれ比定されるものと思われる。

② 石　器（第34図・第35図）

石鏃１点、石匙１点、剝片素材１点、礫石器２点が出土している。

第33図１は有茎の石鏃で、二次加工が全面に及んでいる。２は二縁辺構成の石匙で、片面の両側辺にのみ二次加工が施されて刃部が作り出されている。剝片の末端につまみが作り出されているが、下端には素材となった剝片の打撃面が残っている。

第34図の礫石器のうち、１は磨石で片面にのみ磨面をもっている。２・３は凹石の可能性のあるもので、それぞれ片面に浅い凹部をもつが明確な使用痕跡は認められない。

Ⅵ　ま　と　め

1．今回、遺跡範囲確認調査を実施した青葉区大倉地区は、大倉川の形成した河岸段丘上に位置している。

2．今回の調査では、中世の館跡の一部を調査することができたほか、縄文時代前期・中期及び近世の遺構・遺物が発見されている。

3．縄文時代の遺構としては土坑や遺物包含層がある。遺物としては土器・石器が出土しており、遺物包含層からの遺物は中期後葉の大木９式期のものを中心としている。また、土坑の検出されたトレンチからの遺物は前期初頭の大木１～２式期のものであり、土坑からの遺物の出土はなかったが同時期のものと思われる。

4．中世以降のものとして、大原館跡及び下大倉館跡の調査を行った。今回は館跡内部の調査は実施していないものの、現状で確認されていた遺構を含む調査を実施し館跡の構造の一部を探ることができた。大原館跡の館主については不明であるが、下大倉館跡の館主については、文献などから大倉氏（のちの関氏）と考えられる。

(1)　大原館跡の調査からは館跡の機能していた時期を示すような遺物はなかったが、現状で確認されていた土塁の外側にさらに二重に土塁と堀を巡らせた構造をもっていたことが確認された。

(2)　下大倉館跡の調査からも館跡の機能していた時期を示すような遺物はなかったが、現状で確認されていた土塁の外側に大規模な堀が巡らされていることが確認された。

5．近世以降のものとしては水田跡・ピット群があり、その外に時期不明のものとして溝状遺構がある。

6．今回の調査はあくまでも遺跡の性格と範囲を確定し、土地改良事業の実施にあたって遺跡を保存するための協議資料を得ることを目的として実施しており、今回明らかになったことは当地域の様相の一端を示すものにすぎない。

引用参考文献

宮城町誌　「本編」(1969)

宮城町誌　「本編」(改訂版)(1988)

宮城町誌　「資料編」(1967)

紫桃正隆　「仙台領内古城・館」第三巻(1973)

平　重道　「仙台藩における一在郷武士の生活形態－国分荘大倉村関家の研究－」
東北福祉短期大学論叢第三巻(1961)

仙台叢書続巻　「伊達家世臣家譜」巻十一、巻十二、巻十五(1937)

丹羽　茂　「大木式土器」縄文文化の研究4　雄山閣(1981)

吉岡恭平・工藤信一郎「宮城県仙台市野川遺跡の調査」考古学ジャーナル349(1992)

宮城町文化財調査報告書第3集　「御殿館跡」(1981)

宮城町文化財調査報告書第5集　「宮城町の文化財」(1986)

仙台市文化財調査報告書第100集　「山田上ノ台遺跡」(1987)

宮城県文化財調査報告書第66集　「歴史の道調査報告書－関山越最上街道－」(1980)

宮城県文化財調査報告書第102集　「柳津館山館跡」(1984)

宮城県文化財調査報告書第107集　「小梁川東遺跡」(1985)

宮城県文化財調査報告書第126集　「大梁川遺跡・小梁川遺跡」(1988)

宮城県文化財調査報告書第146集　「下草古城跡」(1992)

宮城県文化財調査報告書第154集　「下草古城跡」(1993)

写　真　図　版

写真１　大原地区航空写真(1956年撮影)

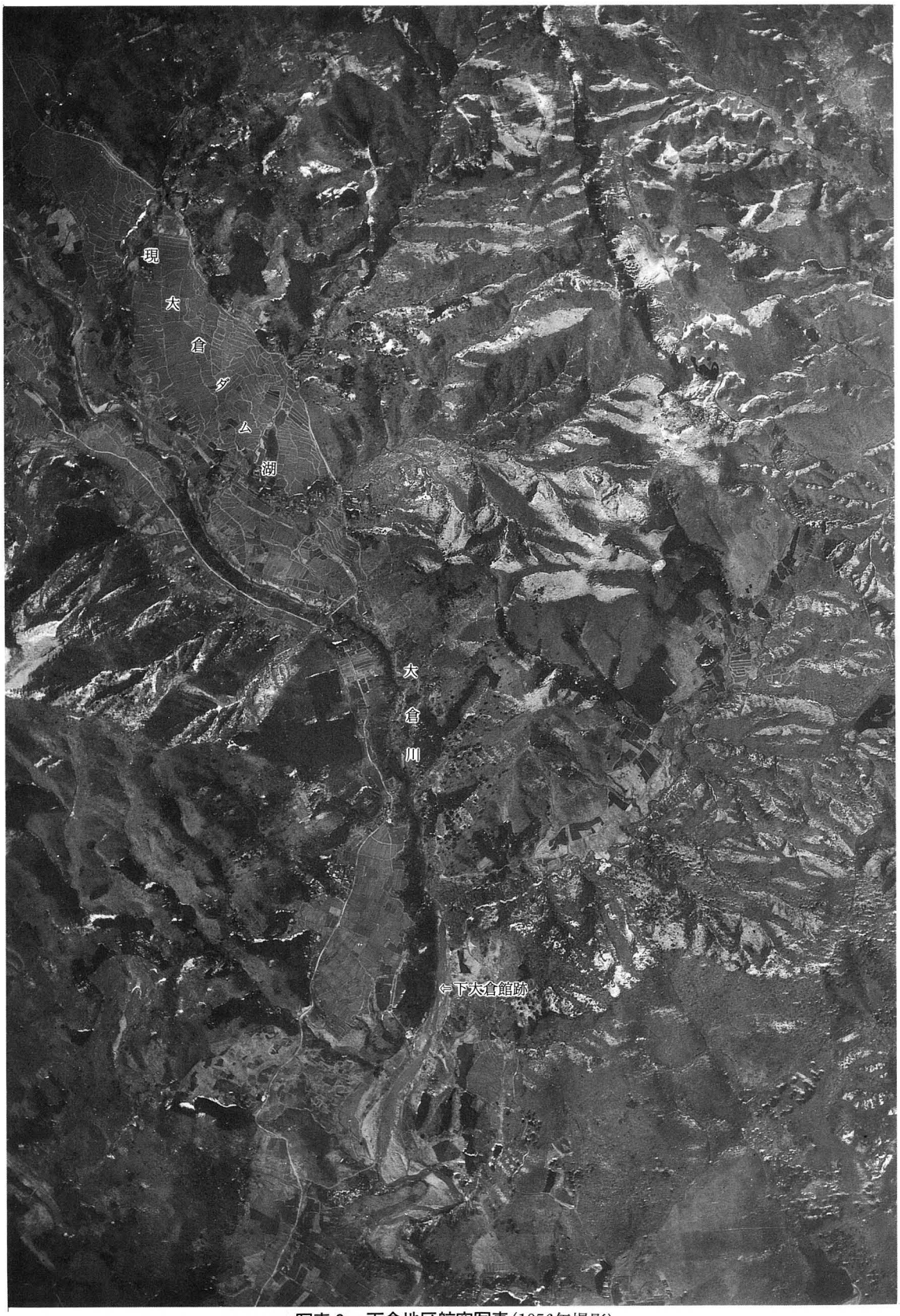


写真 2　下倉地区航空写真(1956年撮影)

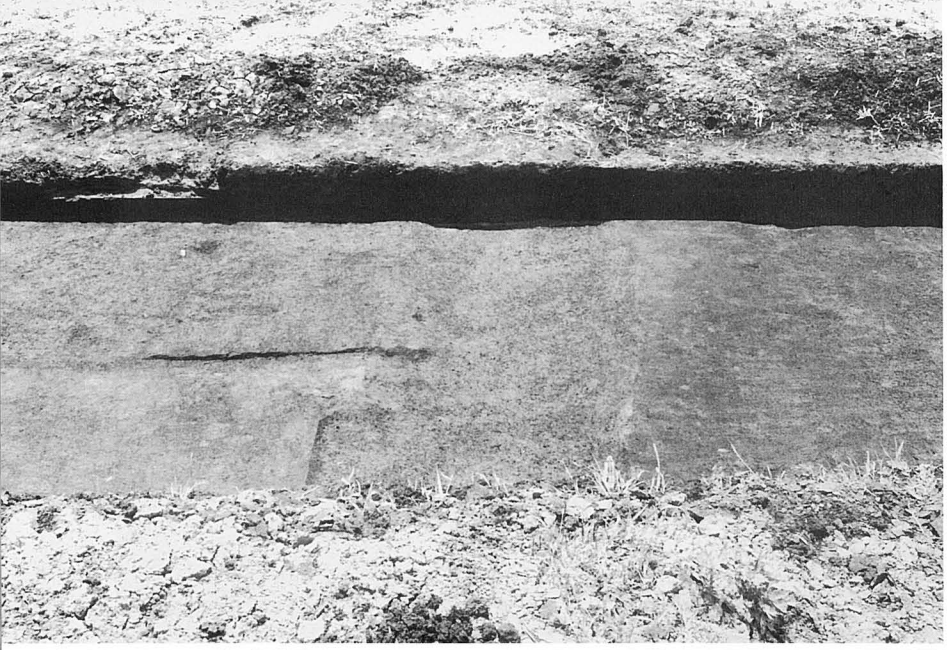


写真 3
大原地区（１次調査）
No. 1 トレンチ
ＳＤ１完掘状況

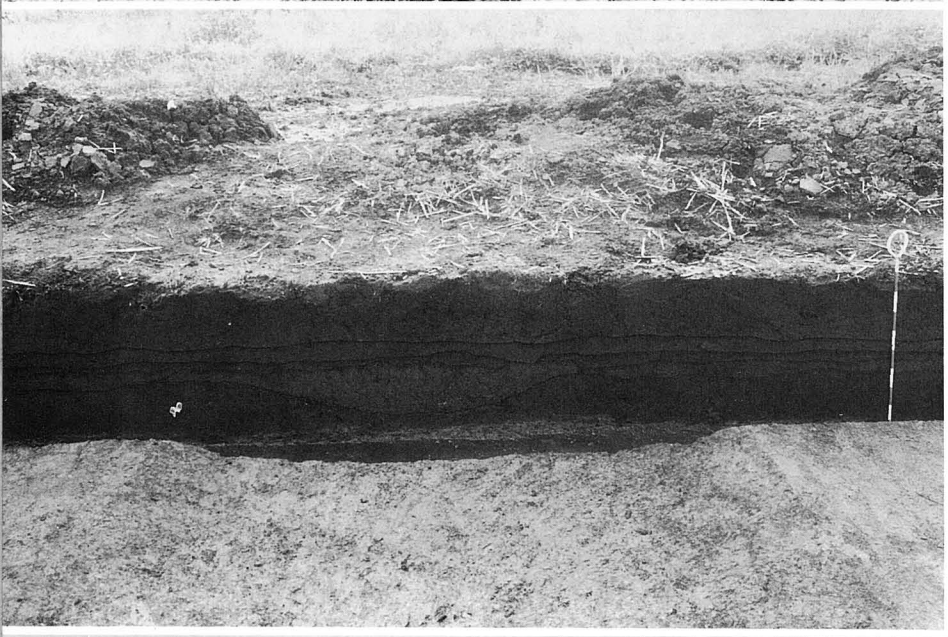


写真 4
大原地区（１次調査）
No. 1 トレンチ
ＳＤ１セクション

写真 5
大原館跡遠景及び定義道旧道　（南西側、熊ケ根から）

写真６
大原館跡
No.４トレンチ（北側から）

写真７
大原館跡
土塁ＳＬ１・堀ＳＤ１

写真８
大原館跡
堀ＳＤ１セクション

写真 9
下倉地区（1 次調査）
No.10トレンチ・溝跡

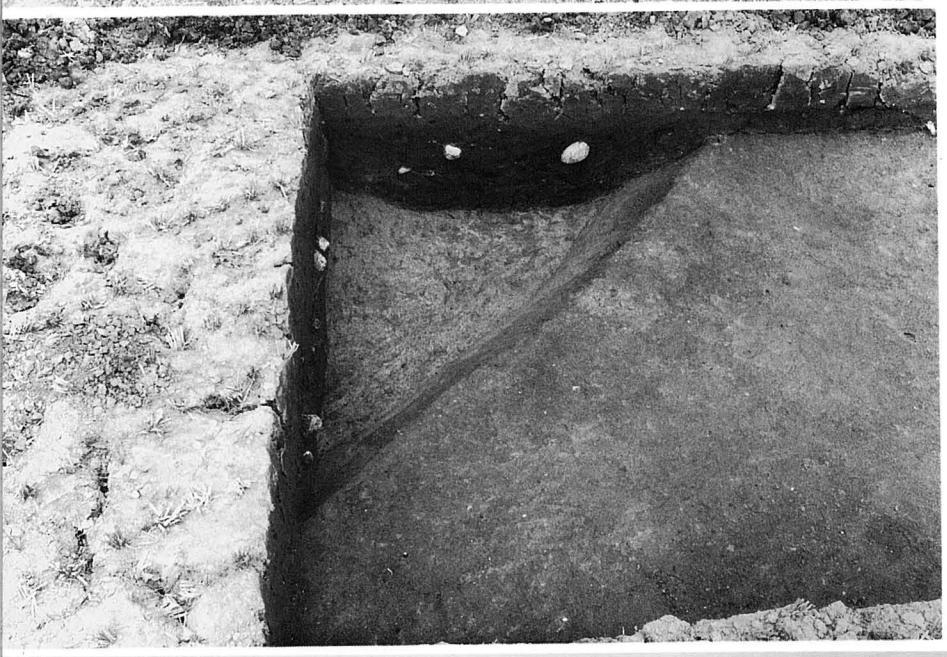


写真10
下倉地区（1 次調査）
No.11トレンチ・溝跡

写真11
下大倉館跡遠景
（北側から）

写真12
下大倉館跡
No.15トレンチ
堀跡検出状況
（北側から）

写真13
下大倉館跡
No.1トレンチ・堀跡
（西側から）

写真14
下大倉館跡
現地説明会

写真15
大原地区（２次調査）
No. 5 トレンチ（西側から）

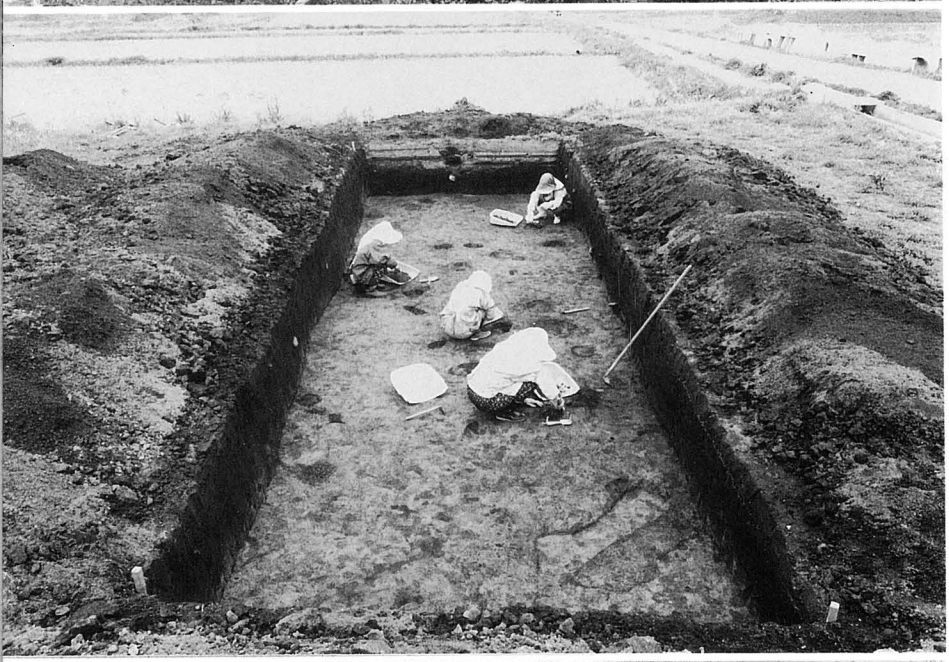


写真16
大原地区（２次調査）
No. 9 トレンチ（北側から）

写真17
大原地区（２次調査）
No.22トレンチ・
溝状遺構検出状況
（北側から）

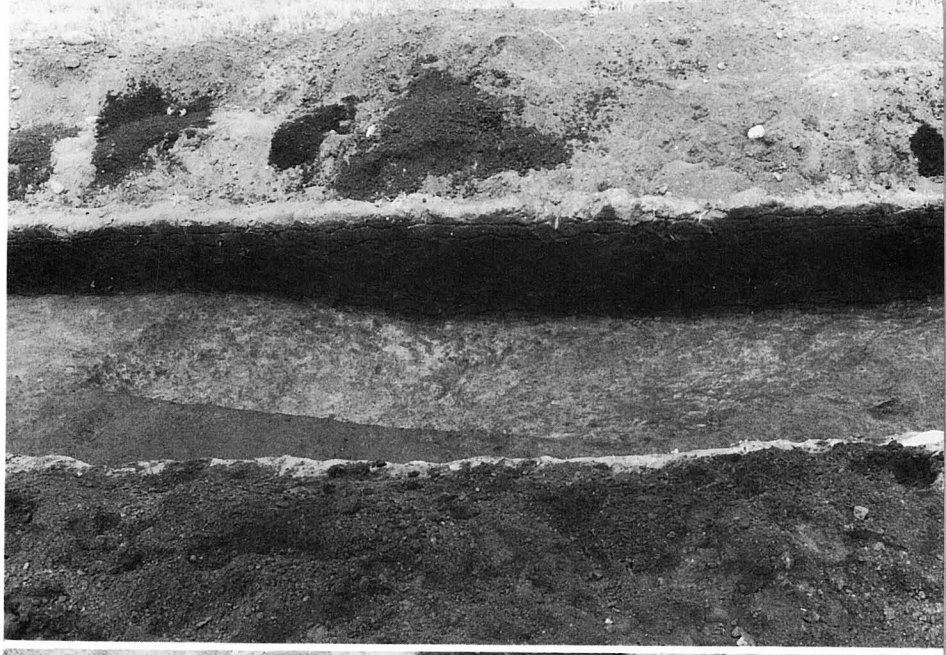


写真18
大原地区（２次調査）
No.22トレンチ・
溝状遺構半切状況
（東側から）

写真19
大原地区（２次調査）
No.16トレンチ包含層完堀後

写真20
大原地区（２次調査）
No.16トレンチ西壁
セクション

写真21
大原地区（２次調査）
No15トレンチ（東側から）

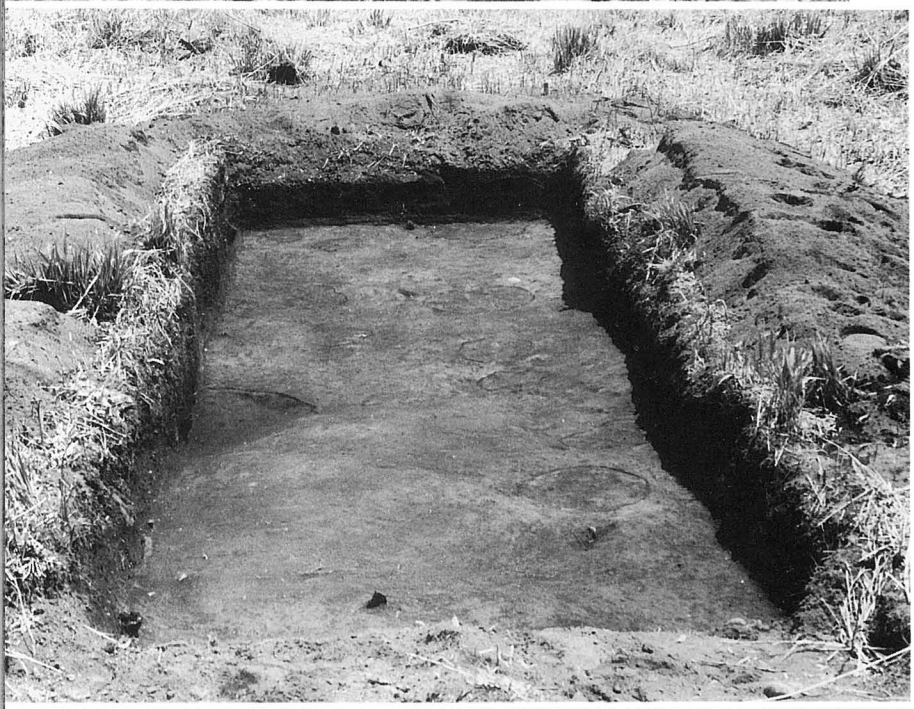


写真22
大原地区（２次調査）
No24トレンチ（西側から）

写真23
大原地区（２次調査）
No24トレンチ・土坑

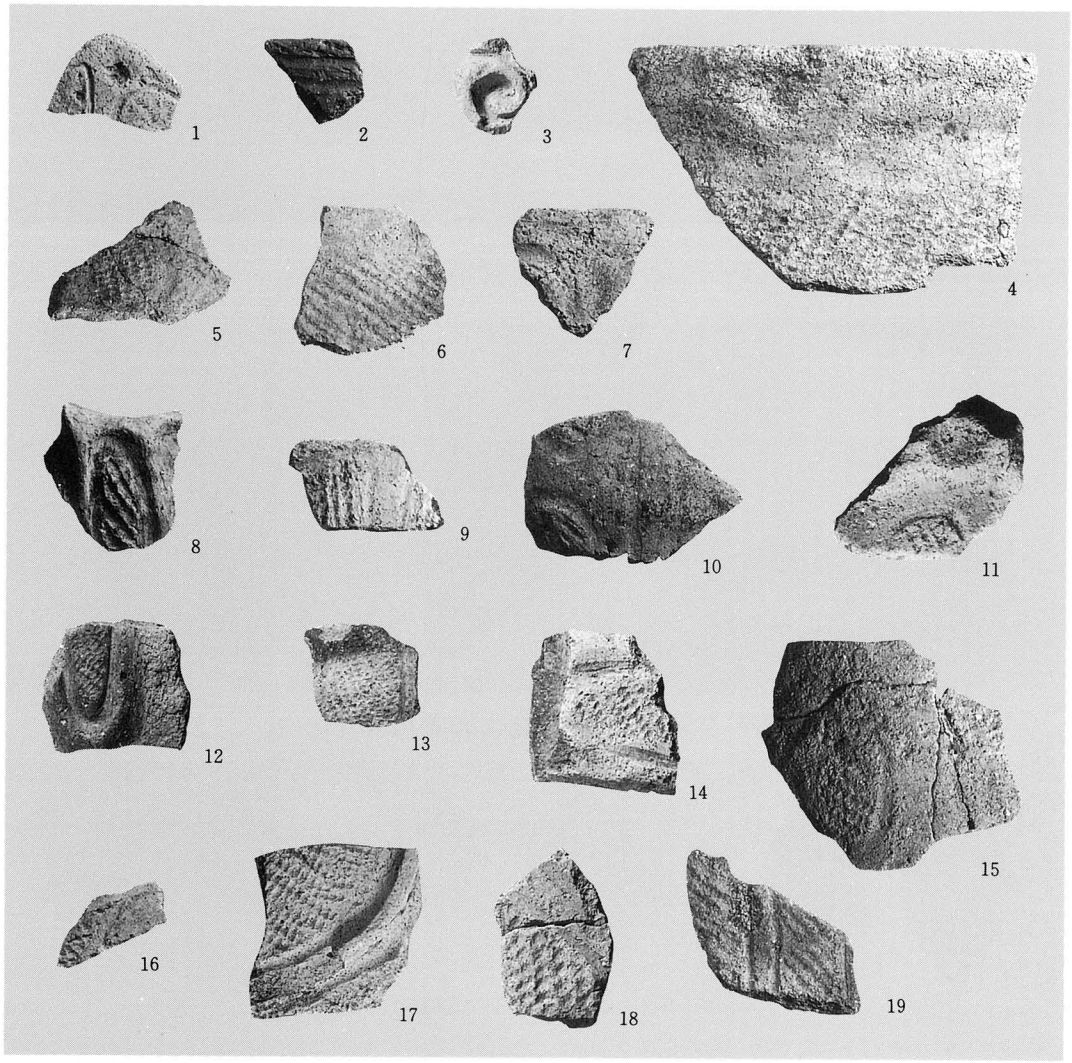


写真24 大原地区（1次調査）出土土器（第11図）

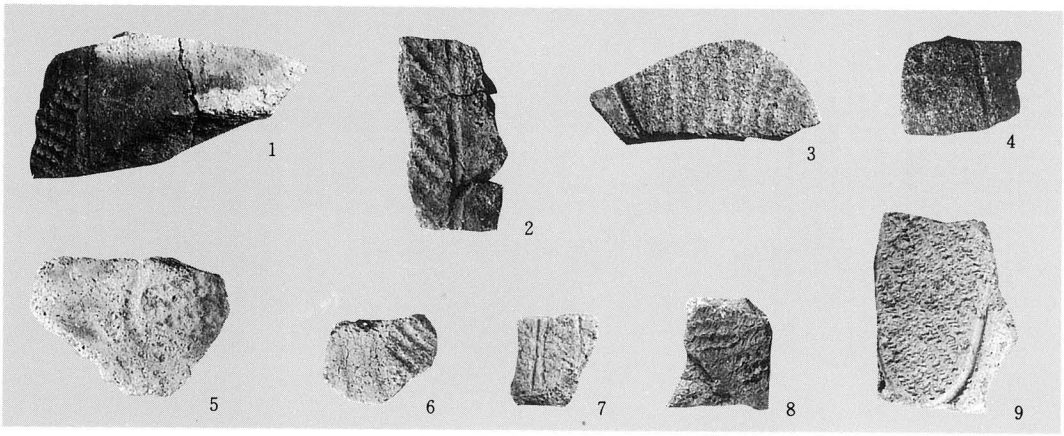


写真25 大原地区（1次調査）出土土器（第12図1～9）

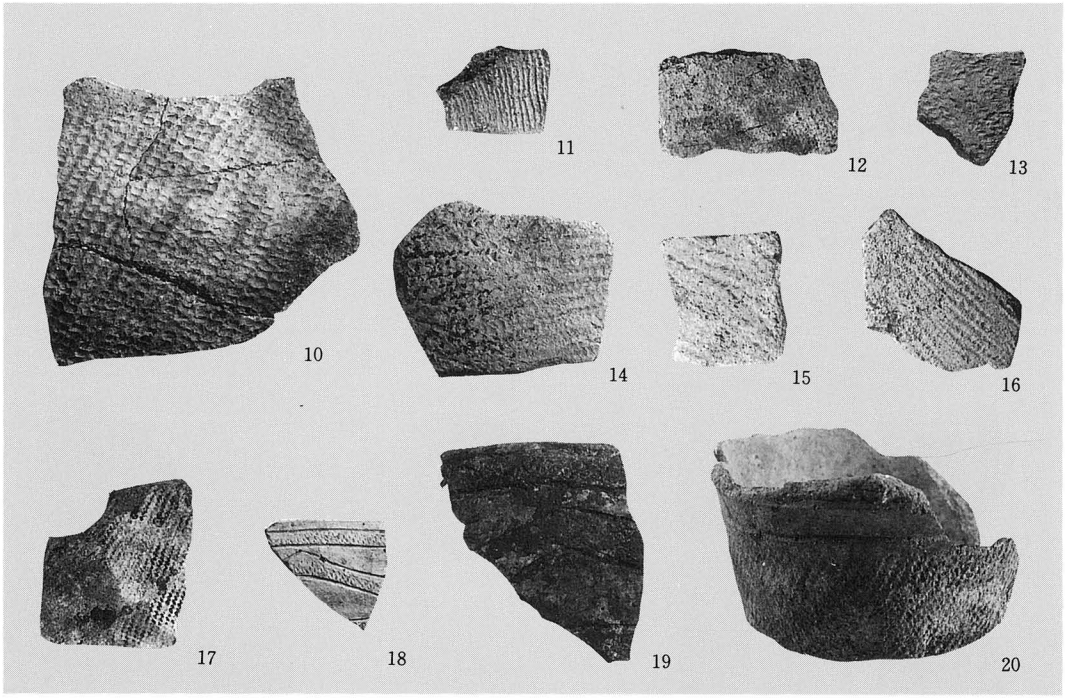


写真26　大原地区（１次調査）出土土器（第12図10～20）

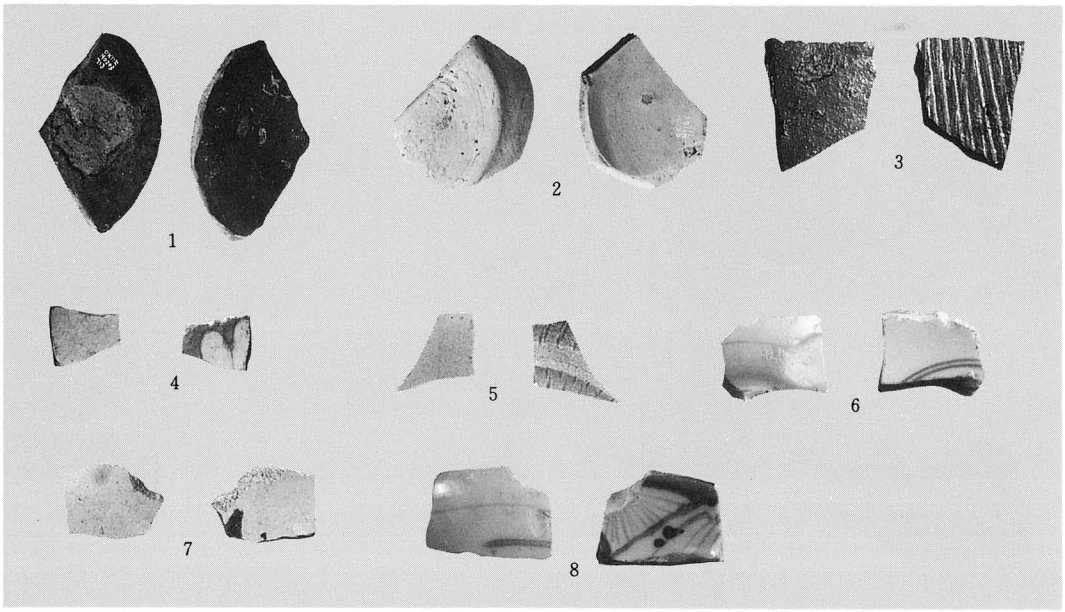


写真27　下倉地区（１次調査）出土遺物（第23図１～８）

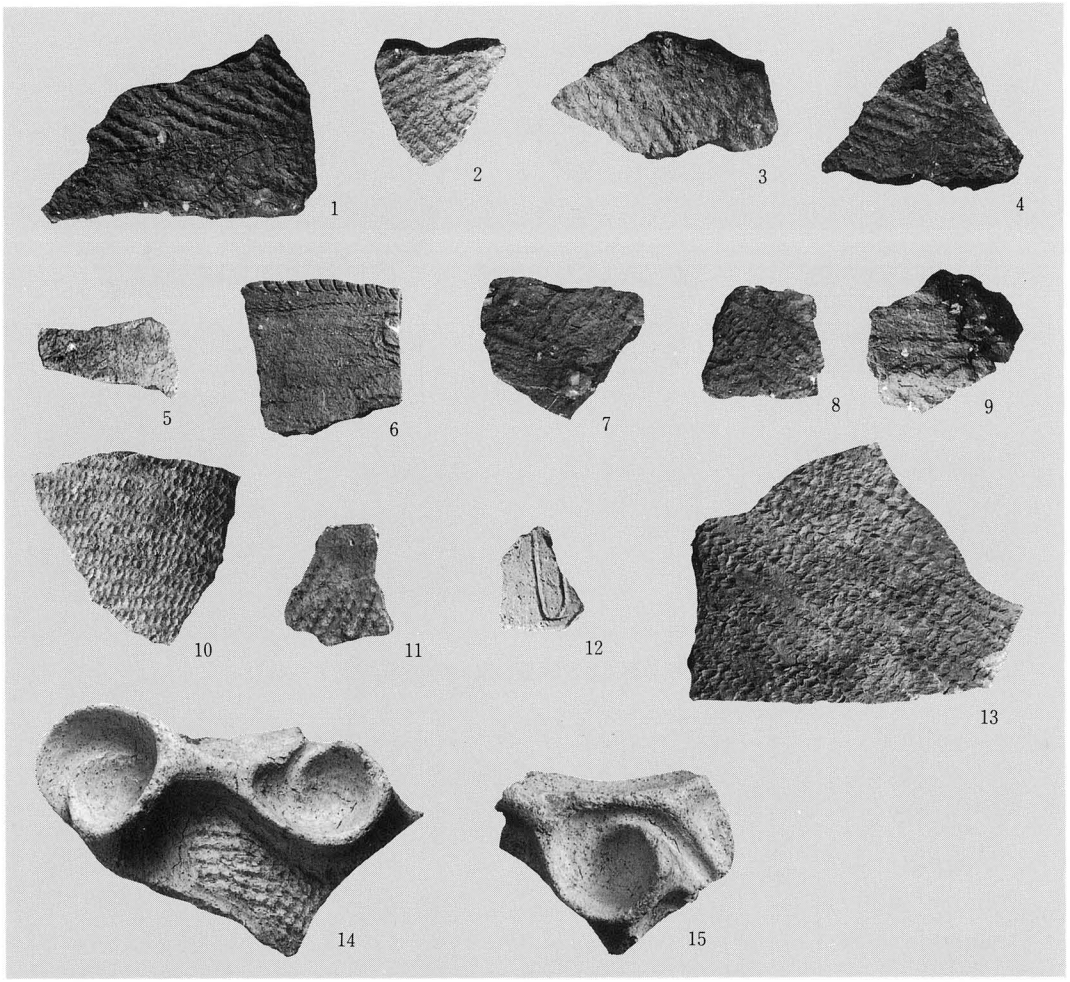


写真28　大原地区（２次調査）出土土器（第28図）

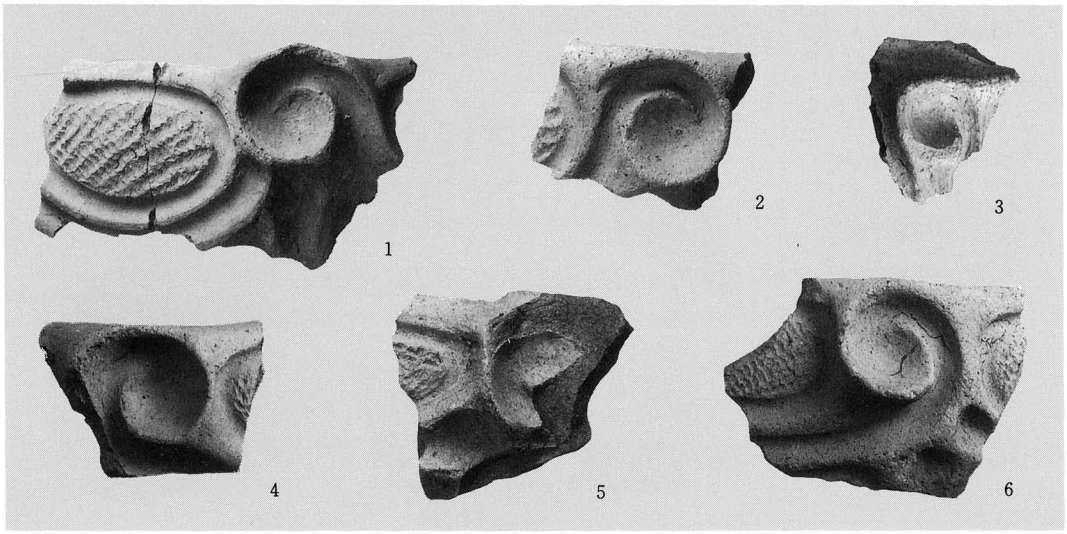


写真29　大原地区（２次調査）出土土器（第29図１～６）

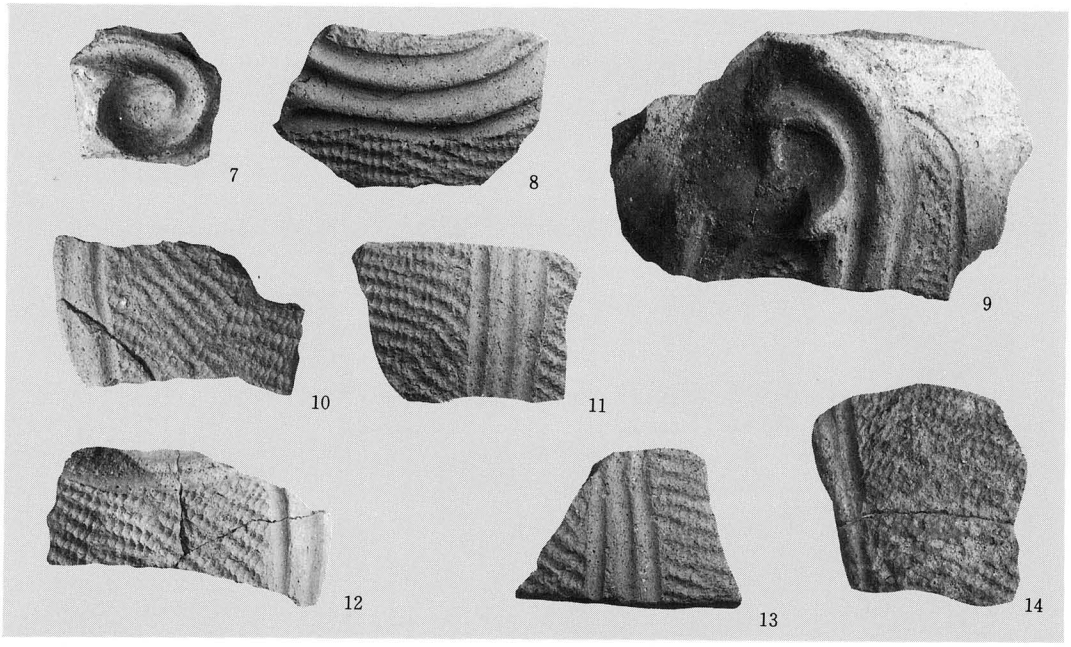


写真30　大原地区（２次調査）出土土器（第29図７～14）

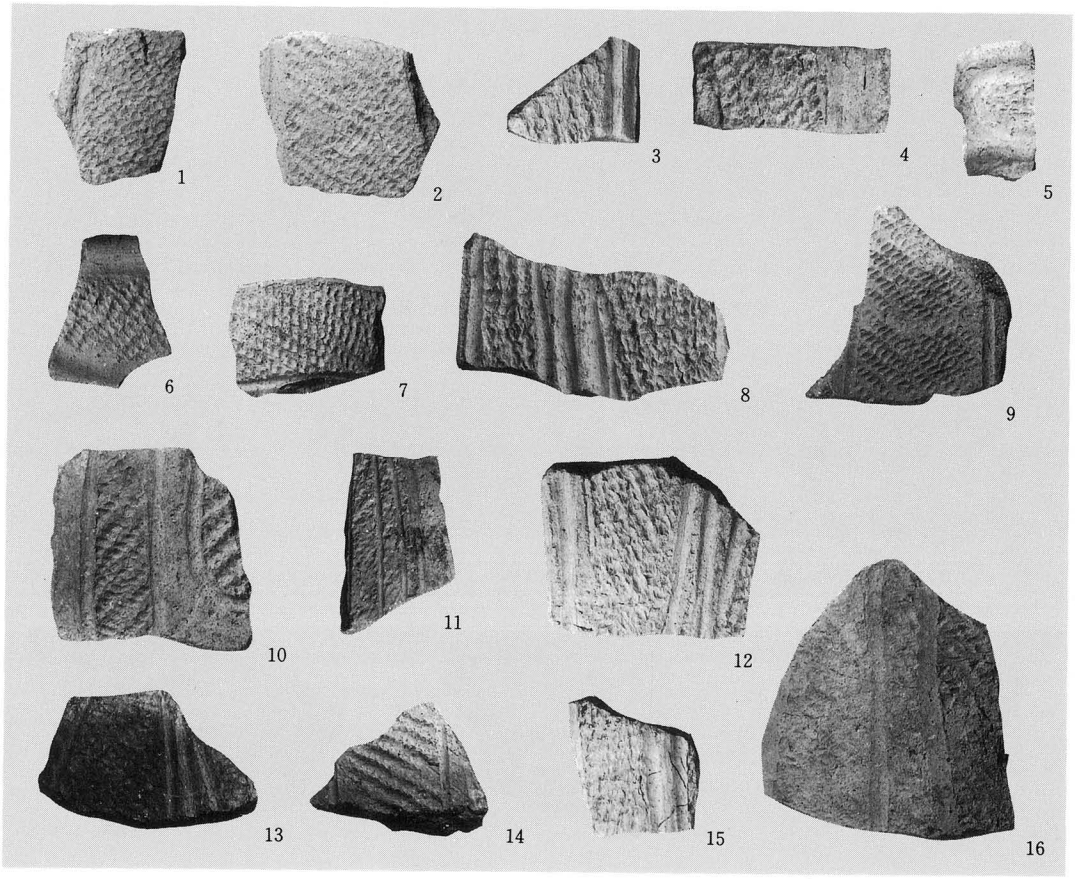


写真31　大原地区（２次調査）出土土器（第30図１～16）

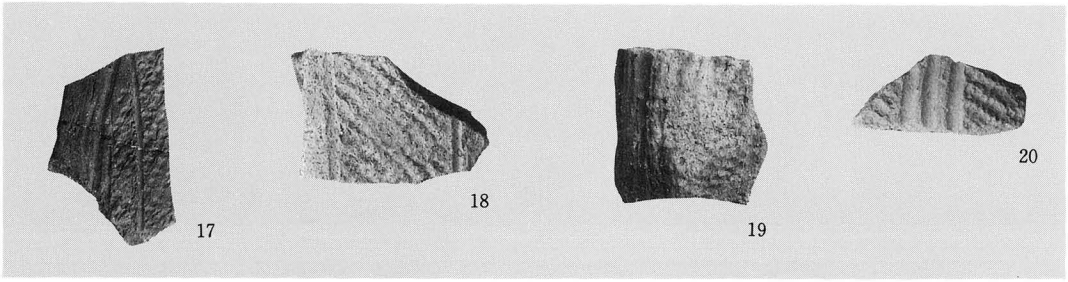


写真32　大原地区（２次調査）出土土器（第30図17～20）

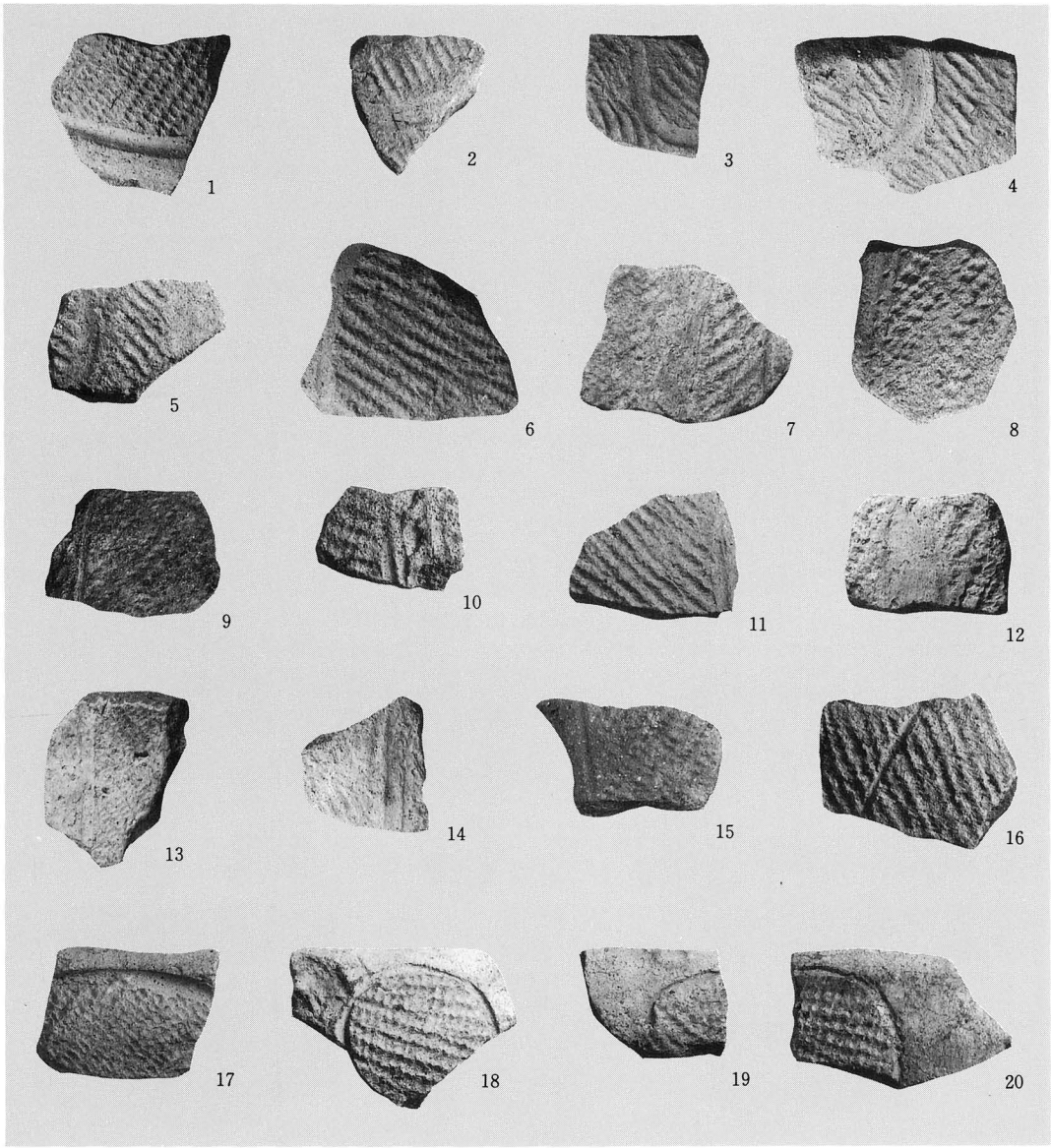


写真33　大原地区（２次調査）出土土器（第31図）

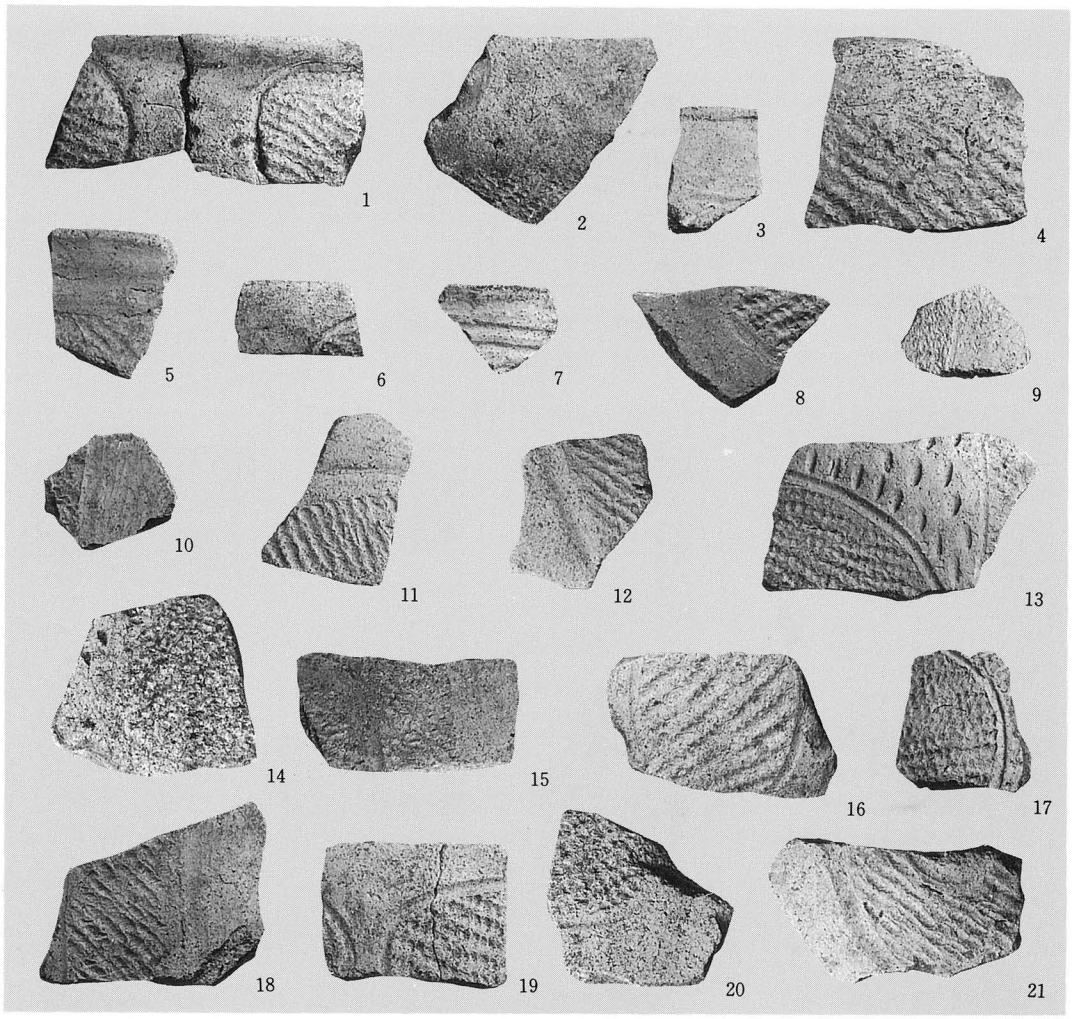


写真34　大原地区（２次調査）出土土器（第32図）

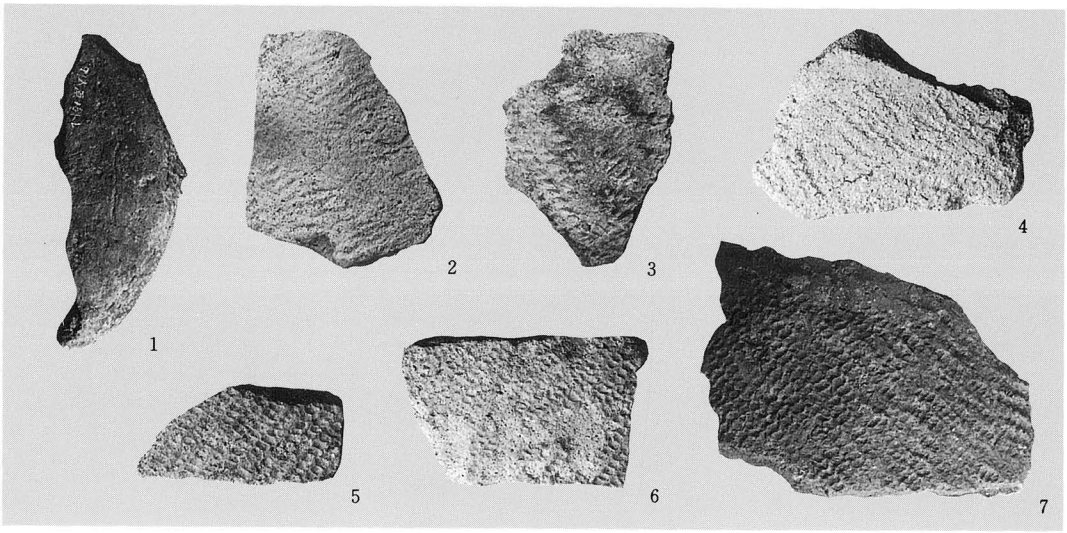


写真35　大原地区（２次調査）出土土器（第33図）

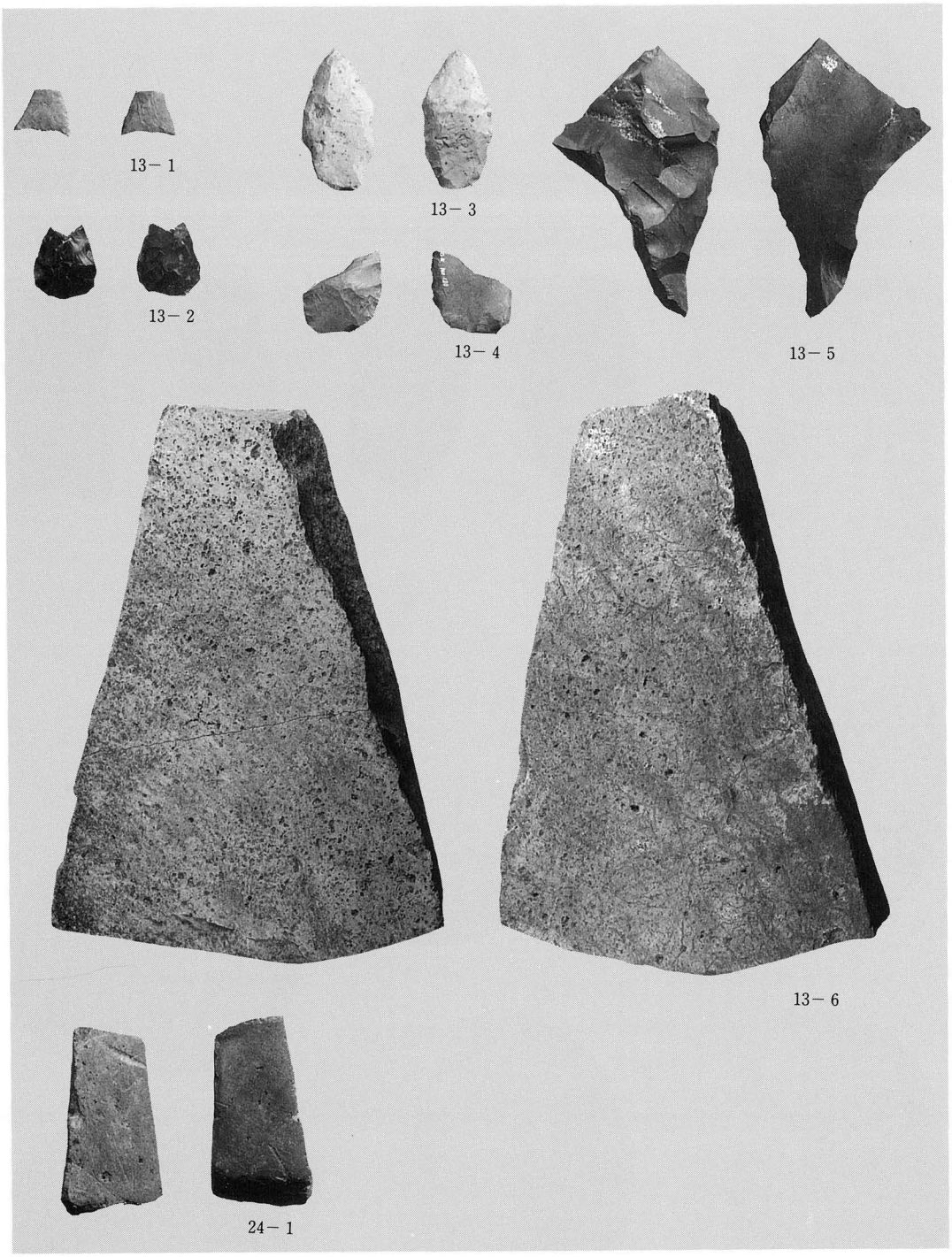


写真36　1次調査出土石器（第13図・24図1）

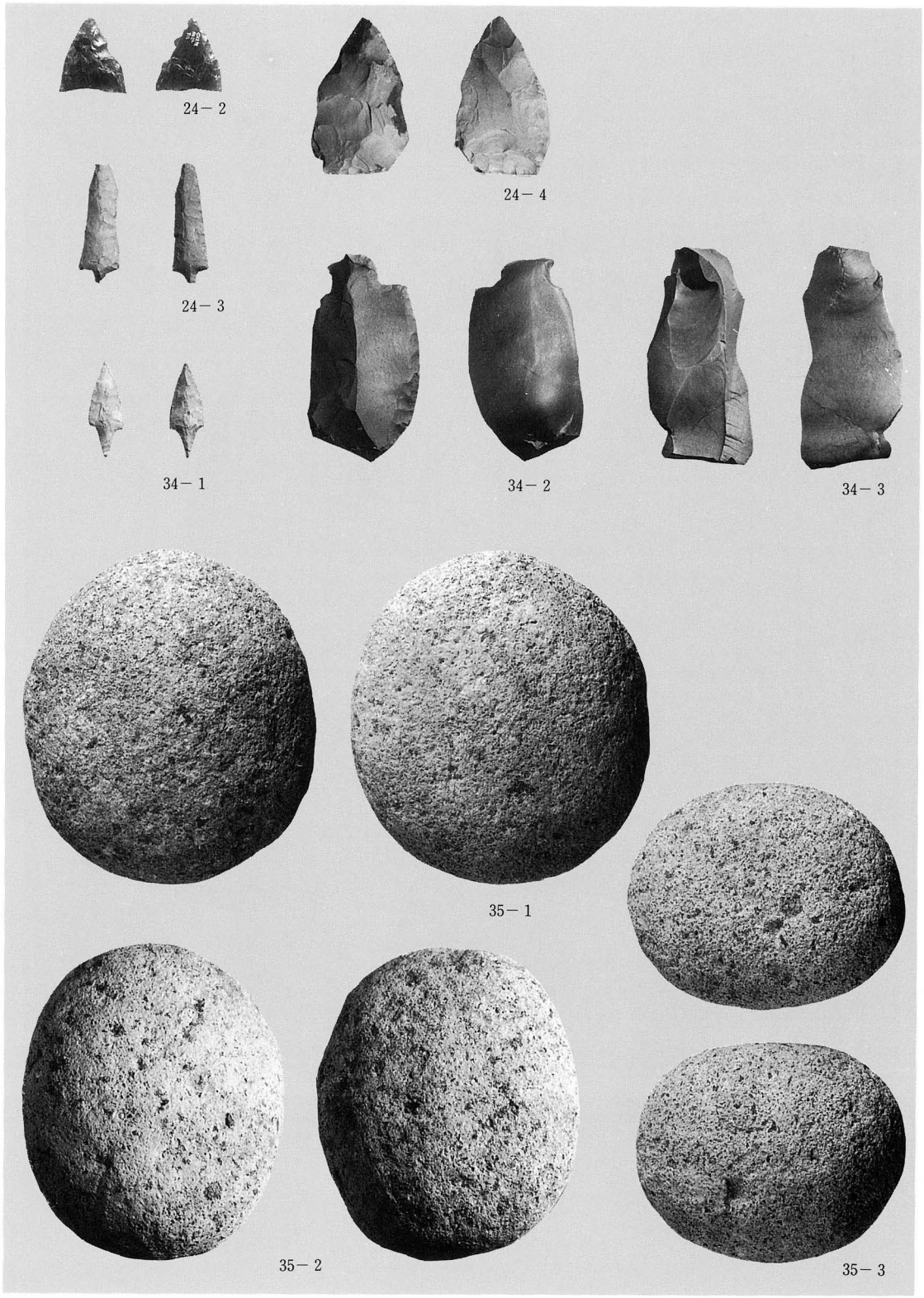


写真37　1次調査出土石器（第24図2～4）
2次調査出土石器（第34図・第35図）

文化財課職員録

課長　白鳥良一

管理係	調査第一係	調査第二係
係長　菅原澄雄	係長　田中則和	係長　結城慎一
主任　村上道子	主任　木村浩二	主任　篠原信彦
主事　福井健司	教諭　佐藤好一	教諭　太田昭夫
主事　庄司厚	主任　吉岡恭平	主任　佐藤洋
主事　齋藤栄治	主事　金森安孝	主事　佐藤甲二
主事　佐藤寿江	教諭　小川淳一	主事　渡部弘美
	主事　工藤哲司	主事　工藤信一郎
	主事　主浜光朗	主事　荒井裕
	主事　斎野裕彦	主事　中富洋
	主事　長島栄一	主事　平間亮輔
	教諭　稲葉俊一	教諭　五十嵐康洋
	教諭　菅原裕樹	教諭　神成浩志
	主事　渡部紀	教諭　赤澤靖章
	教諭　川名秀一	教諭　竹田幸司
	教諭　熊谷裕行	主事　佐藤淳

仙台市文化財調査報告書第180集

仙台市宮城地区大倉
遺跡範囲確認調査報告書

—大原・下倉地区土地改良総合整備事業関連遺跡調査—

1994年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3—7—1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24—24　TEL 263—1166